

学戦都市アスタリスク　凍氷の皇帝、歌姫と魔女の絆

夕凪の桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アスタリスク最盛期と言われた年から八年前のこと、過激派で知られる二つの統合企業財体が一人の星脈世代によつて、壊滅的な被害を受け滅ぼされた。

これは『凍氷革命』とよばれた。

その人物は氷を操り、どんなものでもたちまち氷漬けにされる。そんなことから人々は皆彼をこう呼ぶ、『凍氷の皇帝』と。

そして、革命から二年後、鳴神灰が星導館学園に入学し、中学三年間で鳳凰星武際、獅鷲星武祭、王竜星武祭を連覇し、グランドスマムを達成してしまつたのである。

そして、物語はちょうど王竜星武祭の祝賀祭から始まる。

(学校の方が忙しく、受験がしつかりと終わるまで新しい物語を紡ぐことが出来なくなりました。終わり次第投稿は再開したいと思います。

これからも学戦都市アスタリスク 凍氷の皇帝、歌姫と魔女の絆をよろしくお願ひします)

目次

序章	1
序章	2
序章	3
序章	4
間章	0
姫焰邂逅	1
新たな波紋	
襲撃	
三人が揃った日	
その夜	
束の間の平穏	
序列戦2日目	
剣の重さ	
弟子	
3人デート	
事件は終結へ	
刀雷の魔術王	
間章	1
灰のいない日常	
一章の人物紹介、用語解説	
疾風刀雷	
過去を胸に	

刀藤鋼一郎	
初めての接触	
実力の一端	
暗躍するもの	
処刑刀	
本気	
報告	
二章の人物紹介、用語解説	
鳳凰星武祭	
最終調整に向けて	
気になること	
甘えたくなる日	
鳳凰星武祭開幕	
鳴神琴音	
兄妹の時間	

184 179 175 170 165 160 155 150 146 142 138 133 128 122

序章

序章——1

星導館学園序列1位、『刀雷』と呼ばれるアスタリスク史上最強の星脈世代、鳴神^{なるかみ}灰

雷を操る能力を持つ魔術師であり、鳴神流の正当な後継者であり遠距離だけではなく、近距離においても絶対的な支配力を持っている。

彼は今回の王竜星武祭までは魔術師としての力を使わず、自分の刀一本で全ての相手を打ち負かしてきた。

だが、王竜星武祭には絶対的王者と言われた『孤毒の魔女』オーフェリア・ランドルーフエンが相手だつたのである。そこで彼は使わざるをえなかつた、魔術師としての力を。力を使つた時、観客は大いに困惑した。なぜなら魔術師であることは知つていたが使わないということはうまく使えず、戦闘の邪魔になるためという認識だつたのだ。

しかし、実際は違つた。雷を自由自在に操り彼女の瘴気を悉く打ち破つたのである。

そのまま勝負は決まり、灰は見事絶対王者を打ち破り、新しい王者として、グランドスマラム達成者として世界に名を馳せた。

ここは王竜星武祭の祝賀祭。行政区の超が付くほどの高級ホテルの宴会場。

灰は星導館の生徒会長クローディアに付き添いの元宴会場に来た。來たと言つても皆制服のためただの食事会だ。3回目ともなるとそこまで緊張もしない。最初はここに招待される各校の猛者たちや星武祭の運営委員会の幹部たちも出席しているため若干の緊張を感じていた。ただ、聖ガラードワースの『聖騎士』アーネストやクインヴェールの『戦律の魔女』シルヴィアなどに話しかけてもらい、若干あつた緊張もなくなつたのも懐かしい思い出だ。まあ、シルヴィアについては今は例外的ではあるが……

今は序列1位として緊張することもなく、自然な立ち振る舞いがで

きていると思っている。

さて、ここで一回シルヴィアとの関係について話しておこう。

灰が中学一年生の秋頃、つまり、鳳凰星武祭で圧倒的勝利を収め世界に名を知らしめた年の秋のことである。

再開発エリ亞で謎の爆発事件があり、その現場を興味本位で見にいこうとした時に、そこらへんのゴロツキに絡まれて困っているところにたまたま出くわし、助けたということがあつたのだ。

それから彼女の探し物に偶に付き合う間柄の関係になつた。それからたまに個人的なやり取りをするようにもなつたりもした。話を祝賀祭にもどそう。

「大分慣れてきましたね、この祝賀祭にも」

そう声をかけてきたのは星導館の生徒会長クロード・ディアだ。

「まさか、ここに三回も来ることになるとはね」

やれやれといった様子で肩をすくめるのは灰だ。

灰色の髪をしており、後ろ髪のひと房だけを腰まで伸ばしているのが特徴的だ。

髪色同様目も灰色である。

「あら？ ジ謙遜なさるのでですね。鳳凰星武祭を圧倒的な力で制覇をした時から私はあなたがグランドスマッシュを達成するのではないかと思つていましたよ？」

「買いかぶりですよ、会長。たしかに鳳凰星武祭、獅鷲星武祭は個人の力より連携の力が必要だけど、王竜星武祭は違う。単純な個人の力によつて勝ち抜かなきやいけない。正直この大会の前は優勝できる確信なんてなかつたさ」

星武祭を二連覇したという重責が灰にのしかかつていたのだ。

「それでも、あなたは勝ち抜いた。それは誇つていいことですよ」

優しい笑みを浮かべるクロード・ディアは灰に謎の安心感を与えてくれた。

「今回の主役もあなたなのでですから。さ、行つてくださいな」

肩を軽く押されたので仕方なく、祝賀祭の中心にいる三人に近づい

ていった。

仕方なくといつたが、口元には軽い笑みを浮かべていた。どんなことを言つても王竜星武祭を制覇してグランドスラムを達成したことは灰にとつても嬉しいことなのだつた。

足を進めると三人のうち一人であるマディアス・メサ運営委員長が灰に気づき声をかけてきた。

「鳴神君、王竜星武祭優勝並びにグランドスラム達成おめでとう。君の活躍は久しぶりに胸が躍つたよ。これからも活躍も期待するといつてももう星武祭に出れないのが悲しいね。また君の活躍が見れることを期待しているよ。改めて、おめでとう！」

手を差し出してくれるマディアス。それに応えない理由もなく、灰は握手に応じた。

「ありがとうございます」

「こここの場に私がいても話しづらいだろう、私はここから他の参加者に挨拶回りでもしておくよ。君たちはこのまま自由に過ごしてくれたまえ」

そう言つてマディアスは他の参加者の方に向かつていつた。

「メサ委員長に言葉を取られてしまつたが、優勝並びに星武祭三連覇おめでとう、鳴神君」

金髪のイケメン。聖ガラードワースの生徒会長にして序列1位、『聖騎士』アーネスト。

そして、後ろで誰にも気づかれていなことをいいことに小悪魔的な笑みを浮かべながらウインクをしてるのがクインヴェールの生徒会長にして序列1位、『戦律の魔女』シルヴィア。

もちろん灰はシルヴィアとの関係がバレないようになるとスルーするがアーネストのことだ、薄々は気づいているだろう。

「ありがとうございます。フエアクロフさん。これで少しは安心できそうです」

「君がいなければ獅鷲星武祭も優勝できそそうだつたんだけど、それで優勝したとしても何か物足りない気がするのだよ」

その言葉には次は絶対に負けないという絶対なる自信があつた。

「フェアクロフさんを退屈させないような人物が現れる気がしますよ。なんか、そんな予感がするんです」

そう、わからぬがそんな予感がしているのだ。再び捲き起ころアスタリスクの盛り上がりを。

「面白いことを言うのだね。だが、君が言うとなぜか信憑性が高そうだ。なるほど楽しみにしておこう」

普通なら信用すらされないような言葉もアーネストは自分なりの解釈で納得させた。

「そろそろミス・リューネハイムに君を譲らないとね。独占するわけにはいかないからね」

後ろでずっと話が終わるのを心待ちにしていたシルヴィアが一步前に来て、代わりにアーネストが一步後ろに下がった。

そして、やつとおめでとうを言えると思ったがある事が起ころ。

「獅鷲星武祭優勝とグランドラム達成おめつ「失礼します」」

ものすごい一くタイミングが悪い時に給仕の人が来てしまったのだ。タイミングが悪すぎてシルヴィアがそれはもう頬を膨らませていた。

「鳴神様、リューネハイム様にお手紙がござります」

「手紙？」

手紙は電子機器が発達してこのアスタリスクにおいて使われるとしたら相手に顔を見られたくないという意思表示で他ならない。

つまり、相手は自分たちに顔を見られたくないような人物なのである。

「失礼ですが、差出人の方は？」

この状況にいち早く冷静な分析をしたアーネストが給仕に聞く。

「それが、受付のものによりますと、統合企業財体の幹部の方だそうで、お名前を聞くわけにもいかなかつたそうとして、我々では判断ができるない状況でして、メサ委員長に判断を仰いだところ、お二方の判断に任せることとして」

マディアスの言いたいことは二人はアスタリスクトップクラスの実力があるんだからもし何かあつてもどうにかなるだろうという事

だろう。

「わかりました。僕は受け取ります」

ちらつと目で確認するとシルヴィアも受け取る事を灰に目で伝える。

「私も受け取らせてもらいます」

「ありがとうございます。急な申し出でご迷惑をおかけしました。それでは失礼いたします」

一礼して去つていった給仕にアーネストとシルヴィアは疑いの目を向ける。一方灰はと/or>うと。

(どこまでだ、幹部と名乗る男に今の給仕はほぼ黒だろう。あとは受付もか?いや、そこは末端のものだろう。ただ、あの給仕はおそらく地位がだいぶ上のものだろう。ばれる事を分かつた上で接触してきた。厄介な事にならなければいいが……)

灰の中ではもう黒が確定していくそこからの事を考えていた。

ただ、この手紙によつて面倒ごとという事はほぼ確定していた。

「フェアクロフさん。お願ひできますか?」

何をとはいわない、そんな事を言わなければいけないほどアーネストは馬鹿ではない。

「何かあれば聖ガラードワースの生徒会長としてではなく、アーネスト・フェアクロフ一個人としてい君たち二人に力を貸そう。気をつけてくれたまえ。それでは」

そう言つてアーネストは他に来ている聖ガラードワースの人たちの所に行つた。

二人は頭を下げるわけにもいかず、心の中でお礼を言つた。

「シルヴィー、内容を確認しよつか」

「そうだね、せつかくフェアクロフ君が空氣を読んでくれたんだし」

灰はシルヴィアの事を二人つきりの時にはシルヴィーと愛称で呼んでいるのだ。

手紙を開封しその中身を読む。白地に活字がびっしりと書かれて

いたが、大まかな事はオーフエリアの命を助けたければシルヴィアと二人で再開発エリアの沿岸部に来いという事であつた。それが丁寧な言葉で長々と書かれていた。

「シルヴィ、一旦寮に戻つて変装してきて、そしたら僕の家に来て。そこから向かおう」

「わかつた。時間差も必要だし、私が先に出て行くね。受付はどうしよつか？」

受付、二人の予想では呼び出した連中の仲間であるはずだから、出て行けば連絡が行くだろう。

「多分それは気にしなくてもいいと思う。突然襲つてはこないだろうし」

「だよね、なら、また後でね」

走らず普通に歩いて会場を去つていくシルヴィア。

ここで今回なぜオーフエリアが出てきたのかを説明しよう。

オーフエリアと灰が直接会つたのは一回、一回目は去年の冬、シルヴィアに頼まれて再開発エリアである事を調査している時に襲われ撃退、その後和解が成立した。この時に色々と1時間ぐらいはなしてたりもした。二回目は今回の決勝戦。

仲がいいというよりかはまあ、軽く話す程度の関係だが、一回目から決勝戦の間にあつた事も話した事もなかつた。ただ、それで見捨てるほどの無関係ではないし彼女の経歴を軽くでも知つている今はほつておけないので。

まだ、シルヴィアとの時間差が短いため、灰が中央区外縁部に家を持つている理由を話そう。

これは序列1位となつた権限及び鳳凰星武祭優勝の権限により外に家を持つ事が可能になつた。もちろん学内の寮にも部屋はある。こちらは週に一度掃除してもらつたりしている。特別な貴重品は学外の家に全て運んだ。

特例で家を持つ事ができたが、特別豪邸なわけなく、普通の一般的な家である。むしろ、学内の寮の方が広いというのである。だが、この家も一人で暮らすには十分過ぎる。

シルヴィアが会場からいなくなつた後、数人もまた会場から立ち去つたので灰も会場を後にする。

そして、灰たちの怪しいと予想した受付では。

『報告です、シルヴィア・リユーネハイム、及び鳴神灰、両名がホテルから出て行くのを確認しました』

『おおよそ時間通りだな。よし、交代時間になつたら目標地點に合流しろ』

『了解しました』

灰が予想した通りの展開となつていた……

シルヴィアが寮に到着し、変装している頃ぐらいに灰は自分の家に到着していた。

家に入り、灰は他の部屋と違ひ厳重に鍵が掛けられている部屋を開け中に入る。明かりをつけた。

そこには二本の純星煌式武装の発動体が台座の上に置かれていた。片方は『冰青の天界剣』。『凍水の皇帝』の使つていたとされる最強の純星煌式武装。

もう片方は『雷桜の断罪剣』。誰も知らない純星煌式武装。だが、その力は『冰青の天界剣』に匹敵する。

なぜ、灰がこんなにも強力な純星煌式武装を持つているのかというと、彼が『凍水の皇帝』だからだ。

自らこの二本を作り出し、統合企業財体との戦いが終わつた後に自分の家を入れた後封印した。しかし、何かあつた時のために近く

には置いておく事にしたのだ。

「こいつらを持つていくか悩んだが、こいつらも久しぶりに暴れたいのかもな……。この嫌な予感、外れればいいが外れた事がないからな……。もしものときは力を貸してくれ……」

そう言い二本を持つて行く事にする。

灰も変装をしシルヴィアが来るのを持つ。

ちなみに灰は髪の毛を灰色から黒に変えて目立たないようにする。茶色の長ズボンに灰色の薄めのシャツ、青のパーカーを着て安めのコートを着る。流石に薄着すぎると冬なのに目立ちすぎるからだとまあ、軽く考えてこんな感じに収まった。

もちろん、少しは考えてはいる。何も考えてない事がバレるとシルヴィアに怒られるのだ。

ちょうど玄関の呼び鈴がなり、シルヴィアが来た事を告げる。

扉を開けると変装したシルヴィアがいた。髪の毛を栗色に変えていつもみたいに綺麗に髪の毛を整えず、無造作に縛っているだけの状態だ。

服はジーパンにコートを着ておりその中はどんな服を着ているかわからないが、白のブラウスに水色のカーディガンを着てたと後でわかつた。

「それじゃあシルヴィ、オーフエリアの所に行つて手紙の差出人に挨拶しに行こか」

そういう扉を閉め二人で並んで軽く走り出す。夜遅いため人もほとんどおらず、誰も一人に気づかない。

「そうだね、オーフエリアさんほどの実力者が人質となるつてことは相手はそれ以上実力者なのかな……」

「わからない、でも、やれることはやるらないとね。それにシルヴィは絶対に守るから。オーフエリアの事を出しておびき出すつていうことは多分僕のことだろうし、巻き込んでしまったから」

申し訳なさそうにする灰、だが、シルヴィアは守られるだけ嬉しいと感じる人間ではない。

「もうー、怒るよ？たしかに、オーフエリアさんの事に巻き込まれたのは私が灰君と一緒に色々嗅ぎ回っていたからであって、私の責任。だから、そんなこと言わないで。それに君が守ってくれるんでしよう？だつたらこの世界に安全な場所はないんだからね」

つくづく灰はシルヴィアには勝てないなと思うのだつた。

「もちろんさ。さて、なら囚われのお姫様でも助けに行きますかつと！」

このとき、灰の心の中にあつた不安は今消えて無くなつたのだつた。

「…………どつちが守られてるんだか…………」

そう呟いた言葉をシルヴィアが耳にすることはなく、二人は再開発エリアの指定された場所に到達した。

序章——2

二人がたどり着いたのは再開発エリアの外縁の大通り全く車通りもなく、異様な静けさが辺りに充満していた。

その中で一際目立つのは通りの真ん中に血を流して倒れているオーフエリアだ。

「…………！ オーフエリア！！」

まさかいきなりこのような仕打ちをしてくるとは思いもよらず、灰は冷静さを失いかけた。

慌てて二人は駆け寄り、オーフエリアの容態を見る。

「ひどいね、星脈世代じゃなかつたら即死だろうに…………」

「右手と左足に剣による刺し傷、左腹部に穴が空いてるから内臓に傷がついてるかもしれない。それに無数の切り傷と擦り傷。早急に医者に診てもらわないと…………」

オーフエリアの容態は予想以上にひどく、病的なまでに白かつた肌もさらに血の気が悪く、青白くなっていた。

これはオーフエリアの命が後少しで尽きる可能性が高いということをしめしていた。

「灰君どうしよう、私の能力でも怪我は治せないよ…………」

灰は立ち上がり自分のコートを脱ぎ、オーフエリアに優しくかけてあげる。

そして、自分のパークーも脱ぎシルヴィアに渡す。

その姿が死ぬことすら厭わない姿に見えてシルヴィアは泣きそうになる。

「シルヴィ、これをちぎつて右手と左足の傷を縛つて止血してあげて。あと、水を作つて小さな傷のところを綺麗にしてあげて。少しは楽になるとと思うから」

「灰君は！ 灰君はどうするの!!」

シルヴィアも灰と同じく自分たちの事を見ている二十人ほどの気配に気付いており、一人一人が自分を超える実力者である事がわかり、灰のことを心配する。たとえアスタリスク最強の星脈世代だとし

てもだ。

「オーフエリアをこんな姿にした奴らをお出迎えしなくちゃいけないらしいからね」

「でも!! そんなこと、そんなことしたら……」

顔を伏せ、灰の顔を見ることができない。

「泣くな、シルヴィ。僕のことを、信じてくれる、なら、僕は必ず帰つてくるよ」

自分でも似合わないセリフを言つたものだと心の中で苦笑している。

「信じしてる。前からずっと君のことは信じてるよ」

「なら…………これにその気持ちを込めてくれれば僕は必ず帰つてくれるよ」

灰は懐から2つのネックレスを取り出しシルヴィアに手渡す。1つは青い宝石がもう1つは黄色の宝石が埋め込まれている。

「オーフエリアが目を覚ましたら1つ渡してあげてほしい」

そして、灰はシルヴィアとオーフエリアに背を向け離れていく。彼女らを戦闘に巻き込まないために。

オーフエリアほどの星辰量保持者ならかなりの自己再生能力があるはず。といつても大怪我がすぐ治るわけではなく、小さい傷なら少し経てば治ることや、意識が回復するまでの時間が早くなることぐらいだが。

それでも、意識が回復することは大切である。

「今回も頼むぞ、『雲霧』」

腰から刀を抜き放ち、中段に構える。『雲霧』の刀身は普通の刀と違った青みがかった刀身で、今のアスタリスクでこの刀は抜き放たれれば相手に必ず勝利すると言われる生ける伝説だ。

「貴方ならここに来てくれると信じてましたよ。鳴神灰君」

突然、辺りに男か女か性別がわからない声がした。

暗闇から声が反響してきてどこから喋りかけているのかをわからなくしているようだ。

「ソルネージュのお偉いさんの特殊部隊さんたちは僕たちに何の用でしようか？」

ソルネージュ、レヴォルフの運営母体たる統合企業財体。今回のことは全部ソルネージュの企てと見ていいだろう。

「さすがの観察力です。上からもおそらくされているだろうと言わされましたが、予想通りですね」

「僕たちのことを狙うとしたらレヴォルフかその上のソルネージュしか無いですからね」

灰は自分たちの周りにいる正確な人数を掴みどう対処するか考えていた。ただ戦つても被害が後ろの一人に及ぶ可能性があるからだ。「ですが、こちらの正体がばれているのであればなおさら生かしてはおけません。安心してください、彼女たちは貴方を殺したあとに殺して差し上げますので、安心して本気を出してくださいね？」

暗闇から響くこの声の主は灰の考えていたことを読み取つたらしい。

「それを守ってくれるという保証はどこにあるんですかね？命のやり取りをするような相手の言葉、簡単に信じるとは思っていないでしょうね」

シルヴィアとオーフエリアを狙わないと言われて、はい、そうですかと言つて納得するほど灰は間抜けでは無い。

「それは十分承知ですよ。ただ我々もこの手のプロを自称してましてね、こういう事をしてますと契約は絶対として、一度言つたことは絶対に曲げないのが我々のプロとしてのプライドです。そこはそうとして信じてもらうしかありませんね」

悩ましげに説明をする声の主。これ以上刺激しすぎるとせつかくシルヴィアとオーフエリアを狙わないと言つてはいるのに、二人を狙いかねない。

「わかった。いいでしょ。貴方の言葉信じてあげます」

灰もこの声の主を信じることにして覚悟を決め、死闘の開始を今か今かと待つ。

「シルヴィ、一度抜き放たれた剣は血を吸わないと鞘に収まることは無いから。ここからは血が絶対に流れる。見たくも無い光景かもしれない。でも、どうか見届けてほしい」

そう言うと灰は前方に現れ始めた黒づくめの集団に斬り込んでいく。

↙↙↙シルヴィア s i d e ↘↘

わたしは、ここに来て無力感を感じていた。灰君は今日の前で死闘を繰り広げていた。灰君から渡されたネットクレスの青い方はオーフエリアさんに握らせてあり、わたしのはオーフエリアさんを手当している右手の手首に巻きつけた。なんとなく、灰君の力を借りられるような気がしたのだ。

灰君は今ちょうど三人目を切り捨てたところで、同時にすでに10を超える傷を負っていた。何個かは軽視できないような傷から血が流れ出ている。

一人の攻撃をはじき返したところでまた別のところから攻撃が来てまともに反撃すら出来ないような状況で、少しでも甘い攻撃が来た時に無理矢理攻撃をねじ込み、確実に致命傷を与えていく。肉を切らせて骨を断つ。まさにのことだが、灰君は長くは保たないとわたしは思った。すでに灰君の灰色の髪の毛は返り血と自分の血で半分以上が赤く染まっていた。

自分が行つても足手まといにしかなれない、そんな自分が嫌いになりそだつた。

「…………う、…………あ…………シル、ヴィア…………？」

「オーフエリアさん！よかつた目を覚ましたんだね。…………良かつた…………」

目が覚めたばかりで手足に上手く力が入らないのかゆつくりと体を起こすオーフエリアさん。

「早く逃げて、…………あいつらは灰でも敵う相手じゃ無い…………」

「えつ…………でも、今は灰君が…………」

戦っていると言おうとしたとき、甲高い音が辺りに鳴り響いた

……。

／＼＼シルヴィア side out／＼＼

すでに八人まで斬り伏せた灰だが、それと同時に『雲霧』が甲高い音を出して刀身の真ん中から先が粉々に砕け散り、それらはさらに細かくなつて地面に落ち、消えてしまつた。そして、奇妙なことに黒づくめの集団は一歩後ろに下がり体制を整えた。

後ろをチラ見するとオーフエリアがシルヴィアの手を掴むことを確認する。ここでシルヴィアが来てしまつたら今の状況が崩壊してしまう。

「なるほど、ただ『マナダイト』を使つていると思つたら刀身の約半分を『ウルム・マナダイト』で構成することで通常のものより高い耐久力と切れ味を誇つていたということですか。面白い考えですね」

ただ見ただけで『雲霧』の隠された秘密について簡単に暴いてしまうこの声の主に灰は目線を向ける。

一番後ろに立つており、腕組みをして戦いに参加しようとしない謎の人物。それにより一層警戒の目を向ける灰。だが、灰に焦りは全くない。どこかまだ余裕があるようと思えた。

「そろそろ諦めたらどうですか？ 刀は碎け、貴方の星辰量もほぼ底をついてるのでしよう？」

丁寧な口調を全く崩さないあたりからこの人にとってまだ焦るような事態では無いのだろう。まるで想定内とでも言いたげな、そんな雰囲気がある。

「はははは、面白いことを言つてくれるのですね」

普通の人間ならまず笑わないような状況なのに、突然笑い出す灰。後ろでずっと見守っていた二人も何事かと驚く。

そして、同時に灰と話していた黒服がフードを脱ぎ、睨め付けるかのような表情で凝視していた。

「やつと、わかりましたよ。この不快感が！貴方はずっとギリギリの状況でもどこか余裕があつた。それが私をこの上なくイラライラさせるのです！」

声の主は白髪の男で、さつきとは比べ物にならないほど冷静さを失っていた。

「そう、まるで自分はまだ全力を出していいかのように…………この私を見下して愚弄するつもりか!!!」

もはや最初とは違い、理性的ではなくなり、ただ感情に左右されているこの男に灰はこう告げる。

「惚れてる女を守っているつていう、男にとつて一番かつこいい状況だから、必死な姿より余裕があつた方が安心もできるだろう？」

そして、一息ついて灰はこう叫んだ。

「それに、僕は二人と約束したんだ！必ず帰ると！必ず助けると！だから、絶対に負けるわけにはいかないんだ！」

今までの灰とは違い、理性的な部分に感情的なものが姿を現し始めていた。

「貴方はもつと理性的な人物だと思つていましたよ。しかし、まさかここまで愚かだつたとは…………女のために捨てられるような軽い命ではないはず！あなたは自分より惚れた女を大事にするのか！」

もうこの男は止まらない。自分の思つたことをそのまま灰にぶつけているだけだ。

「命を賭けるといつたが、死ぬつもりなど毛頭ないさ、死んでしまつたらまだ伝えてない想いを伝えられないだろ？」

灰の言葉がよほど頭にきたのかさつきとは違い、殺氣を隠すことなく灰にぶつけて来る。

この男が怒り心頭で言葉遣いがどんどん荒くなつていくと同時に

灰はだんだんと冷静さを取り戻すことが出来ていた。

「愚か者は死になさい。目障りです!!!!」

初めて怒声を放ち一斉に灰に襲いかかってくる。だが、それと同時に灰は二人に渡したネックレスを通じて入つてくるものを感じていた。

「ふつ、愚か者かどうか、証明してあげよう……」

首からシルヴィアとオーフエリアに渡した同じ形のネックレスを取り出し、首にかけてある状態から一気に引きちぎった。

真ん中に埋め込まれた虹色の宝石が暗い周囲をほのかに照らした。その瞬間、星辰量が底をつきかけていた灰から莫大な星辰量が解放され、一種の暴風となり周囲の人間を視界を塞ぐ。

／＼＼オーフエリア side＼＼＼

わたしは、灰とシルヴィアを殺せとソルネージュに言われた。前のわたしだつたらそれに何も言わず従い、二人を殺そうとしたかもしれない。まあ、あの二人にわたし一人とソルネージュの暗殺者がいたところで相手にすらならないわ……。

彼に初めて会った時、わたしは手も足も出なかつたのを今でも思い出す。どんな魔法も彼の眼の前では斬り伏せられた。無味無臭の毒で周囲を覆つてしまつたとしても、彼は息を止め切り抜けられた。信じられなかつた。後から聞いた話によると彼は自分で肺の中の空気を循環させ心拍数を戦闘に必要なギリギリまで落とし、息を吸わなくて戦闘できる時間を十五分まで引き延ばしたらしい。

近距離の戦闘はからつきしだからそれがどれだけ凄いかはわからないけど、私では到底できないようなことを軽々とやつてのけていることだけはわかつた。

彼に倒された。いや、彼は決して本気を出していなかつたから、ずっと遊ばれていただけかも知れないとね。

でも、そうだとしても怒りなんてなかつたわ。むしろ清々しかつた

わ。

魔女としての力を得てみんな私を恐れ、周りから去つていった。人たち私は最強の道具とし扱つた。むしろそれでいいと思った。もう誰も人として私に接することは無いだろうと思った。

でも、あの時、彼は私をして、一人の女として接してくれた。その時にずっと溜め込んでいた悔しさや悲しさが一気に溢れ出して彼に泣きついてしまい、慰めてもらつた。凄い恥ずかしかつた。でも、心の中に立ち込めていた黒い霧のようなものは全て彼によつて全て取り除かれた。

その時気づいたの。私は彼に恋してしまつてゐるということに。

彼の戦闘、いや死闘と言えるものは目を背けたくなるようなものだつた。

彼は血を流し、どんどんボロボロになつていく。そんな姿見たくなかつた……

体が少しずつ動くようになつていくことを感じながら灰の戦闘からは目を離さないようにしてゐた。それがオーフエリアにできる唯一のことだから……

だがその時、灰の愛刀、『雲雫』が甲高い音を立てて砕けてしまつたのだ。

そのことにシルヴィアは駆け出そうとするが、慌てて手を摑む。「待つて、シルヴィア。それだと彼の信頼を裏切ることになるわ」

なぜ止めるのか、そのことに対する焦りが珍しく露わになつてゐる。

「なんで止めるの、このままじゃ、このままじゃ灰君が…………」「灰は貴方になんて言つたの？」

今にも泣きそうなシルヴィアだが、灰のことを完璧に信じてゐるオーフエリアは意識が薄れ正在中、灰が必ず帰つてくるといつたこ

とは聞こえておりその約束は絶対に破ることは無いとオーフエリアは思っていた。

「必ず、必ず帰つてくる。でも……『惚れてる女を守つているつてい
う、男にとつて一番かつこいい状況だから、必死な姿より余裕があつ
た方が安心もできるだろう?』

『シルヴィア、貴方は彼が好き?』

『僕は一人と約束したんだ!必ず帰ると!!必ず助けると!!だから、絶

対に負けるわけにはいかないんだ!』

「…………うん、好きなんだと思う。…………ううん、好き、私は
 灰君のことが好き!!!!」

「私もよ。私も灰のことが好き」

 その時、シルヴィアはわかつた。なぜ、オーフエリアがここまで落
 ち着いているのかを。

 好きな人の言葉を信じられていなかつたシルヴィアは自分を恥じ
 た。自分の想いと向き合わなかつた自分を。

 そして、二人は理解する。自分たちの本當にするべき」とを。

 灰から渡されたネックレスを両手に持ち、灰を信じる心を。好きだ
 という気持ちを乗せてネックレスに込めた。

「お願い灰君。帰つてきて……」

「灰、私との約束守つてくれるんでしょ……」

 二人の想いに反応したかのように宝石が強く発光する。

 ↙↙↙オーフエリア side out ↘↘↘

序章——3

周囲が灰の星辰量が暴れ狂い暴風と化しているため、少し離れているところにいる黒づくめの暗殺者たちを軽く吹き飛ばすが、シルヴィアとオーフエリアの方には暴風の影響はない。そう、まるで意志を持っているかのように彼女らの間をすり抜けて行く。

ここまで大量の星辰量を完璧に制御し得る人物とは二人には灰以外想像できなかつた。

そして、また再び暴風に変化が起ころ。広がつてゐる星辰量がピタツと動きを止め、どんどんさつきとは逆の方向、つまりこの星辰量の持ち主たる灰の元へ集まり始めた。しかし、いくら灰でも、これほどの星辰量を取り込んだらひとたまりも無いとそう思えた。

この時、オーフエリアは自分の体にある傷が綺麗になつてることに気づいた。

激痛で意識を繋ぐためにできるだけ傷を意識しないようにしていつたが、突然自らを襲う激痛がなくなつたことに気づいた。

「ねえ、シルヴィア……」

自分の負つていた怪我はたとえアスタリスクの治療院でも全治数ヶ月かかるような怪我なのだ。内臓に傷が付いている以上もしかしたら数ヶ月では済まないかもしれない。

だが、今はどうだらう内臓がダメージを負つているような感じはせず、無理やり治したかのような強引な治療ではなく、丁寧に治療されたようだつた。

「なん、で……オーフエリアさんの傷が……」

シルヴィアも目を見開き、何が何だかわからないようだ。彼女の万能たる力でも傷を治すことはできないことはたつた今痛感したところであつた。

そして、灰の雷の力では治療などできないと分かりきつてゐるが、それでも尚、オーフエリアの傷を治療したのは灰だと確信していた。そして、それはオーフエリアも同じであつた。

このような現象を起こしている灰以外に大怪我を一瞬で治すよう

なことはできないと思つたからだ。

「わからない…………でも、灰のお陰であることはわかるわ」

その眼は今も暴風の中心にいるであろう灰のことを正確に捉えて
いるように見えた。

「なんで、オーフエリアさんは灰君のことをそんなに信じることが出
来るの？好きってだけじゃここまで…………」

シルヴィアはわからなかつた。灰のことを好きであることに変わ
りは無い。それは自信を持つて言える。彼がたとえどんな強大な力
を持つっていても彼のことを好きでいる自信はあつた。それでも、なん
でオーフエリアが灰に全幅の信頼を簡単に置くことが出来るのか、そ
れがわからなかつた……

「灰は…………私の全てだから…………。彼は暗闇の中から私を引つ
張り出してくれた。何もなかつた私に生きる意味を与えてくれた」

オーフエリアの言葉はシルヴィアにとつて初耳だつた。灰とオー
フェリアとの関係はどんなものか知らなかつたが、それでもオーフエ
リアの想いは十分伝わってきた。

「彼がどんな悪魔であつても、私は彼を信じる。運命つて言葉はもう
使わない。そう、これは私の覚悟。彼に添い遂げるという私の覚悟
よ」

オーフエリアの想い。それは本当に純粹な恋心であるとシルヴィ
アは痛感した。でも、人それぞれの恋の仕方がある。そう思えている
今はオーフエリアに嫉妬などしなかつた。

「これは完敗だなあ…………」

嫉妬はしてないが、悔しさはあつた。

「負けてないわ。引き分けよ。むしろ私の方が負けてるかもしれない
わ」

「えつ…………」

予想外のことをオーフエリアに言われ、困惑するシルヴィア。な
ぜ、そんな事を言つたのか聞こうとしたが灰の姿が段々おさまつてい
く星辰量の嵐の中に確認でき、これから成り行きを黙つてみまるこ
とにした。それが何よりも自分たちがしなければいけないことだか

らだ。

「シルヴィア、オーフエリア side out」

灰は自分から濁流のように体外に漏れ出ている星辰量のうち、まずはシルヴィアとオーフエリアに向かっていく星辰量の制御を真っ先に行い、その次に自分の体内の星辰量を制御した。

しかし、自分の体内に宿る無限とも言える星辰量を制御するのにいささか手間取ってしまう。なにせ三年ぶりなのだ、感覚をすぐに取り戻した灰はさすがとも言える。

「……やつと本来の自分に戻れたようだな…………」

手を何回か握り直し、改めて自分が力を取り戻したことを感じする。

そして溢れ出ていただけの星辰量を自らの体内に呼び戻す。

さつきまで底をついていた星辰量が今では身体中に満ち溢れていた。

最後の星辰量が灰の中に戻り、星辰量の影響で吹いていた風も收まりつつある。

完全に風が收まり、中心部にいた灰の髪の毛は血まみれの灰色から輝くような水色に。二人からは見えないが眼の色が灰色から右目は蒼く、左目は黄金に輝いていた。

そして両手には純星煌式武装の発動体が一本ずつ握られていた。

「9人が…………」

顔は動かさず、両目でしつかりと確認していく。

さつきまでは12人いたはずだが3人減って9人ということはさつきの暴風で吹き飛ばされたのだろう。

「嘘だろ…………」

「ありえないだろ…………」

「まさか、『皇帝』だと…………」

「死んだっていう噂じゃ…………」

数人が口を開き目の前の現象について自分の気持ちを漏らすが、大

半はついていけなかつた。

その中の一人が口をパクパクさせていただけの状態から突然騒ぎ出す。

「も、もうダメだあーーー!!!!」

その言葉に反応したかのように他も騒ぎ出そうとしたその時。

「だまれえ!!!!」

灰と言^{ヨトウ}い争^{シユヴァルツ}いをした男が仲間の言葉を強制的に終わらせる。

『凍冰の皇帝』^{ヨトウン・シユヴァルツ}がここにいるわけ無いだろ！奴は、死んだ！あんな奴が生きているはずが無いんだ!!

この男はまるで『凍冰の皇帝』^{ヨトウン・シユヴァルツ}に恐怖を覚えているかのように声を荒げていた。

「あんなもの、見せかけに過ぎない！早く奴を殺せ!!!」

もはやこの男は恐怖に支配されてしまつてゐるようだ。だが、同時に何人来たところで、今はもう関係無い。

瞬間移動したかのような高速移動をして白髪の男に肉薄する。

驚いた顔をしてなんとか距離を取ろうとするところを見るにやはりこの男がこのグループのリーダーなのだろう。しかし、すでにそのことを予想していた灰は肉薄した時に間合いを完全に潰しこの男が距離をとることで生じるほんのわずかな隙間に無理矢理攻撃をねじ込んだ。

右肘を男のみぞうちにめり込ませ堪らず男は崩れようとすると、突き刺さつてゐる灰の肘がそれを阻む。

「貴様ら『バベルatos』の残党には聞きたいことが山ほどある。とりあえず生かしておいてやろう」

その男に興味をなくしたかのように肘をみぞうちから引き抜き、後ろにいる8人の方に振り返る。

煌々と輝く蒼と黄金の瞳からの視線を感じた8人は本能的な恐怖を感じ一歩後ずさる。

「2人を狙わなかつたことだけは褒めてあげるよ。でも、オーフエリ

アを傷けたことだけは、絶対に許さない!!

そして、灰は統合企業財体からして見ればタブーとも言える純星煌式武装を起動する。

『冰青の天界剣』（ラヴィータ・イシユラ）柄は蒼く、紫に輝くウルム＝マナダイトをコアとし、水色の刀身を持っている。そして柄から色の同じ蛇のように細長い二本のオーラが螺旋状に刀身の周りに巻きついている。巻きついているというよりかは締め付けようとしているように見える。

オーラに締め付けられるのを嫌がるかのように刀身からエネルギーを発して拒んでいた。

エネルギーの反発により、一層エネルギーが高まつており、見たことも無いような高エネルギーを発していた。

「本当は土産など渡すつもりなどなかつたが、『バベラトス』の残党がいるなら気が変わった」

そう言うと左手に持つて『雷桜の断罪剣』（キュラリーフリーカス）を起動する。今まで誰の目にも触れなかつた『冰青の天界剣』と対になる純星煌式武装。刀身が形成されていくと同時に灰の後ろ髪の真ん中にある長い部分が水色から金色に変わっていく。

『冰青の天界剣』の対となる剣であり、その内包エネルギー量は同等かそれ以上である。

柄は綺麗で鮮やかな桜の色で刀身は黄金に輝いている。そして、蛇のように細長い桜色のオーラが刀身を螺旋状に巻きついていたが、こちらは『冰青の天界剣』（ラヴィータ・イシユラ）と逆向きに巻きついていた。オーラは刀身を締め付けようとはせず、優しく包み込んでいるように見えた。

『冰青の天界剣』はオーラが刀身を締め付けようとし、刀身がオーラを拒絶することによる反発から生まれるエネルギーによりエネルギーを増幅させてているのに対し、『雷桜の断罪剣』は刀身とオーラがお互いを強化しあうことで、『冰青の天界剣』よりもエネルギー量は高くなっている。

まあ、そもそも『冰青の天界剣』（ラヴィータ・イシユラ）とまともに打ち合えるような純星煌式武装なんて、このアスタリスクには4色の魔剣ぐらいしか無いだろう。

他の純星煌式武装だとしたらウルムⅡマナダイクトが悲鳴をあげて壊れてしまう。

それほどまでにこの二本は圧倒的なエネルギー量による出力によつて他を圧倒する。

圧倒的なエネルギーによつて圧倒された8人は立ち尽くしていた。だが、白髪の男以外にもう1人、顔を隠した実行部隊の中のリーダーがなんとか声を上げる。

「全員、生きて帰れるとは絶対に思うな！そんな甘い考えは全て捨てろ！いいか、生きるか死ぬかの平等の戦いじゃない。ただの圧倒的な力による殺戮だ！死力を尽くせ！」

白髪の男よりもこの実行部隊の男の方がどうやら信頼されていたらしく、残りの7人も各自の武器を構え始める。目が変わったように灰は思えた。

「君たちに敬意を払い、名乗らせてもらおう」

灰は一瞬考えた。アスタリスク最強の星脈世代。星導館の序列1位。『ヨトウン・シユヴァルツ凍冰の皇帝』ヨトウン・シユヴァルツ様々な呼ばれ方をする灰であるが、それ全てが灰であり、彼女たちはそれを受け入れてくれようとしているのだ。隠す方が馬鹿らしい。

「星導館学園序列1位『刀雷』にして『ヨトウン・シユヴァルツ凍冰の皇帝』鳴神灰」

そう言い切ると灰は瞬間に加速し一番左にいた黒づくめに肉薄する。左足で踏み込み、左手に握る『キュラリー・ブリーカス雷桜の断罪剣』を切り上げ、次の右足の一歩を左足で地面を蹴るけどで真横に大きく踏み込み、その隣にいるた黒づくめ2人を右手に握る『ラヴィータ・イシュラ冰青の天界剣』で串刺にする。2人が刺さつた『ラヴィータ・イシュラ冰青の天界剣』を次の加速と同時に後ろに振り、剣から死体が飛ばされる。

残り5人。

認識を許さない圧倒的な速度によつて、3人を葬り次の目標に加速する。

だが、2人を串刺しにしたことによつて急接近した灰は目の前がほとんど見えず剣を後ろに振つた時には目の前に凶器が迫つていたが、左手の『雷桜の断罪剣』^{キュラリー・フリークス}を引き戻していたため、簡単に振り払われ、戻ってきた『冰青の天界剣』^{ラヴィータ・イシュラ}によつて体を二つに両断される。そして、体の間からもう1人突進してきているのを確認できた灰は真横に降つたまま腕を捻り突きに攻撃を転じ5人目を突き刺し、『雷桜の断罪剣』^{キュラリー・フリークス}を瞬時に逆手に持ち替え、後ろにいたもう1人の体を斜めに斬る。

残り2人。

そして、今度は『冰青の天界剣』^{ラヴィータ・イシュラ}を右から左に振りながら前進し、左足で斜めに軽く飛び空中で小さく回転し逆手に持つている『雷桜の断罪剣』^{キュラリー・フリークス}を上から振り下ろし、心臓のあたりを刺し、地面に体を縫い付け、残り1人となつたりーダ格の男の喉元に剣を突きつける。

「殺さないのか？」

その男は喉元に突きつけられた時、武器を地面に落とし、無抵抗を示していた。

「あなたに聞きたいことがあつたから少し生かしただけです。大体のことはあの男から聞きますので」

そう言い、奥で固まっている白髪の男を目で示す。

「あなたは『バベルトス』のメンバーではありませんよね？」

「ふん、あんな狂信者集団と一緒にしないで欲しいものだな」

吐き捨てるように言つたその言葉からどうやらこの男は『バベルトス』のメンバーでは無いようだ。

ならば灰の目的のことを知つてゐるはずも無い。

「聞きたいことはそれだけか？なら、早く殺してくれ。仲間のところに早く行きたいんだ」

灰はこれ以上は聞かない。少しどと言つた以上二つ三つと質問するには流石に無神経すぎるからだ。

「最後に言い残したいことはありますか？少しだけなら聞いてあげますよ」

一瞬だが、灰はこの男を殺すことをためらつた。他の黒づくめを皆殺しにしてしまつてあるためそんなことは出来ないが。何故かわからぬがその気持ちが出てきてしまつたのだ。

「鳴神灰。『バベラトス』に執着しているなら、一つ教えてやろう。『バベラトス』そして、『リヒシユタン』の生き残りは『ノアの箱舟』と名乗つてゐる。守りたいのなら、気をつけろ。奴らはどこにでもいる。奪われたく無いなら、守つてみせろ」

そう言いつと目で言い終わつたと伝えてくる。これ以上は喋る気は無いらしい。

「肝に銘じておこう」

そう短く告げると灰はその男の首を刎ねた。

力無く倒れる体に背を向け、未だに動けない白髪の男のところへ歩いていく。

「動けないだろう？」

灰がその男の顔を掴み無理矢理目を合わせる。

男の表情は恐怖でおかしくなりそうな程歪んでいた。

「お前の体中の筋肉は全てが僕の力によつて凍り付いている。本當は色々聞きたいことがあるが今は時間が無い。しばらく恐怖で震えるがいいさ。お前たちのしたことは許すつもりなど無いからな」

そう言うと顔から手を離し、背を向け2人の元に歩いていく。

男は力無く倒れ伏し動く気配すら見せない。

『雷桜の断罪剣』^{キュラリー・ブリーカス}と『冰青の天界剣』^{ラヴィータ・イシュラ}を発動体にも戻したため髪の毛も元の灰色に戻り、目の色も灰色に戻つた。

2人は灰のことをまつすぐ見て、優しく微笑んでいた。

この2人になんて言おうか迷つたが、こう言つた。

「ただいま」

そう言うと2人はほぼ同時に灰に抱きつき、灰の顔を見ながらこう返してくれた。

「おかげりなさい」

そう言つてもらえた時、灰は2人のことを抱きしめた。

「本当に2人ともありがとう」

その言葉に2人は強く抱きつくことで返事をした。

しばらく3人で抱擁を交わしていたが、ほぼ同時にお互いの体を離した。

「ちよつとめんね」

2人から少し離れ虚空に向かつて口を開く。

「少し前からずつとそこから見ていたのでしょうか？ 戦闘は終わりました。そろそろ出てきてはくれませんか？」

中央区の方向の廃ビルの方に声をかける。普通なら人などいるはずも無いが、1人十階から飛び降りてくる。

ヘルガ・リンドヴァル。星獵警備隊の隊長である灰がアスタリスクに来る前は最強の魔女として名が知られており、今でもその力は衰えていない。

シルヴィニアとオーフエリアも気配には気づいていたがまさかヘルガ・リンドヴァルだとは思つてもいなかつたらしい。

微かに驚いていた。もともとこのような場所にくる人物など限られているからだろう。

「鳴神灰君。今すぐこの場を立ち去りなさい。私の部下がそろそろ駆けつけるでしょう。面倒ごとに巻き込まれたくなければそこの2人を連れて行きなさい」

「わかりました」

口答えは許さないといわんばかりの威圧で会話を断ち切る。その威圧はこれまで感じたどの威圧感よりも重くのしかかってきた。

そして、ヘルガはすれ違いざまこう言つた。

「後日、手の空いた時、星獵警備隊の本部まで来てください」

その言葉に返答はせず灰は2人を連れ近くのビルの屋上に飛び移り、闇の中に消えていった。

序章——4

アスタリスクの治安を守る星獵警備隊の本部。

ヘルガに率いられた星獵警備隊が再開発エリアで灰が戦つた後を調べ、白髪の男を主犯として本部に連行し、地下牢獄の最奥に閉じ込めた。だが、不可解のことにして白髪の男は精神を壊したかのように何かに怯えているように見え、警備員の尋問も全く気にせず、ガタガタと震えていたらしい。殺人によつて精神が壊れたというわけでもなく、本能的な恐怖に支配されているようにみえた。

そして、3回目の尋問が行われようとしている時に、これまでずっと黙つていたヘルガが口を開いた。

「全員席を外してくれ。ここからは1人でやる。確かめたいことを確認できたら呼ぶ」

ヘルガは一足先に現場に到着しており、その時に何か目にしたかもしれない。

あの時のヘルガの表情は何かを考え込んでいるように見えたからだ。

「では隊長、終わりましたら我々をお呼びください。それでは」
星獵警備隊の幹部の1人がそう言つたことにヘルガは頷いて返事をする。

全員が同時に敬礼をして部屋から退室した。

「さて、今ここには我々二人だけだ。『凍冰の皇帝』になぜそこまで怯える?」

その言葉を聞いた途端、白髪の男は暴れ出す。

「わ、私は違う！違うんだ!!あいつらが勝手にやつたことで、私はやつてない!!、……か、関係ないんだ。私はむ、む、無実だ!!」
後ろ手に拘束されながらも暴れ拘束を壊そうとする。

「ふむ、やはり無理か……。彼が来てくれるのを待つしかないか

……」

「疲れ疲れたのか肩で息をしながら、座り込む。

『凍氷の皇帝』。彼はこの男にどんな恐怖を刻み込んだのだ……。彼がこのアスタリスクを脅かすことはないだろうが、統合企業財体が彼に手を出さなければいいが……」

異常な星辰量の増幅を感じたため本部にいる警備隊員を途中の道路に待機させたのちヘルガ一人で廃ビルに登り灰の戦いを見たが、見る限りシルヴィアとオーフエリアを守るために戦っていることは明らかだからだ。

「彼にはいろいろ聞かなければならないな……」

この後再び尋問が行われたが白髪男はただ怯えているだけであった。

その後廃ビルの屋上を飛び移りなら再開発エリアを抜け、灰の家の近くになつてからは歩いて家に向かつた。

深夜十一時ごろ、祝賀会を抜け出してから約1時間が経つていた。ようやく家に着き一息つけた。

「シルヴィ、オーフエリア。お風呂が沸いてると思うから二人で入つてきていいよ。この家の風呂無駄に広いから一人でも十分広いと思うし」

はーい、と鼻歌交じりに返事をするシルヴィアと風呂と聞いて興味を示しているオーフエリア。

「それじゃあ着替えは私の私服が置いてあるからそれでいいよね?」「え、ええ……」

シルヴィアは再開発エリアに行く時の変装用の私服などを少し置いているらしい。灰は流石に何着あるかなどは詳しくは知らない。知らうとした時のシルヴィアが怖いからだ。普通の私服も置いていつているように思えるのは気のせいであろう。多分……。

オーフエリアは二人の、特にシルヴィアの話の進むスピードが速すぎてオタオタしている。

灰は楽しそうに部屋を出て行き、自分の私服が置いてある部屋に入

キップしていく姿を見て苦笑している。

ああなつたシルヴィアは止めるのは難しい。

「オーフエリアさーーーーーン」

部屋の外からシルヴィアの呼ぶ声が聞こえる。

どうしたらしいのか戸惑っているオーフエリアだが、灰を見て、行つていいのだと理解し、部屋を出て行く。その顔は心なしか喜んでいるように見えた。

二人が服を選び、風呂に入っている間、灰は『冰青の天界剣』、『雷桜の断罪剣』^(キュラリーブリーフス)が保管されていた部屋に向かう。ここには灰が革命を起こす前に日本の一般には知られていない靈峰にて仙人たちと修行を行つていた時にその地に眠るウルム＝マナダイトを渡されたいたものが保管されている。その数は三十個以上あり、一つ一つが各学園に保管されている純星煌式武装に使われているウルム＝マナダイトをよりも強力である。

そして、この仙人というのが悠久の時を経て生きるとも言われる者達の集団ではるか昔に仙人の存在の噂についてもこの集団だ。もちろん強さは計り知れないが、灰は全員から教授を受けその技術をすべて盗むかの勢いで習得していった。仙人達はどんどん新しい技を繰り出してきて結局どれくらい習得したのかはわからない。

灰は『冰青の天界剣』^(ラヴィータ・イシユラ)と『』の発動体を取り出し、『非活性化モード』で起動する。この二本の剣は他の純星煌式武装と違い、三段階に分かれている。なぜなら強力すぎるエネルギーを秘めているこの二つのウルム＝マナダイトはずつと最大出力で展開しているとそのエネルギーに耐え切れずウルム＝マナダイトが自壊してしまうのだ。そのため『非活性化状態』『活性化状態』『臨界状態』の三つに分けられている。

非活性化状態は出力が最低限でありただの煌式武装と変わらないのだ。だが、活性化状態になると出力が跳ね上がる。灰が先ほどの戦いで使用していたのはこの活性化状態だ。

そして、最後に臨界状態。これは二本のコアのウルム＝マナダイトの出力を最大限発揮するのがこの状態である。しかし、この臨界状

態、灰の制御能力を持つてしても維持するのは長くは持たない。持つて15分。状態によつては10分は持たない。灰がこれを使用したのは2回のみ。

二つの統合企業財体の総本部を壊滅させた時だけである。かの仙人達も極力使うなと言われており、灰もその忠告を忠実に守り、その力を使いより一層その力を使わないようとした。

初めて灰が力に対して恐怖を抱いたのだ。もしかしたら世界をも滅せる可能性が垣間見れたのだ。

「これを呪いというか祝福というか迷つたが、今は祝福だつたと思えるよ。ありがとう」

そう言つた時、『冰青の天界剣』と『雷桜の断罪剣』が微かに震えた。意思を持つと言われる純星煌式武装だが、その話はほぼ本当のようだろう。

二本を発動体に戻し、中央の台座に置く。

部屋から出て、先ほど外したネックレスを首にかけ直しながら寝室のある3階に向かう。

／＼＼シルヴィア、オーフエリア sides／＼＼

大浴場があるようなホテルと同じぐらいの広さを持つ。と言つても浴槽が広いだけだ。

オーフエリアの傷の跡はしつかりと洗い流し、二人で肩を並べ広い浴槽に浸かる。

これでやつと一息がつけたと落ち着ける二人。

「ふわわあーー」

ここまで気の抜けた世界の歌姫を他に誰が見たことがあるだろうか。至福の表情を見せるシルヴィア。

そんな彼女がこてん、とオーフエリアの肩に頭を乗せる。

「ちょ、ちょっと、シルヴィア……」

急に肩に頭を乗せられ、驚きより恥ずかしいという気持ちの方が強かつた。

「もう一、またシルヴィアつて言つたー。シルヴィイつて呼んで」

オーフエリアの肩にぐりぐりと頭を押し付ける。

シルヴィアが信頼している人しかいない時にのみ見せるのがこのような表情だ。完璧に気が緩んでいる時の表情。凜々しい歌姫という姿ではなく、ただ一人の年頃の少女である表情だ。

「わ、わかった。呼ぶ、呼ぶから。呼ぶからやめて、シルヴィイ……」

オーフエリアがそう言うとシルヴィアは満足したかのように頭をぐりぐりするのをやめる。やめただけで肩に頭は乗せたままだ。

「ねえ、シルヴィイ……」

「なに？ オーフエリアさん」

オーフエリアは自分の肩に乗せているシルヴィアの頭に自分の頭をくつつける。

まさかオーフエリアが頭をくつづけてくるとは思わなかつたのか驚きの表情をする。

「ありがとう。あなたに出会えて良かつたわ」

短く告げられた言葉だつたが、その言葉はシルヴィアをものすごく喜ばせた。

「私だけ愛称で呼んでもらうのも変な感じするし、灰君にオーフエリアさんの愛称をつけてもらわなきやね」

楽しそうにしているシルヴィアを見てオーフエリアは思つた。この顔はまた何か企んでいるなど。

シルヴィアと一緒にいた時間はものすごく短いが、純粹に楽しみにしている顔と少し違うのがなんとなく分かつたのだ。

そして、オーフエリアのその考えはあつていた。何を考えていたのかは乙女の秘密らしい。

風呂を上がり、二人は着替えて灰を探す。リビングを見てもいかつたので、おそらく三階の寝室にでもいるのだろうと予想し向かっていく。

寝室の扉を静かに開けると灰は窓の前に立ち、行政区の高層ビル群の方角を眺めていた。王竜星武祭の熱が覚めきらないのか夜なのに未だに輝いていた。二人が入ってきたのに気づいたのかゆっくり振り返る。

「シルヴィア、オーフエリア side out！」

窓の外、夜の闇に支配されるはずが、今は人工的な光に打ち消され昼のように行政区の高層ビル群は光り輝いていた。流石に光は抑えられてはいるが、カーテンを閉めないとさすがに眩しい。

グランドスラムを達成者が出てさらに盛り上がりを見せていうようかに見えた。

シルヴィアとオーフエリアが扉を開け入つて来たため、ゆっくりと振り返る。

「お風呂はどうだつた？」

二人にそう聞く。お風呂上がりで二人の頬は赤くほんのり染まり、髪の毛は少し湿っている。

「うん、すごい良かつたよ。いつもあれは一人で使つてるなんてずるいなー」

「気持ち良かつたわ、傷痕もしつかりと綺麗にできたわ」

二人たらも好評で一安心する灰。こここの風呂は生徒会長のクローディアによつてこの家をもらつた時に要望として風呂をかなり広く作つて貰つたのだ。

そして、クローディアのいたずらなのか、ベッドが無駄に広いのだ。それこそ3人で一緒に寝ても充分広いぐらいに。

「喜んでもらえたらなら良かつた。あの風呂はこの家をもらつた時から広いけど、何回か改造しているからそちらのお風呂よりずっといいと信じてるからね」

そこで一息ついた時にオーフエリアとタイミングを確認してから、シルヴィアが意を決したかのよう声を発する。

「灰くん。これから言うことを聞いて欲しいの」

何を言おうとしているか大体予想がついている灰だが、なんでかを聞かず、静かにシルヴィアの言葉を待つ。

「私はね、灰くん君のことが好きだよ。友達としてじゃない。一人の異性として君のことが好きだよ。ずっと一緒に居たいと思っているの」

「私も、あの日貴方に人の温もりを教えて貰った時、貴方に全てを捧げると、そしてずっと一緒に添い遂げると思つたわ」

アスタリスクで最上位に入る美貌の持ち主である二人。シルヴィアはもちろんだが、本能的な恐怖によりほとんど注目されることのないオーフエリアだが、その美貌はアスタリスクでも最上位に位置する。

そんな二人からの告白を同時に受け保留にするほど灰は間抜けではない。

「二人ともありがとう。……僕も君たちとはずっと一緒に居たい。でも、二人の内どちらかを選ぶことなんてできない。だから、二人と付き合うつてことでも良いかな？」

そう、灰はシルヴィアも、オーフエリアも好きなのだ。どちらかを選ぶことなどできない。

「もちろん。ちゃんとそのことは話し合っているよ」

「貴方ならそういう答えをすると思つた。だから、シルヴィと私で決めたの。一人で灰の彼女になろうって」

どうやら二人は事前にどうするか決めていたらしく、と言うよりも灰がどう答えるかも予想していてその先の言葉で考えていたらしい。

「人がそれで良いなら、僕もそれで良いよ。改めてよろしくね二人とも」

「よろしくね、灰くん」

「よろしく、灰」

3人の表情はみな嬉しそうにしており、灰は改めて守るべき存在を

認識する。いや、守られるだけでは無い。二人は灰の心の支えとなり、灰を守る存在なのだ。

「あ、ねえ灰。ちょっと目をつぶつてて」

「え、あ、うん……」

突然オーフエリアにそう言われ、断る理由もなく目を瞑る。

何をされるのか本当にわからなかつたが、両肩に手を乗せられる。

シルヴィアとオーフエリアが片方ずつ手を乗せているらしい。

「ぜ、絶対目を開けないでよ!!」

耳の近くでそう言われ、顔がすごい近いことが分かり、灰はなんとなく二人がやろうとしている事を理解した瞬間、両頬に少し湿り熱を持つたものがくつつけられた。

そう、二人は灰の頬にキスしたのだ。

「待つて！まだ目は開けないで…………」

目を開けようとしたところシルヴィアの声に止められる。

彼女の状況を見てから何か声をかけようと思つたが、彼女たちがどんな表情をしているかわからないため、声をかけるのを戸惑ってしまう。

少しして、シルヴィアから声が目を開けて良いとのお達しがある。目を開けると未だに顔が赤いオーフエリアとおそらく赤くなつていたのが少しおさまつていてシルヴィアが未だにあたふたしてた。「僕はお風呂いつてくるから二人は先にベットで横になつてて良いよ。寝心地も最高なはずだから」

何かをしやべろうとしては止めてしまうのを繰り返している二人を見て助け舟を出す。

「え、ええ。そうさせてもらうわ」

「あ、ありがとね。ありがたく使わせてもらうね」

詰まりながらも返事をする彼女達。恋愛経験が乏しいため反応がいちいち可愛いのだ。

顔を赤らめる二人を見て、改めて可愛いと認識した灰は部屋から出て行こうとするが背中から声をかけられる。

「あ、そうだ。灰くん。オーフエリアさんの愛称をお風呂入つている

間に考えてあげてね！考えたらベッドに入つてきて良いからね！」

「了解、ちゃんと考えておくよ」

そして、今度こそ扉を閉めてお風呂場に向かう。

しつかりと体を休めるためにいつもより長めに湯船と言えるかわからぬ大きさの浴槽にゆっくり浸かる。

充分浸かつた後は寝るための服に着替えるのではなく、外用の服にもう一度着替える。

そのまま寝室に向かい、静かに扉を開けると二人の微かな寝息が聞こえる。

こつそりとベットに近づき、布団を少しだめると手を繋ぎ仲良く眠る二人がいた。その二人の頬にさつきのお返しにキスをしてから布団を戻し、静かに部屋から出て行く。

これから行くところは警備隊の本部だ。ヘルガに来てくれと言われ、ずっと待たせるわけにもいかず、ならすぐに行こうと思つたのだ。

警備隊の本部につくと元々話が通つていたのかすんなり奥に通されヘルガの待つ部屋に通された。

「よく来てくれた。鳴神灰くん」

椅子に座つていたヘルガは立ち上がり灰を出迎えてください。

「リンドヴァルさんからのお呼び出しですので、待たせるわけにはいきませんので」

灰はこう言つたが、本当の理由もヘルガは知つていたため特に何も言わず灰について来るよう言い、白髪の男の待つ部屋に行く。

厳重に封鎖された扉を開けると中央の椅子に後手に拘束された白髪の男。ヘルガが入つたときは何も反応しなかつたが、灰が入つた瞬間顔を上げ、灰の顔を見て急に暴れ出す。

この時の灰の表情は笑つていた。

灰は数時間に及び白髪の男を尋問した。次から次へと投げかけられる質問にこの男はすぐに答えていく。答えなかつた時、殺されると思つていたからだ。その間ヘルガはずつと隣で見ていたが、確信する。鳴神灰という人間の行動原理に。オーフエリアとシルヴィア、二

人を守るということはもちろんだが、その深淵には強大な復讐心があるということに。

そして、灰の尋問が終わりヘルガとともに最初に通された部屋に入る。

「鳴神灰くん。星獵警備隊に入る気はないか？」

ヘルガは暗に今回のこととは黙つておくから警備隊に入れと言うらしい。もちろん灰は言われなくても元々ヘルガにお願いするつもりだつたのだ。断る理由もない。

「もちろんです。元々こちらからお願ひしようとしていたのです。断る理由もありません」

そう言うと二人は握手を交わし、正式に灰が星獵警備隊に入隊した。

後日、家に星獵警備隊の制服と所属していることを示すバッジが送られてきた。

間章——0——1

こんにちは！シルヴィア・リューネハイムです！

知らない人に簡単に説明すると、クインヴェール女子園の生徒会長で序列1位、一応アイドルやつてます！つて言えば何となくわかるかな？

はい！えつとですね、今日何を話すかというと、近況報告みたいなものです！

みんなは灰君。鳴神灰君って知ってるかな？今シーズンの鳳凰星武祭、獅鷲星武祭、王竜星武祭を全部優勝してグランドスマッシュを達成した凄い人なんだよ！それで、なんで灰君がここに出てくるかつていうと、えつと、その……灰君は私のか、か、か彼氏なんです……／＼

今日はその事に関することです！

ううう、やつぱり慣れないな…………

アイドルって恋愛は御法度みたいな暗黙の了解があるんだけどね、私もそれに従つてたんだ。

でも、灰君と出会つてから、何回も遊んだりしてる内に私が灰君に惹かれているつてことに何となく気付いたんだ。でも、恋愛は絶対にダメだからその気持ちを押さえ込んでライブをしたんだけど、本当に酷かつたよ…………

だつて、歌詞は飛んじやうし、ステージで転んじやうし、音程外しちやうし、本当散々だつたな…………

そしたら、ペトラさんに言われちやつたの。

『気になる人でも出来たの？』つて。

本当にびっくりしちやつたよ！何で分かつたんだろう…………そんなに表情に出てたのかな…………

まあ、私が不調続きつてことでその後のライブは中止になつてゐから、大丈夫だつたんだけどね！

でも、アスタリスクに戻つてきて王竜星武祭の準備してゐる時は凄い順調だつたんだ！これも灰君のお陰かな／＼

今から思い返してみると灰君の事ばっかり考えてたからライブも失敗しちゃつたのかな……

でも、アスタリスクに戻つて来れば灰君に会えるから調子も上がつたのかも！

そして王竜星武祭!!

準決勝までは順調に勝ち進めたけど、私の王竜星武祭はそこで終わつちやつたの。だつて、相手が灰君なんだもん!!!!もちろん、最初から負ける気で戦つてないよ、勝つ氣で本気でぶつかつたよ。だつて、あの『鳴神流抜刀術』はするいよ！あんなの防ぎようがないもん!!!少しさは近接戦に自信あるけどさ、あれは全く見えなかつたよ……

それで、まあ、そのままフイーアちゃんも倒して灰君はグランドスマムを達成したの！

彼女として誇らしいけど、悔しいな……

ここからが一番大事だよ！

灰君はあの『凍氷の皇帝』だつたの。でも、私は彼がどんな人間だつたとしても彼を信じるつて決めたから、そんなこと気にせず、三人で付き合つてます！

それでね、灰君と付き合い始めてあら歌の練習が凄いうまくいつたの！そしたら、ペトラさんに『あなた、出来たのね』って言われて、それは焦つたなう。だつて、アイドルに恋愛は御法度だもん。でも、ペトラさんは意外なことに許してくれたの。その条件として、灰君と少し話がしたいんだつて！

あ、ペトラさんは私の彼氏が灰君つてことはまだ知らないの。
それはお楽しみということで、ね？

はい！そして、いま！灰君は私とファーレアちゃんの本気によつて、誰かすぐには分からぬようなぐらいにはなつています！

ペトラさんに当てもらうためだよ!!

いまはもう理事長室の前まで来てるから、他の生徒も居ないということで、灰君の左腕に抱きついてます♪

ちなみに、ファーレアちゃんはいつも右手だよ。

なんでかって？

灰君からもらつたネットレス、それに嵌め込まれている宝石？なんか、その色が私は金色だから。灰君が『ムフェト・シュヴァルツ凍冰の皇帝』の時に使つてゐる二つの純星煌式武装、『ラヴィータ・イシコラ冰青の天界剣』と『キュラリー・ブリーカス雷桜の断罪剣』で左手に握つてるのが『キュラリー・ブリーカス雷桜の断罪剣』。同じような色の方がいいかなーつて、二人で話し合つてそうなつたの！

話が逸れちゃつたね。それで、今は理事長室の中でペトラさんと向き合つてます。

「ようこそ、シルヴィアの彼氏さん。ペトラ・キヴィレフトよ」「どうも、シルヴィの彼氏やらせてもらつてます」

ペトラさんが灰君のことすつゞい見てる……

ふふ、でも、私達2人で灰君の変装を弄つてるから簡単には分からないはずだよ!!

「なるほど、シルヴィアはあなたを選んだんですね。鳴神灰君」

「えつ…………」

「さすがです。とでも、言えればいいのでしょうか？」

うそそうそ、なんでペトラさんわかつたの?!だって灰君の変装は完璧のはず……

「あのね、シルヴィア。私はこれでも元クインヴェールの序列1位よ? 雰囲気で何となくわかるわよ。隠しているようだけど、これほどの

「霸氣を持っているのはアステリスクで一人しかいないわよ」

あちやー、完全にこれは私の落ち度だな〜

ペトラさんが鳳凰星武祭で優勝して、王竜星武祭準優勝したことは知つてたけど、まさか見破られるなんて……

うううー、いつも驚かないから驚かせてやろうと思つたのにー!!

「それで、ペトラさん。話したいことってなんですか？」

「シルヴィアと付き合う事に私は口出しはしないわ。ただ、覚悟はあるか、それを聞きたかったの」

覚悟……？あれ、人と付き合うのって覚悟とか必要だつたつけ……

「世界の歌姫であるシルヴィアの彼氏となればそれ相応の批判をくるでしょう。たとえ、貴方でも」

「たとえそうであつたとしても、僕は彼女の隣に立ち続けますよ」

うう、灰君つて結構恥ずかしいことを普通に言うから困っちゃう

あ、全然嫌じゃないんだよ!
むしろ嬉しいの//

「それに、僕なら彼女と対等になれると思ひますよ」

対等……むしろ、私が見劣りしないか心配だな……

だつて、グランドスマラソン達成者で、警備隊の幹部……うーん、何とかなるかな!!ペトラさんがどうにかしてくれると思うし。

「まあ、貴方とわかつた時点でその辺りについては心配などしていませんよ」

「合格ということですね」

そのあと二人は5分ぐらい話してたんだけど…………私つてここに

いる意味あつたかな……

ずっと二人で喋つてたし……

まあ、灰君と一緒に入れるだけでも十分だね!!

姫焰邂逅

新たな波紋

新学期となり、冬に行われた王竜星武祭の熱が覚めきらぬ中時は無情に過ぎ、人々は次の星武祭に新たな興味を抱く。

灰は高校生となり同時に警備隊に正式に入隊し春休みの間にも警備隊の仕事をしていた。

だが、高校生になつて何かが変わるわけでもない。星武祭にすでに三回出場している灰の学園でやることと言えば序列戦か後人の育成が主なやることとなりそうだ。

入学式も序列1位として何か言つたほうがいいのかも知れないが、別に何か言いたいこともないので警備隊の仕事を理由に断つた。

そんな見え透いた考えがクローディアにバレないはずもなく、後日何かしらの仕返しが来そうだ。

とは言つても警備隊の仕事があるのは本当だ。灰も三ヶ月の間に幹部となるまで昇進したのだ。異例の大出世である。

もちろん、嫉妬する者も居たが全て灰は実績を出すことで黙らせた。

これには訳があり、歓楽街を支配しているマフィアの幹部の5人いる中の3人が灰に頭が上がらないのだ。

警備隊になりたての時、一度二人に手を出そうとしたアホなマフィアに灰がキレ、マフィアの根城まで行つて、幹部3人を含めその時いた連中を全員ボコボコにしたのだ。もちろん、警備隊の他の人には内緒だが、ヘルガにはもちろんばれた。

その時からマフィアの中に灰には手を出さないことが暗黙の了解となつっていた。表立つて逃げるわけにもいかず、極力灰の機嫌を損ねないようにするよう末端のものまで通達されているらしい。

そのためか灰は主に歓楽街を取り締まることが多くなつた。

今日もいつも学校があるはずの6時に起きる。灰は警備隊の仕事がある日は早朝訓練はほとんどしない。何やかんやで早朝訓練はかなり疲れるのだ。

ベットから体を起こすと隣で寝ているはずのオーフエリアがいなことに気づく。シルヴィアはツアーのため今は家にいない。一緒に家に住んでいると言つても、ひと月のうち半月はシルヴィアはツアーなどアイドルとしての仕事で家にいない。

オーフエリアは家にいることが多い。デイルク・エーベルヴァインとも決別した。灰が金目と銀目という諜報部隊とデイルク本人の手駒全員の気絶した山を築き上げ渋々了承したのだ。

もちろんデイルクはこれを公表はしない。自分たちにはまだオーフエリアという手札があることにしておきたいからだ。

リングビングに降りるとキッチンで朝ごはんを作ってくれているエプロン姿のオーフエリアがいた。

最初は料理がうまくできなかつたオーフエリアだが、灰とシルヴィアという料理の上手な二人に教わりどんどん上達していった。

そのため、シルヴィアとオーフエリアがご飯を作りたがるので、灰は最近ほとんど料理していない。

「おはよう。灰」

エプロンに身を包み、白い髪の毛をポニテ気味に結んでいるオーフエリアが一旦料理の手を止め振り返る。

「ああ、おはよう。フィーア」

シルヴィアに言われたオーフエリアの愛称は、灰が考えてフィーアとなつた。その愛称もオーフエリアは気に入つているようでなによりだ。

「もう直ぐ出来るから少し待つてね」

邪魔する理由もないで大人しくダイニングテーブルに座り、ぼんやりとオーフエリアのとこを眺める。

揺れ動く綺麗な白髪に目を奪われる。窓から差し込む朝日によつ

てキラキラと輝いていたのだ。

「お待たせ、できたわ」

オーフエリアと向かい合い、朝食をとる。

7時には警備隊本部に集合のため、6時半には出発しなければならず、のんびりと食べ過ぎるわけにもいかない。

「今日の仕事はレヴォルフの学生の鎮圧?」

「ご飯を食べながら今日の仕事について尋ねてくる。

「うん。毎年入学式の日に暴れる奴が多いからそれの鎮圧。しかもただのゴロツキ達だから加減しなきやいけないのがめんどくさい……全員黒焦げでいいじやん……」

この仕事を言われた時、灰は警備隊全員が出席している前でヘルガから念入りに手加減するように言われた。

それはもう恥ずかしいたらありやしない。

「しうががないじやない。貴方が軽くやつたとしても、今日暴れる連中はひとたまりも無いんだから」

苦笑しながらオーフエリアにやんわりと止められた。やつぱりダメらしい。

朝食を食べ終わり、警備隊の制服に着替える。最初はこれを着るだけでも緊張したが、今では慣れなものだ。

灰の警備隊の制服もただの黒い制服から所々に金や銀の刺繡が施され若干かつこよくなっているのがこの幹部の制服だ。

そうしているうちに6時半となり出発する時間となる。

「いつてらっしやい。馬鹿な連中の性根を叩き直ってきてね」

「リンドヴァル隊長に怒られないようにならぬ張つてみるよ」

出かける前にオーフエリアと軽くハグをする。キスはしない。

これはシルヴィアとオーフエリアと3人で決めたことだ。シルヴィアが仕事で家にいないことが多いため、平等じゃ無いとオーフエリアが言い出したのだ。シルヴィアは別にそんな事はしなくていい

と言つたが、断固譲らなかつたオーフエリアに根負けしてそうする事になつたのだ。そのため、シルヴィアが家にいる時は二人とも凄い甘えてくる。緩急がつき、良いような悪いような……。

「それじゃあ、行つてくるね、フィーア」

玄関の扉を閉め、警備隊本部の方へ歩を進める。まだ昇つたばかりの太陽は綺麗に辺りを照らしていたが、同時に綺麗な朝日はその後に雨が来る可能性が高いということを示し、そこまで綺麗に晴れて欲しくなかつたなと思う灰であつた。

朝からの警備隊の仕事は、普段は学生である灰のことを考慮して学校がある時は緊急以外の仕事はない。休みの日は仕事があるが。

今日はもともと入学式で10時頃から開始される予定のため、今日まで仕事があるので。

それが終わり着替えるつもりもない灰は（単純にめんどくさいらしい）正門をくぐり中庭を通つて校舎に向かおうとすると人だかりができてるのでその中にいる見知った顔を捕まえて何があつたのかを聞く。

群衆の中から聞こえる声からなんとなく分かるが

「おい矢吹、これはなんの騒ぎだ？」

頬に傷があるカメラを構えている友人に声をかけた。

矢吹英士郎。新聞部でいろいろな情報を持つていて食券と引き換えによく利用している。まあ、本人には何かしら裏の事情がありそうだが。

「おお、鳴神。見ての通り決闘さ」

カメラを中心部に向けて固定したままこちらを振り返る。

「見ての通りと言われても、ユリスが暴れてるのしかわからんぞ。

この凜々しい声の主はリーゼルタニアの王女であるユリスのものだ。プライドの高いユリスのことだ。何かしらの喧嘩でも売られたのだろうか。

「お友達と言えるのがお前さんしかいないお姫様はなんと新入生に決闘をふっかけたのさ」

序列5位であるユリスは簡単に決闘などしないはずなのだが、それにいくらプライドが高いと言つても決闘事になるなんてよっぽどでもない限りありえないはずだ。

あ、そうそう。ユリスは他を寄せ付けない性格上誰も友達になれず、だが、その実力は本物で中学三年生で転入してから数ヶ月後には序列5位となつたのだ。そして、公式序列戦で1位の灰に挑み終始遊ばれて敗れた。その後手加減されていたことに腹を立てたユリスが直談判し、灰のトレーニングエリアにてもう一度決闘が行われたが魔法を展開する時間を与えてもらつてもなお、ユリスは手も足も出ず敗れた。灰が刀を抜いて3秒後、ユリスの校章は真つ二つに割れ地面に落下した。

この時ユリスはわかつたのだ。自分はこの男に本気を出させようなレベルに到達していないと。

そこから何やかんやでユリスの訓練に付き合ふことが増え今ではある程度親しい仲になつた。

オーフエリアはユリスと顔見知りのため、新学期になる前にオーフエリアと話し合い、秘密にすることにした。どうやらまだ知られたくないらしい。

「矢吹、なんでユリスが決闘してゐるのかは知つてゐるか？」

推測しても答えには辿り着きそうに無いので矢吹に聞く。この男なら何か知つてゐると思つたから。

「さあーねー、騒ぎがあつてから駆けつけて、そのまま俺の煌式武装を投げ渡したから詳細までは……つて、おい、鳴神どこ行つた!!」

矢吹の言葉を最後の方はちゃんと聞けなかつた。

自分に向けられた殺氣ではないが、ユリスに向けられてゐるのだけはなんとなくわかり、居ても立つても居られなくなり、駆け出したのだ。

灰の目にはユリスに向かつてまつすぐ飛んでいく光の矢を捉え、全力で加速して叩き斬った。

襲撃

中庭の周りに存在する茂みから発射された矢は群衆の間をすり抜ける前に灰が腰から『雲霄』を抜き放ち両断される。

群衆の間からユリスと紫の髪をした少年。彼が噂の転入生か。二人が灰のことを見て違う表情をしていた。ユリスは灰を見て目で襲撃者を捕まえろと言つてくる。そして、少年はユリスを押し倒しながら自分以外にも襲撃者の存在に気づいた人間がいる事に驚いている表情だ。

しかし、転校生くん。君は勇気があるね、あのユリスを押し倒そうとするなんて。

お二人の事はまあ、誰かがどうにかしてくれるだろう。

おそらく騒ぎを聞いたクローディアあたりが。

「さて、僕は襲撃者さんのところに行こうかな。手加減なんてしなくて良いんだもんね」

灰は朝の警備隊の仕事で少なからずストレスが溜まっていて襲撃者は絶好の標的とされたのだ。

「さてと、おかしな星辰量をもつ襲撃者さんは誰なのかね」

灰の登場に驚いていた襲撃者だが、すぐに踵を返し逃げようとする。

おかしな星辰量。灰は『凍冰の皇帝』の力を使つたあと、何故か人々ぞれの魔力の波長を読み取ることができたのだ。無論しつかりと集中しないとそれぐらいのオンオフは灰なら簡単にやつてのける。慣れ親しんだ、それこそシルヴィアとオーフエリアの星辰量の波長は直ぐにわかる。

だが、この時感じた星辰量は体内から発生するのではなく、あらかじめ込められた星辰量に感じたのだ。そう、この襲撃は魔術師か魔女の能力によつて遠隔に行われていると、灰はその時直ぐに分かつた。

「人形か、面白い……」

茂みの中へと消えていった襲撃者を追いかけるが、正門にはまつすぐいかず、何回も入り組んだ校舎の間をすり抜けるため流石の灰も見

失ってしまう。

「ちつ、これ以上追うのは流石に無理か……ユリスに小言を言われそ
うだ」

人形を見失つてしまつたのは痛手だが、これで相手も灰のことを敵と認識し襲つてくるか、逆に警戒し襲つてこないかの二択のどちらかを取るだろう。中途半端なことはしないはずだ。

だが、灰にとつて襲撃よりもユリスの小言の方が怖いのだ。

教室に入り自分の席と椅子を引きどかつと座る。目を閉じ天井を見る。まためんどくさい事に巻き込まれた自信があるからだ。

「はあー、僕に平穏は訪れないのか……」

星武祭の出場権を使いきり、ある程度静かに暮らせると思つたがどうやらそれは不可能らしい。

「序列1位なのに何を腑抜けたことを言つているのだ。お前は」

後ろから声をかけられる。どうやら後ろの席の人が来たらしい。「だって、しようがないじやん。朝から中庭で花火大会やつてるから見てたら変な奴いるしー、流石に放置しておくわけにもいかないじやん」

クローディアから事前に次の鳳凰星武祭に出場し活躍すると思われていた選手が何者かに襲撃されていたのを聞いていたのだ。

ユリスも前々から鳳凰星武祭に出ることは聞いており、襲撃される可能性があると思っていたが、まさか今日、決闘をするなんて予想してなかつたからだ。野外で決闘なんてしたら襲撃の良い的だ。油断していたのは灰も否めない。

「た、確かに朝のは助かつた。それは礼を言う」

「お姫様も素直じやないねー、素直にありがとうつて言えば良いのに」
すると隣の矢吹が茶化してくる。こいつは本当に…………

「う、うるさい!! お前は黙つてろ! 矢吹!!」

まあ、当然ユリスは怒る。まあ、これがいつもの光景だからユリスも本気で怒っているわけではないのはわかる。

はあー、ため息をつき、ユリスは灰の方を見て本題に入る。

「それで、襲撃者はどうしたんだ」

朝の襲撃者、それがユリスが一番聞きたかったことだろう。

「どうしたもこうしたも、逃げられたからこうしてるので！」

星獵警備隊に所属してから色々な物事を解決していたため、襲撃者も捕まえられると思つており、逃げられたことはかなり精神的に来了のだ。

「お前でも逃すとなると捕まえるのは厳しいか……」

「ただの植え込みしかないところだつたら捕まえられたけど、あいつ、校舎の間をすり抜けていくから加速が出来なかつたんだよ！あーもーやだ、寝る」

ぐでーと机に突つ伏す。もちろん寝る訳ではなく、ただ机に机に伏せてるだけだ。

「はあ、ユリス。これからは屋外で決闘なんてするなよ？」

とりあえず言いたいことは言わせてもらう。

「当たり前だ。今日のような事は流石に私も懲りた」

どうやら流石のユリスも襲撃されたことに危機感を抱いたらしく。

「まあ、何かあつたら言つてくれ。力にはなれると思うから」

学園内で星獵警備隊の幹部としての権力は使えないが、それでも鳴神灰個人としての力だけでも十分すぎるぐらいだ。大体の事はそれだけで事足りる。再開発エリアや歓楽街のガサ入れする時ぐらいしか星獵警備隊の権力を使わざるおえない。そもそもそんな事になる事なんてないに等しい。

「頼もしい限りだ。ただ、たいていの事は自分で解決出来ると自負している。だが、灰。お前の力が必要になるときは素直に借りるとしよう。お前の事は信頼してる」

ユリスは人と馴れ合う事を嫌うが、灰の事は信頼しているようだ。

「信頼されてるようで何より。なんか無駄に疲れたから授業まで寝るからユリス起こしてー」

朝の仕事は簡単であつたが数が多くて流石の灰も疲れたらしい。後ろからユリスの溜息が聞こえたような気がするか気にしない。視界の端に噂の転校生君が来たように見えたが、今は寝る事を優先する。

転校生君は割とギリギリできただようで八津崎先生が直ぐに来てしまい、灰は夢の世界に入る事すらできずにユリスに起こされた。

灰の学校の成績は平均よりも上であるが最上位ではない。上の中ぐらいだ。序列1位で成績もそこそこ優秀なら何も問題はない。

まあ、アーネストに関しては成績も最上位であり、本当にどうかしてると思っている。

授業が終わり、クラスのほとんどが転校生君の周りに集まり今朝の決闘について聞きたがっていた。

「矢吹、そう言えば今朝の決闘の理由、結局何だつたんだ?」

転校生君……いや、八津崎先生が天霧綾斗って言つてたな。綾斗とユリスの決闘の理由について聞いてなかつた事を思い出し、離れたところにいる矢吹に声をかけた。

「うんあ? 今朝のか? 何でも天霧がお姫様の着替え覗いたらしいんだ」

ひゅー、彼は初日からすごい事ばつかするもんだね。着替えを覗いたり、押し倒したりと、誰もやらないような事ばつかやるもんだ。「そりや、ユリスも怒るわけだ。だからあんなイレギュラーな形で決闘する事になるのか」

あの決闘がどうやつて終わつたか知らないが、まあ、取り敢えずはいいだろう。

「まあ、天霧もお前さんが追いかけていつた襲撃者の事には気づいていたっぽいし、割と直ぐに序列入りするかもな」

星導館は昨シーズン灰以外に目立つた成績を残したものはおらず、層の薄さが露呈してしまつた。

「たしかに、ありえるかもな」

そこで話を切り、再び自分の席に戻る。次の教師は色々とめんどくさいから早めに着席していい子にしているのだ。

（序列入りか…………あの遠距離からの攻撃を見破る事が出来るのはそれこそ序列上位者、『冒頭の十二人』クラスの力が無いと不可能だろう。特待転入生らしいけど、面白いじゃ無いか…………）

アスタークスに巻き起る新たな風を彼は巻き起こしてくれる。そんな気がしたのだ。

後ろで何やら矢吹と綾斗が灰について話しているが気にしないで次の準備に取り掛かる。

綾斗が灰と話す事になるのはまだ少し先の話である。

三人が揃つた日

結局灰は綾斗とは話さないまま新学期初日を終えた。

放課後は星獵警備隊の本部に立ち寄り、今朝の報告をする。時間がなかつたので一緒に居た人達に報告を任せていたが、一応自分でも報告しておこうと思ったのだ。報告と言つても灰の場合鎮圧出来ました、ではなく治療院送りを出しませんでしたという報告になる。灰とヘルガに関しては鎮圧するのは当たり前というのが今の警備隊の共通認識だ。事実、この二人に鎮圧出来ない暴動など『翡翠の黄昏』ほど大規模なもので無い限り鎮圧可能だ。灰は今回のような仕事は初めてだつたので手加減の具合を間違えないかが不安がられたのだ。結局治療院送りがゼロだつたのでヘルガも特に何も言わず、問題はなかつたらしい。

警備隊の本部から家へとのんびりと帰る。

「そう言えばシルヴィも今日は入学式の挨拶があるからアスタリスクに居るんだっけか、家には帰つてくるのかな……」

昨日までツアーハーがあり、明日からまた別のツアーハーが始まるため今日は家で過ごせるかもしれないが、時間が無ければ明日のツアーハー予定地に先に行く事になる。詳細は当日までわからないうらしい。まあ、ペトラさんあたりがどうにかしてくれるだろう。

「…………だーれだ♪」

後ろから抱きつかれ、手で目隠しをされる。ただ、身長差があるのか背伸びしているため背中に少女であることを証明する確かな胸の膨らみを感じる。

そんなことをする人物は一人しかいないが声的にもうわかつていた。

「うーん、シルヴィイかな」

わざと迷つた風に答える。

すると少女、シルヴィアは頬を膨らませながら器用に自らの胸の谷間に灰の左腕を挟み込むようにして腕を絡める。

クインヴェールの自分の寮に一回寄つて変装してから家まで来るので、身バレすることも無い。

「そこは迷わないで答えてほしかつたなー」

胸の柔らかい感触が制服越しに伝わってくるがここで反応するとシルヴィアにからかわれるのはわかっているのでスルーする。

「もちろんシルヴィって、すぐ分かつたけど、せつかく聞かれたんならちよつと遊んでみようかなつて」

流石にシルヴィアに後ろから抱きつかれたら灰はすぐにわかる。

「そういうことなら、許してあげちゃう」

そう言うと久しぶりに灰に会えたことで寂しかつたことを示すようになに路上なのに灰の腕に頬ずりをする。頬ずりをしているためゆっくりと手を絡めながら歩く。この二人の間で作られる世界に他の周囲にいる人たちはわざわざ近づこうとはしない。そのためある程度個人的なことも話しやすい。

シルヴィアはツアーが終わり、家で過ごせる時の初日は物凄い甘えてきて、猫のようにくつついてきて、これがまたいつも以上に凄い可愛いのだ。

「それにしても、星獣警備隊の幹部服もだいぶ着慣れてきたね。最初は着るだけで緊張してきたのに」

「なんか、ここまでくると逆に緊張しなくなるよ。

「今日は家に居られる?」

灰が一番聞きたかった事を尋ねる。夜ご飯を家で食べたとしても夜中にまた次のツアーに出発することがたまにあるからだ。

「うん、ペトラさんが今回はゆっくり休んで来いつて。だから数日間は一緒に居られるよ

なるほど、シルヴィアの機嫌がいつもより良い理由が分かつた。

「本当は今日の朝に連絡しようかと思つたんだけど、忙しくて時間がなかつたの」

シルヴィアは家でご飯を食べる時は事前に連絡してくれる。シルヴィアが居ない時はオーフエリアがご飯を作ってくれるため事前に連絡しておかないとオーフエリアが困るからだ。

「あ、でも、ちゃんとフイーアちゃんにはお昼ぐらいに連絡してあるから安心して」

ちゃんとオーフエリアには連絡してあるらしい。多分灰達の家庭事情を知っているペトラさんが気を利かてくれたのだろう。あの人はこういう気遣いをさり気なくしてくれるので灰としても大いに助かっている。

「久しぶりにフイーアちゃんの料理を食べられるから楽しみだな」

料理を教えればどんどん上達していくオーフエリアの手料理はシルヴィアのお気に入りだ。今では三人の中で一番料理が上手い可能性まである。

「フイーアはどんどん料理のレパートリーも増えていつてるらしいし、どんどん僕が料理する必要がなくなりそうだよ」

これに関しては灰にとつて嬉しいことだ。料理をするのが嫌いでは無いが、好きな人の手料理の方が何倍も美味しいからだ。

「いいのいいの。好きな人に手料理を振る舞えるのは女としてこの上ない幸せなんだから」

そう言うと頬ずりに満足したのか、頬ずりを止めて腕を絡めるだけにする。

その後家に着くまでの間、今回のツアーはどうだったとか、ペトラさんが厳しすぎるとかの話を聞いた。灰も今日あつたことを話す。主に綾斗の事だが、それでも灰がここまで興味を示すという事は面白い人物なのだとシルヴィアも思った。

時間にして15分ぐらいして家に着き、鍵を開けて家の中に入ると鍵が開いた音が聞こえたのかオーフエリアが一階に降りてくる。「おかえり。灰、シルヴィ」

この家はクインヴェール、レヴァルフ、星導館からの距離がほぼ同じなので、三人が学校行つた日はほぼ同じ時間に帰つてくるが、今日は灰は星獵警備隊の本部に行き、シルヴィアはツアーアー帰りなので遅く、オーフエリアが一番早く家に着いたのだ。

靴を脱ぐとシルヴィアはオーフエリアに抱き付いた。

シルヴィアはとにかく帰ってきた日はスキンシップが激しくなる。

その対象は灰だけではなくオーフエリアにもだ。

「フイーアちゃーーーん!! 寂しかつたよーーー!!」

二人の身長はほぼ同じなので抱きついた時にほぼ決まって頬ずりをするシルヴィアはオーフエリアの頬に頬ずりを出来る。

スリスリと頬ずりをされるオーフエリアの顔はどこか嬉しそうにしている。久しぶりに会えて、オーフエリアも嬉しいのだろう。「ねえ、シルヴィ、今からご飯作るところなんだけど、もし良かつたら一緒に作らない?」

未だに抱きついている状態のシルヴィアにそう問いかける。灰からはシルヴィアの顔は見えないが、反応からして喜んでいるのだろう。

う。

そのまま二人は揃つて階段を上つていった。

仲のいい二人を見て自分が幸せ者であることを感じる。

階段の下にある部屋、灰の星猟警備隊の制服や星導館の制服が置かれている。荒事が多い星猟警備隊の服が八割を占めており、私服は三階にまとめて置いてある。

一階にある風呂を沸かしてから星猟警備隊の服を脱ぎ、朝着ていた服に着替える。

それから3階に上がる。二階はシルヴィアとオーフエリアが料理をしているためいい匂いが充满していた。

3階に上がり、ウルム＝マナダイトなどが保管されている部屋に入る。

真ん中の台座には二本の純星煌式武装ありその後ろの壁に一本の大鎌がかけられている。

この鎌は鳳凰星武祭、獅鷲星武祭と一緒に勝ち抜いた戦友が使用していたものだ。だが、王竜星武祭を前に六花を去つた。序列2位まで登り詰め唐突に消えたため一時期大騒ぎになつた。

『俺にはこのアスタリスクを護るために力が足りない。俺はいつか必ず戻つてくる。それまでどうかこいつを預かっていて欲しい』

最後にそう言い残し本当に消えてしまつたため、灰も今どこにいるかはわからない。だが、戻つてくると言つた以上いつかまた会えるこ

とを信じて灰は待ち続けるのだ。

「お前の求める護るための力が見つかることを祈っているよ」

だが、灰は別れる前に戦友が口にした言葉を思い出し、より一層不安になる。

『灰、『凍冰の皇帝』はなぜ、革命を起こしたと思う?』

とつさのことにも反応できなかつた灰であるが、戦友はこう続けた。

『あの人は護るために戦つたと、思つてゐる。俺はそこに答えがあると思つてゐるんだ』

灰の返答を待たずして立ち去る戦友の姿を灰はただ見送るしかなかつたのだ。

その夜

夜ご飯も食べ終わり、灰が風呂に入った後、シルヴィアとオーフエリアは一緒に風呂に入る。シルヴィアが居ない時は灰とオーフエリアは一緒に入るわけではない。さすがにそれは二人とも恥ずかしいのだ。というか、三人全員の認識がそうなのだ。いつかは一緒に入りたいと思っている三人であつたのだ。

ただ、シルヴィアとオーフエリアの髪の毛を梳かすのは灰の役割である。今日はシルヴィアから先にお風呂から上がってきたので、椅子に座つてもらい、綺麗な紫色の長い髪を丁寧に梳かす。ちゃんと手入がされているため、櫛が簡単に通っていく。梳かし終わつた後も、シルヴィアが満足するまで丁寧に梳かし続ける。この間シルヴィアはほとんど何も話さない。ただ、されるがままになつて灰に身を委ねるのだ。シルヴィアは後ろ側から梳かしてもらうことが好きで、オーフエリアははまた違う形で髪を梳かしてもらうのを好んでいる。

オーフエリアが上がつてきたため、シルヴィアは椅子から立ち上がりリビングのソファーに移動する。灰に髪を梳かしてもらえる役割は素直に譲るのがこの二人の間での半ばルールになつていた。オーフエリアは髪を梳かしてもらう場合、灰の膝の上に横向きに座つて髪を梳かしてもらうのがお好みらしい。大体梳かしてもらう時は灰の心臓あたりに耳を当てて心臓の鼓動を聞くのが良いらしい。それはシルヴィアも同じだ。

二人は奇跡的に甘え方が分かれており、シルヴィアは寝るときには心臓の鼓動を聞きたい派であり、オーフエリアは寝る前に心臓の鼓動を聞き精神を安定させてから寝る派だ。もつとも、オーフエリアは髪を梳かしてもらつた後はほとんど灰の右手から離れないため、ずっと精神安定状態に入つており、いつでも寝れる状態なのだ。たまにそのまま寝てしまうことがあるのはしようがない。

お風呂も入り終わり、今はリビングで三人でくつつきながらテレビを見ている。お風呂入つた後で体が熱いので、軽く手が触れる程度し

かまだ密着していない。

だいたい1時間程すると体も冷めてくるのでだんだんと密着していく。オーフエリアはいつも通り右手に密着してきて、わざとなのか天然なのか右腕を自らの胸の谷間に挟み込んでくる。シルヴィアと同じぐらいの確かな胸の膨らみがあるオーフエリアは今はパジャマに着替えているため、その感触をよりダイレクトに感じることになる。

灰はこれをされると毎回どういう反応をすれば良いか迷うのだが、大体はスルーすることにしている。

シルヴィアはというと、灰の膝の上に寝つ転がっている。シルヴィアの綺麗な紫色の横髪を丁寧に撫でる。

そろそろテレビのニュースも飽きてきたので、オーフエリアにユリスが今日襲撃されたことを教える。

「そういえばフィーア」

腕に抱きついている状態から顔だけあげて首をかしげる。

「今日、ユリスが屋外で決闘したときに何者かに襲撃されたんだよね」
オーフエリアが微かに驚いた顔をする。今は関わりがないとはいえた親友だった人物が襲撃されたにしては反応が薄い。

「でも、貴方がそう言うつてことはちゃんと守ってくれたんでしょ？
なら、何も心配ないわ」

オーフエリアはちゃんと信じてるということを強調するためか、さらに腕に抱きつく力を強くする。

「それはまあ、もちろんだけど……」

頭をかきたくなるが、両手が塞がっているので頭を搔くことを諦める。

たまにこういう話をするとオーフエリアはストレートにこういう言葉を言う為、人に信頼されるのがどうにも慣れない灰はこういう言葉に弱いのだ。だが、シルヴィアはそう言う言葉はほとんど言わず、行動で示すことが多い。例えば今、灰に膝枕されている時など、完全にオフモードのシルヴィアを見るのは信頼されている証だろう。

「でも、リースフェルトさんって確か今回の鳳凰星武祭、優勝候補だつ

たよね？」

シルヴィアが顔を上に向け、その時撫でるのを横髪から前髪に変える。

「うん、ある程度ちゃんとしたペアが見つかれば優勝は確実って言われてる」

星武祭に出場権のない灰と王竜星武祭にしか興味のない二人にとって、次の鳳凰星武祭の情報は最低限しか入つてこない。

「星導館内外の人間と取引している者がいるって僕は思つてる」クローディアはレスターが怪しいと言つていたが、灰はそうは思わなかつた。

あの時の星辰量の波長はレスターのものではなかつた……。

「闇討ちとかはレヴォルフの領分だけど、今回のことは多分違うと思うわ」

そう、もしデイルク・エーベルヴァインなら星武祭に出場させてから棄権させる手法を好むはずだからだ。

「ということは今回はアルルカントが星導館を新作の実験台にでもしたということか…………」

三人の持つ様々な情報を組み合わせて今回の件の真相に少し近づく。

「んううううう」

するとシルヴィアが軽く伸びをする。

「シルヴィ、疲れてるのならもう寝る？」

灰の腕を堪能しているオーフエリアがシルヴィアに聞く。オーフエリアの表情は眠いのか眠くないのか分かりにくいが、経験上この時間だと若干眠いぐらいだろう。オーフエリアは早寝なのだ。

「うん……ちょっと今日はいつもより忙しかつたから眠いかも

……」

目を擦りながら小さく欠伸をする。連絡する時間もないほど忙しかつたからとすることは余程の事だろう。

シルヴィアが疲れていることもあり、今日は早めに寝ることにする。時刻は11時前、いつもは12時に寝ている為1時間ほど早い。

ベッドに入ると移動する為に離れていたオーフエリアが再び右手に抱きつき、シルヴィアは頭を灰の胸の上に乗せる。

いつもはここで少しばかしイチャイチャしてるが、今日は二人とも早い。オーフエリアはいつも早いがシルヴィアも今日は早かった。なので、二人の寝顔を少しばかし堪能してから寝ることにする。

(アルルカント……生徒会長の左近洲馬はそこまで実行力のない人物だと聞く……。つまり、もしこのような事をするとしたら派閥のリーダー格の人物……朝、逃げる時の筋肉の動きが通常では考えられないような動きをした……。つまり人形のはず、人形使いの魔術師か魔女のうち星導館にはそのような人物がいなはず……)

クローディアから今回の事件について少しばかし話を聞いていたこととさつき三人で会話したこと、そして警備隊の情報局で見られる情報を照らし合わせ黒幕ではなくとりあえず実行犯を割り出すことにした。

(有力候補のランディーとレスターはまず怪しそうなからほぼ実行犯ではないだろう。ランディーに関してはもしかしたら関与しているかもしれないが、逆に全く容疑がかかってないサイラス・ノーマン。奴が一番怪しいな……いや、ほぼ確定と言つても良いかも知れない)

心の中でため息をつくと、シルヴィアが少し身動きする。左手は空いてるので優しくシルヴィアの頭を撫でる。その寝顔がさらに落ち着いたものになり、安心する。

(守るのが増えるのは大変なことだよ、ほんと。彼女たちを守る為に僕は持てる全てを持って戦い抜こう

オーフエリアの頭に自分の頭をくつつけ、シルヴィアの腰に手を置きより近くに抱きよせる。

灰も目を瞑り夢の世界に落ちていく。今日は良い夢を見れそうだ。

灰は6時に起きて7時までは早朝訓練をする。近接戦闘をしないオーフエリアは早朝訓練は参加しない。中衛として近距離と遠距離両方をこなす為、ツアーが終わった2日後の朝から訓練に参加している。その為今日はまだ帰ってきて直ぐなので参加はせず、オーフエリアと一緒に朝ごはんを作るのだ。

灰の早朝訓練は地下室で行われる。外に星辰量が漏れ出ないよう特に必要な素材で作られている。上でまだ寝ている二人を起こさない為だ。

自分の体内の星辰量を意図的に暴走させてそれを完璧にコントロールする。単純な様に見えてかなり体に負担を強いるのがこの訓練だ。

最初の頃はほんの少しでもかなり消耗したが、今はそれからは成長したがそれでもまだ少ししか暴走させることはできない。灰はとりあえずこの訓練を続けることになるだろう。

そして、今日はシルヴィアもオーフエリアもいる。数少ない三人が揃う時間を大事にしようと思い1日が始まる。

束の間の平穏

朝の訓練が終わり、三人で久しぶりに一緒に食事をとる。楽しげに朝食をとる二人を見ながら灰は思う。

(二人の笑顔を守る為にも頑張らなくちゃな……)

朝の訓練を思い出すとより一層そう思えたのだ。

朝、シルヴィアも帰つてきていることだし少しつもより多めの星辰量を暴走させてみることにしたのだ。靈峰の師匠たち曰く、ごく稀に自分の体内から溢れ出る星辰量が大気中の万應素に干渉してそのまま『世界という概念』そのものに干渉することがあるらしい。それは少し先の未来を見通す事があるのだとか。

あの光景…………あちこちで火の手があがるアスタリスク、警備隊、各校の序列上位者が全力を尽くして皆を守ろうとしている光景。そして、ヘルガ隊長以下数名の精銳で敵の本拠地を強襲、激しい激戦の末にヘルガ隊長と灰のみが生き残るが灰は大怪我を負っているというそこでその未来は途切れた。

そのあとは予想がつく。治療院に運ばれ入院、たとえ助かつたとしても意識が回復するかもわからないそんな危険な状況。それはこの二人を悲しませることになる。

(未来はあらかじめ設定されたものではない。自ら切り開いて作るものだ。その手で守りたいものがあるなら、その為の道を切り開く。師匠たちはそう言つてたな……)

灰は運命を自ら切り開くだけの力を持つていて。あとは灰自身の覚悟次第だ。

そのまま朝食を食べ終わると各自制服に着替えて家を出る。シルヴィアは一旦クインヴェールの自分の寮の部屋で着替える必要があるため、いつもの自分の制服ではなく変装のための制服を着ている。

そういえば星導館は入学式の次の日から2日間にわたり序列戦がある。新入生に自分たちの学園の序列上位者の実力を体感させるた

めらしい。また、新入生の中で序列上位者、特に『冒頭の十二人』に挑戦したい人たちには挑戦権が与えられる。1日目は在校生のみによる序列戦が行われ、その時に自分がもし挑戦するなら誰を選ぶかを考えるのだ。

そして、一位は毎年最も挑戦者が多い。この時に敗れ去る人もいたらしい。

朝、クローディアから連絡があった。昼休みに序列戦についての打ち合わせがあるのだとか。

昼になり、灰は生徒会室に入る。するとそこには奥のテーブルに座っているクローディア一人しかいなかつた。

「会長、序列戦のことについて何か話があるって聞いたけど、新入生達を驚かしすぎないでくれよ」

この金髪の生徒会長はいつも悪巧みしてから新入生達が腰を抜かさないか心配だ。

「あら～？ そんなことはありませんよ？ ただちよつとした私なりの歓迎です♪」

ほら言つた。この人のちよつとしたつて言うのは心臓に悪いから止めた方が良いのかもしれないが、灰はこの企みに加担することにした。昨日の事がよっぽどストレスになつたのだろう。

「よしー！ その歓迎とやらに僕も全力で協力させてもらうよ」

その言葉を聞いたクローディアは腹黒い笑みを浮かべる。

腹黒生徒会長と心の中で言おうとすると、その腹黒い笑みが威圧的になつたので考えるのをやめる。

「それでは詳細を詰めましようか」

クローディア曰く、今日は序列戦には出ないらしい。グランドスマムを達成した最強の星脈世代の力は未だ健在か、そんなシナリオらしい。

さすがに三ヶ月程度じや力は衰えないと思ったが、人間三ヶ月あれば変わるしそんなものなんだろう。

2日目はちゃんと序列戦に参加する。そこで新入生の中の希望者が灰に挑むらしい。予想だと十数人らしい。

それ以外にも軽い打ち合わせをしていた頃、ちょうど昼休みの残り五分を告げる予鈴がなつたので急いで教室に戻ろうとする灰の背中にクローディアから声がかかる。

「あと、そうでした。序列戦の開幕の挨拶お願ひしますね。私は2日とも試合がありますので」

閉まりかけの扉の隙間からそんな言葉が飛んできた。

クローディアから何回か生徒会の仕事を手伝わされた事があり灰は知っていた。この生徒会室の扉は一度閉じる動作をするとその間は上げる動作は受け付けてくれないので。次は移動教室でほとんど時間のない灰は扉が閉まるのを待ちもう一度開けるほどの余裕はない。

つまり、クローディアからの頼まれごとを半ば了承したことになる。

「はあー、やられた。ただで帰してくれる訳ないわな……会長、やつてくれたじやないか…………つて、こんなことしてると場合じやない。ユリスに小言を言われるのは慣れてるけど、矢吹にまで言われる訳にはいかないからな」

矢吹に言われるとなんか、ムカつくのだ………わかる人はいるはず

……

慌てて教室に戻り移動教室に必要なものを持って行く。灰がついたのはチャイムが鳴るのと同時刻だった。案の定ユリスと矢吹に小言を言われた。矢吹許さん。

結局ろくに開幕の挨拶をろくに考えられないまま時間だけが過ぎ序列戦が始まってしまった。

最初に生徒会長が挨拶をするのが恒例となっている。

だが、今回は生徒会長ではなく、灰が挨拶することになつており、ステージ上に用意された仮設の壇上にあるマイクに向かつてゲートから出てきた灰はゆつくりとしかし堂々と歩いていく。

「みなさん、こんにちは。ここに立つのが生徒会長ではなく僕で驚い

ている人もいると思います」

新入生の中でクローディアが生徒会長であることを知らない人は灰が生徒会長であると思っていたのか驚いているだろう。現に驚きを隠せていない新入生がここからちらほら見える。

「この中には僕のことを知っている人もいるかと思いますが、改めて自己紹介しましよう。星導館学園序列1位、『刀雷』こと鳴神灰です」ここで何も知らなかつた新入生がざわめく。何せ灰はグラウンドスマッシュを達成した伝説の人物なのだ。そのような人物を同じ学園とはいえ初日から肉眼で見れるとは思わなかつたのだろう。

その後は当たり障りもないことを10分ぐらい話したところで新入生達は飽きてくるかもしれないと思い話を終わらせる。

「さて、ここで長々と話しすぎると後ろの序列戦が今日の分が終わらなくなつてしまふので一旦終わりにしましようか。あなた達が目標とする背中をしつかり見るといいですよ。無駄にはならないはずです。明日の君たちからの挑戦、楽しみに待っています」

その言葉で開幕の挨拶を締めくくると壇上から降りてゲートへ去っていく。その背中には新入生からの惜しみのない拍手が送られた。

新入生達の大半はこの不敗の背中を追うことになる。その不敗伝説に現実を突きつけられ諦めるかそれとも挫けず努力するか、二択の選択肢が彼らには与えられることになる。

ステージから退出した灰はそのままスタジアム内の生徒会専用ルームに向かう。

中にはクローディアが序列戦の準備のため対戦相手のデータを見ていたが気にせずソファに横になる。

「お疲れ様でした。大勢の前で話すのは初めてだと記憶しているのですが、流石ですね」

対戦相手のデータの確認が終わつたのか灰に話しかけてくる。序列3位たるクローディアは油断することなく格下と序列戦を行い今

まで序列3位担つてからはその座を維持している。

「星武祭の優勝した時に大勢の観客に見られながらの表彰に比べればどうつてことないさ」

灰はあの時の緊張を思い出す。鳳凰星武祭の時はもちろん緊張したが、王竜星武祭の時はそれよりも緊張した。グランドスラム、それは灰が思つていた以上に偉大なることだつたのだ。

「そんなことを言えるのは貴方ぐらいですよ。ですが、そのおかげで新入生の方々も大いに盛り上がつてているようなので、明日さらに盛り上げてくれるることを期待していますよ」

やんわりとプレッシャーをかけてくるクローディア。だから灰は仕返しとばかりにこう言つた。

『パン＝ドラ』を使わないからつて足下掬われるなよ』

「ゞ）心配にはおよびません。これでも近接戦は得意な方ですから」

未来視の能力がある『パン＝ドラ』を抜きにしてもクローディアの近接戦の技術はかなりのものだ。もともと心配すらしていない。

クローディアの試合だが、序列2・3位の相手を完封していた。未来視を必要としない圧倒的な勝利であつた。

ちなみにこの後家に帰るとシルヴィアとオーフエリアの二人に序列戦の開幕の挨拶でめちゃくちゃいじられた…………

普段見ない姿だから新鮮だつたらしい…………

序列戦2日目

1日目の序列戦が終わり、冒頭の十二人はその座を維持した。それより下の場合は少し変動があつたらしい。

一位である灰の試合がなかつたことから新入生達は尻込みして例年は二十人ほどの挑戦者が十三人に減つていた。

まあ、アスタリスクに来たばかりの学生が何人いても変わらないが、減つたことは大きいにありがたい。早く終わるからだ。

灰の序列戦は二つに分かれており、前半戦は七人、後半戦は六人と二回に分かれている。

そして、その序列戦にあたり、灰は校章破壊によつて試合を終わらせるつもりはなく、降参して貰うつもりでいた。校章、薄くてあつてもなくとも変わらぬのが、新入生の場合、間一髪攻撃を回避した時に校章が破壊される可能性があるからだ。

そのため、不完全燃焼で終わらせないようにせめてもの配慮で校章破壊は狙わないようにするのだ。

前半戦七人。確かに名乗りをあげるだけあり、新入生にしてはレベルが高く、序列入りするかもしれない可能性があるのが二人ほどいた。

灰の前半戦七人抜きを皮切りに他の序列戦も開始された。新入生

に遅れをとることなく皆順当に勝ち星を挙げた。

そして、本日最後の序列戦、灰の後半戦だ。残り六人中に刀藤流の使い手がいるらしいから少し楽しみだ。

一人、二人と試合を続け危なげなく勝利を收め、最後の一人、名前は刀藤綺凛。なるほど、彼女が刀藤流の使い手らしい。

試合開始位置に立ち、彼女の構えを見る。力み過ぎず程よいリラックス状態を保つていて構え、今までの新入生達とは段違いの熟練度であつた。

(会長から言われてたのはこの子か。初めてなのにここまで落ち着いて集中できるのは流石だな。その剣技楽しませてもらうよ)

灰も『雲零』を構える。一見しつかりとは構えていないように見えるが、対戦相手はその隙の無さに圧倒されることだろう。

試合開始の合図がなるとすぐに灰に向かつて一直線に突進して上から斜め下に刀を振り下ろす。なぜなら、灰は先手で攻撃してこないが、一瞬でも時間を与えれば絶対に攻撃は通らないからだ。

そして、灰は今までとは段違いの早さに驚く。だが、それだけだ。クローディアから事前に言われていたため何かあると思つていたからだ。

（速いだけじゃ、僕の間合いを切り崩すことなんて……出来ないよ！）

振り下ろされる剣を自らの刀で巻き取るようにして攻撃をいなし、今までやつていたように後の先を取る形でカウンターをする。

大抵の人間ならそこで試合は終わるがこの子は違った。

無理矢理刀の柄で灰の攻撃を受け止めたのだ。だが、灰の攻撃は速く、そして重い。まだ肉体が完全に成長しきっていない中学生では到底受け止めることはできない。

弾き飛ばされ、大きく距離を空けるがその距離を灰は一瞬にして詰めて、彼女がさつき刀を振り下ろした軌道と全く同じ軌道で刀を振り下ろす。さつきとは違い完全に体勢を崩している状態、決まるのはほぼ確定していたが、次の瞬間綺麗は先ほど灰が攻撃をいなしたと同じ方法で灰の攻撃をいなした。

体勢は崩れ、先ほどよりも重い攻撃に完璧にいなすことは出来ないが、それでも攻撃を回避し、灰の間合いから逃れたのだ。

そこで一旦体勢を整えることはせず、再び間合いを詰めて特殊な連続攻撃を繰り出してきた。

（これは…………『連鶴』…………まさか中1でこれほどの完成度とはさすが刀藤流の天才剣士か……）

連鶴は相手をどんどん確実に追い込んでいく技だが灰は一步も引かず刀をはじき返す。後ろに下ることを前提に攻撃を繰り出したため間合いがズレてしまい技と技との繋ぎが崩れてしまう。その隙を見逃す灰ではなく、連鶴を完璧に途切れさせたが、予想外なことが一つあつた。攻撃を受け止めたのだ。

彼女はわざと隙を見せて灰の攻撃を誘導したのだ。そして、その隙に差し込まれる灰の攻撃の軌道を先読みして防御を成功させたのだ。

(なるほど、自分の剣に過信することなく、そして、僕の強さを理解している。なるほど、一本取られたな)

綺凛からのカウンターをカウンターする攻撃を灰は受け止めることもできたが、自ら間合いを開け、距離をとる。

その瞬間会場がざわめいた。理由がわからない綺凛は困惑する。

「ここまで会場がざわめく理由がわからないようだね」

試合が始まつて灰は初めて口を開く。他の新入生達には何も言う必要がなかつたから、これが初めてとなる。

突然口を開いたことに綺凛は驚くが、無言で領き返答する。

「僕は序列1位となつてから何回も挑戦を受け、それを正面から、一步も後退することなく勝ち続けた。でも、君は僕を後退させた。たまに絶対領域と呼ばれる僕の間合いは対戦相手をも支配して?み込む。だが、その間合いを君は斬り崩したんだ」

攻撃は最大の防御と言われるよう灰の間合い、絶対領域は踏み込んだ相手を支配し屈服させる圧倒的攻撃により絶対的防御を確立していた。しかし、それを綺凛は破つたのだ。そのことを知っている人間は皆驚く。

「だから、僕は君を一人の対等な剣士として認めよう」

最初までは手を抜いていたという事を認めたのだ。いや、言われなくとも分かっていたのだろう。手加減が無ければ秒殺されるだろうと。

「行くよ」

綺凛は灰から感じる気配が変わつたことに気づいた。目を瞑つている灰の剣気に気圧されたのだ。圧倒的と言える剣気は肌を突き刺すような感覚を綺凛に味あわせた。

灰は『雲零』を納刀し抜刀術の構えを取る。そして、柄を順手ではなくて逆手に構える。これが鳴神流の抜刀術の特徴だ。

『鳴神流抜刀術『炎華』』

そう呟いた時、刀は神速で抜き放たれた。

『炎華』、16の抜刀術の中で最も重い攻撃を繰り出す技である。そのため、最も遅い攻撃となつていて、だが、そうだとしても肉眼で捉えられるものはほとんどない。灰は攻撃力を落とさず、速さを最大限加速させてこの抜刀術を放つ。

綺凛の構えていた刀を吹き飛ばす。そして、刀に振り回されることなく戻ってきた刀を喉元に突きつけられて綺凛は降参する。

こうして灰は序列戦を無敗で終えた。ステージから居なくなる前に灰は綺凛にこう言つた。

「この後、少し君と話したいことがある。僕はこれからトレーニングルームで少しトレーニングするからそこに来てもらえると嬉しいかな」

この試合の時に感じた違和感を拭うために彼女に聞くことにしたが、さすがに大衆の前で公に聞くわけにもいかないので、トレーニングルームに来てもらうことにした。

（先にシリヴィとフイーアに遅くなるって伝えとくか、少し長話になりそうだ。もちろん、あの子が来てくれればの話だが……）

剣の重さ

灰がステージから立ち去つた後、未だに観客たちは動搖を隠しきれなかつた。あの鳴神灰が自分の支配する間合いを食い破られたのだ。序列戦、星武祭、全てにおいて無敗を誇る絶対領域を。そのため灰は出さざる終えなかつた、鳴神流抜刀術を。最強の剣術を。かつて数回しか使つたことのない抜刀術を中学一年生の刀藤綺凜に使つたのだ。

そして、人々は刀藤綺凜という少女に注目を集めるだろう。

（あーあ、やらかしたな。絶対領域を破られるなんて思つても無かつたから対応が遅れて抜刀術を使うことになるなんて……情けない）
灰は自分の抜刀術をほとんど使わない。過去に公式戦で使つたのは今回を除き、4回のみ。星武祭の決勝戦の三回、そして、王竜星武祭の準決勝の時にのみ使用した。

なぜ、使わないと単純に強すぎるからだ。基本スピードが速い灰の剣術がさらに速くなれば誰も太刀打ちできないからだ。

純星煌式武装の中で防御不能と言われる魔剣と同じようなものだ。抜刀術は速すぎて不可視、つまり防御不能ということになる。

（はあ、自分に腹が立ってきたよ……トレーニングルームで少し暴れるか）

トレーニングルームには自動で動く人形が続々と出てくる訓練があり、その人形を何体倒せるかというものである。

これは上限が1024に設定されている。なぜかとすると灰は人形程度ならほぼ永久的に倒せるためクローディアに上限を設けられてしまつたのだ。

ここで実は抜け道がある。それは獅鷲星武祭用のモードにすれば人形の上限が3倍となるが、これがばれた時のクローディアが怖いため絶対にやらないことにしているのだ。ただでさえ、色々と無茶なお願いをしている以上、これ以上はさすがに気がひける。

開始のボタンを押して人形が続々と出てくるのを正眼に構えた刀で迎え撃つ。

灰に接近した人形は大きさ関係なく吹き飛ばされていく。その速さに人形の供給がだんだんと間に合わなくなり、一瞬人形が居なくなつたところで来客通知が来る。トレーニング中は体の動きを感じして通知が表示されないが、体の動きが一定時間無くなると通知が表示されるのだ。

来客、つまり綺凛が来たということなのでトレーニングを中断する。スコアは853、15分程でこれなのでまあ、いつも通りぐらいだろう。

自分から呼んだので待たせるわけにもいかないのですぐに扉を開ける。

「お、お邪魔しますです……」

おずおずと入つてくる綺凛。試合の時とは違い、小動物のようにオドオドしてる。

(シリヴィやファイアとはまた違う癒しを与えてくれる系の子か。妹系というのかな、これが……)

部屋の中を見渡した綺凛だが、灰の後ろを見たとき固まってしまった。

なぜ固まるのが分からなかつたが、灰は自分が今さつきまでやつていたことを思い出して納得する。

頭をかき、自分に呆れる。

「……そういうえば自動回収機能つけると人形が出てくるのが遅くなるから付けなかつたんだっけか」

流石にこれは自分でもやりすぎたなと思う。全ての人形が積み重ねられて巨大な二つの山を形成していた。その高さはトレーニングルームの天井に届きそうであつた。トレーニングルームの天井は約8メートル、そのため近くで見たら充分巨大な山だ。

「ごめん刀藤、自分に腹が立つてたんだ。まあ、気にしないでくれるとありがたいかな」

「は、はい……」

急に呼び出されて、そこに行つてみたら意味不明な光景が目の前にあつたらさすがに困惑するわな。

「あ、あの……！」

さすがに空気が重いので、何か話そとかとしたら綺凛が口を開いた。

「もし良ければ、トレーニングの続きを見てみたい、です……」

最後の方は消えそうなほど小声で話していたが、ちゃんと聞き取れた。

上級生のしかも序列1位に呼び出されて緊張しない方がおかしい。「了解。残りが200もいないからすぐに終わっちゃうかもしれないけどね。一応離れといて、それにその方が見やすいからね」

灰は綺凛に自分の手の内を晒したとしても、それは一部に過ぎず、大して変わらないからだ。

自動回収機能を使ってわざと出てくるスピードを落とし、一体一体確実に倒していく。さつきまでの灰とは違い、落ち着いて型を一個一個なぞるかの様に丁寧に攻撃する。なぜか、綺凛のためとしか言いようがない。

そして、五分足らずで200弱の人形は全員退場した。

(たまには丁寧にやるものまた新鮮でいいな)

刀を納めながら、そんな事を思っていた。基本的1対多数が想定されている鳴神流は一対一の場面用のものといえば基本的なことが多い。そのためこれはいい練習となるのだ。

「ありがとうございます。鳴神先輩の剣、意志のようなものを感じました！あれはなんですか！」

やはり、遠目で見たことによりさつきの実戦で感じたことが確信できたらしい。

それに、この子生糸の剣術がオタクだろう。そのためかさつきとは違い、ぐいぐい迫つてくる。

「そうだね、意志。間違つてはいないけど、どちらかというと信念に近いかな。自分の信念を刀に乗せる。それに刀は反応する。君も何回か聞いたことがあるんじやないかな」

綺凛は灰に言われたことについて真剣に考えているため灰との距離がものすごく近いことに気づいていない。

(そう言えれば、あいつもこんな感じだつたな)

灰の妹、正確には義理の妹となる。その子は綺凛みたいな剣術才タクでいつも灰の訓練を見てはずつと付き纏つていろいろな事を聞いてきた。

「はい、聞いたことがあるです。固い信念を持つ人の刀はそれに応えてくれると、実際に見たことはありませんでしたです」

「そういうこと。もし刀藤がさらに強くなりたいなら、まず信念を刀に込めるといい。それがどんなものであれ、応えてくれるはずだよ」
信念、灰は何を込めているかと、当たり前だがシルヴィアとオーフエリアを守り抜くというもの。しかし、深淵には統合企業財体に復讐するという暗いものがあつた。誰にも気づかれずにずっと灰の中に存在していた。

そして、灰の言葉を聞いた時、灰の顔が予想以上に近かつたため、綺凛は慌てるも急にすぎて離れることも出来ずにアタフタする。

その姿はまさしく小動物だ。

さして、灰は間違えて妹にいつもやつていたように頭を撫でてしまう。初対面の年下の女の子のだ。

(あ…………やつぱい、間違えた。シルヴィとフイーアにバレたら、とうか絶対にバレるだろうな…………)

そう考えると気持ちがなんとなく沈んでしまう。

あの二人に説教されると決まって二人はいつも以上に甘えてくる。
まあ、かわいいから全然いいのだが

「はううう…………」

綺凛が顔を真っ赤にして慌てる。そりや、当然のことだろう。

「あ、ごめん!!つい、義妹にやつてる癖で…………」

少し疲れているのかもしれない、灰はそう思つた。普段だつたら絶対にやらないようなことをやつてしまつたのだ。

「い、いえ、ただ、慣れてないだけなので…………」

この時トレーニングルームは謎の空気に包まれて本題が全く進まなかつた。

弟子

さて、この空気をどうしたものかと思い、少し気になつたことを聞くことにした。

「どうだい、僕の弟子になつてみないか？もちろん、流派が違う以上正式な弟子には出来ないけど」

鳴神家の当主ではない以上正式な弟子にも出来ず、また、綺凛も刀藤流を抜けるわけにはいかないだろう。

綺凛は灰のその提案に驚く。灰は今までに弟子や教え子といったものを取つたということは聞いたことがないからだ。

最強の星脈世代に誰もが教えを請いたいだろうが、誰もそれは叶わなかつた。なぜなら、灰はクローディアに頼んで弟子は取るつもりはないという意志を公表してもらつた。

急に言われ 完全に固まつてしまふ。今まで弟子を一切取らなかつた灰から弟子にならないかと言わればみんな固まるだろう。
(後人の育成なんてやる気はほとんどなかつたけど、光るダイヤの原石を見つけてしまつたからね)

言い方は悪いが、灰は凡人の育成など余程のことがない限り面倒くさくてやりたくないのだ。

「わ、私なのでいいのでしょうか……」

「構わないよ。僕だって人に教えるのは初めてだし、それに、君の才能を僕の手で伸ばしてみたくてね」

彼女のまだ若干荒削りな才能を綺麗に磨けるとしたらこのアスタリスクにおいて灰か『万有天羅』である星露だけだろう。他の人間だつたら彼女の高すぎる才能を伸ばしきれないだろう。

「えつと、なら、よ、よろしくお願ひしますです……。鳴神先輩」

まだ緊張しているが前よりはそうではないように見える。

「はい、これ僕の連絡先。今日はさすがに何もできないけど、明日から始める事になるだろうから用事があつたりして訓練ができないとかがあつたら連絡して、それ以外にも個人的なことでも気軽にしてくれていよい。基本的に暇なはずだから、多分……」

そう、今日に限っては暇かどうかはわからない。シルヴィアとオーフエリアが綺凛との関係について根掘り葉掘り聞かれる可能性がある。おそらく灰に密着した時にバレるだろう。逆になんてバレるのか教えてほしいぐらいだ。

「あとそりゃ、呼ぶ時は下の名前で、灰でいいよ。教え子に上の名前で呼ばれたらなんか悲しいからね」

そう言つてトレーニングルームから出て行く。相手の返答を待たず自分 의견だけ言つていなくなるのはよくクローディアに使われたので、灰も似たようなことは出来る。

急に色々なことを言われ理解のできていない綺凛は固まっている。多分大丈夫だろう。

なんやかんやあつた1日も終わりをむかえる。序列戦も問題がなく終わり、明日からは通常の授業になるが、夏にはすぐに鳳凰星武祭がある。その数ヶ月後の秋には文化祭がと、大規模のイベントが連続する。そのためアスタリスクはいつも賑わいを見せている。

だが、1日1日は平穏に過ぎていき、灰は二人が待つ家に帰り幸せな日々を送る。

今日も灰はシルヴィアとオーフエリアが家で夕ご飯を作つて待つてゐるであろう家に着き、玄関を開ける。

「ただいま」

「お帰りなさい。灰」

ピンクのエプロンを着たオーフエリアが階段から顔だけ出して出迎えてくれる。

そのまま階段を降りてきて灰と軽く抱擁を交わし、キスをする。寝る前ではない為今は軽めだ。

いつも帰つてたら一緒に出迎えてくれるはずのシルヴィアがいくつて少し探してみると、オーフエリアは灰が何をしたいかわかつた為、シルヴィアの居場所を教えてくれた。

「シルヴィイは生徒会の仕事で疲れてもう寝ちゃつたわ。貯めすぎると

面倒くさいって、言つてたわ」

ツアードが終わると生徒会長しか決めることのできない案件などを処理しなければならず、それはかなりの量になるだろう。

「それでね、シルヴィイが今度の週末、3人でデートしようって。私も久しぶりに3人でデートしたいし、灰はどう？」

階段を上りながらオーフエリアが今週末デートしないかと聞く。3人でデートしたのは付き合い始めてすぐの頃にした以来一回もしてない。ちょうど灰もデートしたいと思つていた頃だ。

「そう、それでシルヴィイと少し話したの。灰、女装してみてくれないかしら」

オーフエリアが台所で料理の仕上げをする為に台所に立つと徐ろにそう言つた。

「…………え!?、ほ、本氣で言つてる?」

さすがに大声を出すわけには行かないでの抑えめに声を出す。

「なんでも、シルヴィイが灰に来てもらいたい女性ものの服があるらしいの」

シルヴィイアは本当に唐突に変というかすごいことを思いつく為、毎回驚かされる。

これで自分の服を着せたいと言われたらさすがに灰は戸惑う。一箇所絶対にサイズが合わないところがある。そう胸部だ。二人は平均から見たら大きいため、男性が着るとしたらその部分だけスカスカになつて明らかに変になる。

「まあ、うん、任せよ。たしかに、女子3人が一緒に歩いているだけなら全然違和感ないか」

任せると言つたのは今日、綺麗の頭を間違えて撫でてしまうという事をしてしまい、バレなかつたとしても、二人の提案を断るわけには行かないのだ。

休日のデートの女装については一旦忘れるとして、オーフエリアを作ってくれる夕ご飯を考える。さつきからいい匂いがずっとしていいる為お腹はペコペコだ。

灰はもう二人の料理に完璧に胃袋を捕まえられているので争うこととはできない。

「今日はシチューよ。この前食べたいって言つてたから作つてみたわ」

一週間ぐらい前に何気ない会話で行つたのをオーフエリアはしっかりと覚えてくれていたらしく、灰は嬉しくなる。

「さ、出来たわ。食べましょ」

オーフエリアが灰が食べたいと言つたものをしつかりと覚えててくれて作つてくれた料理だ。それはもう美味しかつた。序列戦で13連戦した疲れ。少ししか疲れは溜まっていないが、それでもその疲れは綺麗に癒してくれた。

夜ご飯を食べた後にすぐに風呂に入ると体に悪い為、少し時間を置く為ソファでのんびりとする。膝の上にオーフエリアを乗せてのんびりとする。

「私とシルヴィはもう先にお風呂に入つたわ。灰の入りたい時に入つて」

膝の上に乗せてるとオーフエリアからシャンプーのいい香りがするので、いつまでも膝の上に乗せていたいが、序列戦で少なからず汗もかいている為さすがにずっと膝の上に乗せるわけには行かないので、少ししたら膝から降りてももらうことにする。

5分ほどオーフエリアを堪能したらお風呂に向かう。

一人で入るには広すぎるこの風呂に一人で入るのにも慣れているが、せつかく一人がいるのだから一緒に入りたいと思うのは仕方のないことだろう。だが、羞恥心というものがあり未だにできないでいる。

灰は湯船に浸かり、今日のことを思い返す。そう、刀藤綺凛のことだ。

(剣の才能はある方だと自身あつたんだけどな……あの子は本当に才能が高すぎる)

灰が使つた滑らかなカウンター、そして、最後の抜刀術の時、あの

子は予想だにもしないことをやつてのけた。

自分に使われたので違う流派の技を一回見ただけで、ほぼ完璧に模倣したのだ。

そして、最後の抜刀術を使つた時、彼女はそのスピードについていけなかつたが、数合交えただけで灰の癖を読み取り抜刀術の軌道をほぼ完璧に予想したのだ。

（荒削りだが、綺麗に磨かれていたあの剣技、あの子の両親はわかつていたんだろうな。彼女の高すぎる才能に。自分たちでは才能を伸ばしきれないと分かっているから、アスタリスクでなら、と思つたんだろうな）

自惚れているわけではなく、灰はアスタリスクで最強であり、同時に弟子を取らないことでも有名である。

だが、綺凜ほどの才能なら灰に教えを請うることもできるのではないかと思つたのだろう。だいぶ大きな賭けをしたものんだと思う。

その後、色々考えたがいまいちわからなかつたので、湯船から上がる。

考え方をしている間に綺凜から連絡があつたので返信する。内容は自分のことも下の名前で呼んでほしいとのこと。要は綺凜、と呼ぶことになる。

明日からの訓練が楽しみだと、少し心が躍る。始めて弟子を持つことに灰も嬉しいのだ。

お風呂から上がり、リビングに戻ると突然オーフエリアに椅子に座るようになられる。

「何するの、フィーア？」

手に櫛を持ち、灰の膝の上に座るオーフエリアが何をしようか何となく分かつた。オーフエリアは自分の髪の毛を梳かして欲しいのだろう。

「多分だけど、あなたの思つてのことと違うわ。私の髪はもうシリヴィに梳かしてもらつたわ。だから……、今日は私があなたの髪の毛を梳かすの」

いつも灰にやつてもらつてるから、今日はオーフエリアが灰の髪の

毛を梳かしたいらしい。

「わかつた、梳かすほど髪はない気がするけど、よろしく」

オーフエリアは器用に体を動かして灰の一房ほどしかない長髪の部分を優しく櫛で梳かす。その時、風呂から出た灰は薄着をしているため、いつも髪を梳かす時に感じる胸の柔らかい感触をさらに強く感じることになった。まあ、それに関してはいつも沢山されてるのでギリギリ慣れてきてはいる。だが、もう一つ、そうオーフエリアの顔がものすごい近くにあるのだ。一年前の悲しみに満ちた顔ではなく、普通の女の子として笑っている愛しの顔が近くにあり、自分を頑張つて落ち着かせる。何回か寝ている時にオーフエリアの顔が近くにあつたことはあるが、それも全て天然でやつてるから対処ができないのだ。シルヴィアはどちらもあり、判断に困る……。いやまあ、どちらにしても可愛いんですけどね。

「ん……、出来た」

どうやら、終わつたらしい。幸せなひと時だつたと思う灰であった。

「今日は早めに寝ない？新学期だからまだ体が慣れてなくて、少し眠いわ」

新学期で授業が始まつてまだ身体が長期休暇の時のリズムで若干のズレがあるのだろう。

「そうだね、ちょっと早いけど寝ようか」

時刻は11時、鬱もより少し早いぐらいの時間だ。

オーフエリアが膝の上から降りようとるので、その前にお姫様抱っこをして抱きかかえる。

シルヴィアと歓楽街にいるときにマフィアが面倒くさくなり逃げ出す時に一回しただけで、オーフエリアにするのは初めてだ。

「きや…………！」

突然のこと驚き、可愛らしい悲鳴をあげるが、自分が何をされたのか分かり、灰に身を委ねて、灰の首元に抱きついてそのまま寝よう

とした。

もともと寝つきの早いオーフエリアはベッドに着く頃には半分夢の世界にいた。

そのままゆっくりとベッドに下ろして、シルヴィアとオーフエリアの二人の間に入り灰も寝る体制に入る。

隣のシルヴィアの頬にキスをして、オーフエリアの頬にもキスをして二人を抱き寄せていつものように寝る。

条件反射というべきか二人は寝ているのに灰が近くにいることに気づいて、いつも寝る時と同じように抱きついてくる。二人の温もりを感じながら灰も夢の世界に入つていくことになる。

翌日、朝ごはんを食べている時に綺麗の頭を撫でたことがばれた。オーフエリアは気づいていたらしいが、灰が浮気するようなことはしないと知っていたため、シルヴィアと一緒に面白がり追求したらしい。それを口実にその日はいつもより甘えられたのはまた別の話

……

3人デート

綺凜を弟子にしてから初めての休日となり灰は女装することになる。朝早くから起きてシルヴィアとオーフエリアに着せ替え人形にされている。着てもらいたい服があるらしかったが、そんなことはなく、二人の私服をどんどん着せられていく。胸の部分のサイズが合わないかと思ったが、そうでもなく目立つほど違和感はなかつた。結局、シルヴィアが買つてきた服を着ることになつた。

二人のあの満足げな表情を見る限り恐らくただ着せてみたい服をどんどん着せて行つたのだろう。

「よし！これで大丈夫かな」

「ええ、これなら灰だとは思わないわ」

まさか誰もあの鳴神灰が女装して歩いているなど思わないだろう。二人が自分たちの私服を着せて遊んでいたことに関しては触れないとおく。触れたらいけない気がするのだ。

朝ご飯を食べて髪の色を変えて外に出る。灰は灰色から水色に。シルヴィアとオーフエリアは目立たぬように茶髪にし帽子を目部下にかぶる。灰の女装はまあ、普通の女の子の見た目となつていて。外に出ると3人は並んで歩く。さすがに腕を組むわけにはいかない。二人ならまだしも3人が並ぶときさすがに悪目立ちする。残念ながら二人は腕を組まず灰の近くを歩くことで満足していた。他人から見れば仲のいい3人に見えるだろう。

3人は昼食まではショッピングをして、昼食後は3人で甘いもの巡りなどをしている最中に見知った人物を見つけ、厄介ごとに巻き込まれるのだろうと予想する。

「次はどうしよっか？」

休憩がてら入つたカフェの外にあるテーブルでのんびりとする。今日は快晴で日差しがちょうどいいため店の仲の席より店の外にあら席の方が人がたくさんいる。

ちなみに灰は女装しているときは声を変えて声のトーンを上げている。さすがにいつものままだと、喋っている声が近くの人間に聞かれた時に不審がられるからだ。そのため本当の女子のように振る舞うことができる。

まあ、その分ナンパされたが女子3人で恋人同士だとわかるとみんな居なくなつた。

二人が口を揃えて『私たちはこの子にしか興味ないから残念でした』『私たち、この子以外はどうでもいいのよ』

などと、言うため聞いてるこっちが恥ずかしくなりそうちつた。

「灰の服をもう少し買うとか、どう？」

なんかしつとオーフエリアが怖いこと言つてゐる気がするが気のせいだろう。うん。

「あ、いいかもね。私たちの服ばかり買つてたから、今度は灰君の番だね」

もちろん、男物の服だよね？二人とも。そう目で訴えかけると二人とも笑つて返してくれたので、一安心すらできなかつた。

要は二人とも灰のことを女装させたいのだろう。まあ、女装も悪くない氣がするけどなど、思い始めている灰であつた。

次の方針が決まつたので3人は席を立ち再びショッピングモールに向かう。このアステリスクには学生が大量に買い物した場合、大型のショッピングモールなどは荷物を寮や自宅に配送してくれるサービスがあり、そのため、この二人は気兼ねなく買い物ができる。それはまあすごい、女子の私服は奥が深いのだ。

午前中に買つたショッピングモールで買い物することになり、灰は二人に着せ替え人形にされた。だいたい20から30ほど服を着せられた。そのうち半分以上買い、灰は買つた枚数だけ女装させられると思つた。まあ、秘密裏に外出する時などに利用させてもらうことになるなだろう。

買い物が終わり、自宅に配達してもらひショッピングモールの外に出るともう夕方になつていた。空は赤く染まり、休日のためたくさんの人が出歩いていたが、今はもうポツポツとしかいない為、二人は灰

の腕にくつついている。まあ、人が少ない為灰も受け入れた。

「ふふふ、灰君がまた女装してくれるの楽しみにしてるね♪」

どうやら今日のデートはシルヴィア的には大満足だつたらしい。
「最初は恥ずかしがつてたのに途中から堂々として、満更でもなかつたんじやない?」

オーフエリアが鋭いところを突いてくる。まあ、確かに途中から慣れてきて若干楽しくなつてきたのは絶対に二人には言わない。

「そ、そりや、堂々とでもしてないと店員さんに怪しまれるから、さ!」
頑張つて怪しまれない様な言い訳をするが、逆にそれが明らかに言い訳してますと言つてている様に思えて心配する。

「そう、ならいいわ」

「…………」

シルヴィアからの視線を感じて咄嗟に目線を逸らしてしまう。

(あ…………やっぱ、やらかした。これ女装するのが悪くなかつたつて言つてゐる様なもんじやん……まあ、いつか、樂しかつたのは事実だし)

目を逸らし、二人からの視線がさらに鋭く灰に突き刺さるが頑張つて耐える。男として負けられないのだ。

二人の無言の圧力に耐えきるとさつきまでが嘘かの様に、その圧力はなくなつた。

(とりあえず、一安心…………すら、させてくれないねの。はあ、めんどくさい)

「? どうしたの灰君」

「灰…………」

圧力はなくなり、3人で仲良く話していた頃にそれは起こつた。

道路の反対側にある緑地公園の方角から何者かの殺気を感じた。
自分たちに当たられたものではない為シルヴィアとオーフエリアは気づかなかつたが、数多くの修羅場を経験している灰にとつて、殺気

というものが存在していれば対象が誰であれ感知することは容易だ。
(はあ…まあ、僕たちに危害を加えるつもりのないのであれば放置するか、当事者さんには申し訳ないけど……)

「ううん、なんでもない。勘違いだつたみたい」

そう言つたが、二人はイマイチ納得していない様だ。灰が誤魔化す場合2パターンあり、一つは本当にどうでもいいこと。もう一つは二人を巻き込みたくない場合。両者もほぼ同じ様な反応をする為見分けがつかないので。

「大丈夫、今回は本当にどうでもいい事だから。安心して」

一人が納得していない様だったので、本当になんでもない事を告げる。

だが、この殺氣の対象にユリスが入つっていた事が分かり、少し後悔したのであつた。

家に帰り、いつも通りの夜ご飯を食べてお風呂に入り、テレビを見ながらイチャイチャしてる頃、クローディアから電話が来る。

「会長?こんな時間になんてだろう。ちよつとごめん、出てくるね」

「はーい」

「ん……」

二人に了承を取り、クローディアから電話を二階のベランダで出る。

たまに思うのがこの時のオーフエリアは本当に起きているのかが若干疑問に思う。

「会長なんですか?」

少しだけ待たせてしまつたが、電話が切れる前に出る事ができた。

『ひとつだけ、あなたにご報告が。ユリスが今日も襲撃を受けました』

その言葉を聞いて歯ぎしりをする。

休日に関しては何も出来ないのがもどかしい。

そして、灰は夕方の緑地公園方向の殺氣の対象がユリスなのではないかと予想する。

「会長。もしかしてユリスの襲撃場所って商業区の緑地公園ですか

？」

『え、ええそうですが。なぜ分かつたのですか？』

その時、一瞬だけクローディアの目が鋭くなつたのを灰は見逃さなかつた。もしかしたら自分の学園の序列1位が悪事に加担しているのではないかと。

「夕方、買い物の帰りに緑地公園から殺氣を感じたので、もしかしたらと」

クローディアの眼差しが疑念を含んだものからいつものに変わり心の中で安心する。この生徒会長だけは敵に回したくないのだ。

「会長。サイラス・ノーマンが一番怪しいです。おそらくそろそろ大きな行動を起こすでしよう。その時に決着を」

『その時には、力を借りると思います。私はどうしても立場上動きづらいので』

生徒会長はいろいろな権力がある代わりに自ら色々と事を起こす事はできないため、どうしても力で何かをしなければいけない事があるのだ。その時に灰はよく動いている。

「明日、放課後生徒会室に行くので詳細はその時に」

その言葉でこの通話は終了する。

今日の夜空は少し星が少ない様に思えた。

ベランダから部屋に戻る。シルヴィアの肩に頭を乗せており、いつもとは違った光景で灰が戻ってきた事に気づいた二人は慌てて離れるが、顔は真っ赤であつた。そんな可愛い二人と灰は今日も一緒に過ごす。至高の幸せとはこれの事だろう。

事件は終結へ

シルヴィアとオーフエリアと3人でデートをした翌日。朝から愛おしい二人の作る朝ご飯を食べてから学校に行くという、他の人間に知られたら嫉妬で殺されそうだ。特にシルヴィアのファンに。

アスタークスは基本晴れる事が多いが今日は朝は少し曇つており、少し嫌な感じが否めなかつた。雲は灰色だが、どちらかというと黒より見える。この様な天気だと昼間はかなり大雨となるだろう。朝から少し気が沈む結果となつた。

予想通り昼間は大雨となつたが、これがまた記録的な大雨となりより一層不安は募つていつた。

放課後には晴れ、雲ひとつない快晴となつたが、嫌な予感がヘドロの様に纏わりついて、灰の心を重くした。

その足取りで生徒会室に向かう。

扉を開けると先にいたクローディアが出迎えてくれた。

「あら？ 隨分と浮かない顔をしていらっしゃいますね」

隠すことなく、沈んでいる顔をしているため、さすがにクローディアに心配された。あからさま過ぎて逆に誰もが心配する様な面持ちでクローディアの対面に座る。

「今日の雨、いつもより酷かつたですよね？ それが何となく嫌な感じがして」

クローディアも灰の言つた事に同意するかの様に領き返す。今日の大雨はみんなの気持ちを暗くする。新学期早々これだと、先行きが怪しいからだ。

「もしかしたら、今日、ユリスが襲われると？」

クローディアは自分の考えを灰に話す。

「正直なんとも……。ただ、その可能性はあるけど、まだ放課後直ぐだし、人も多いはず。もし襲うならもう少し後だと思うんですけど」

灰は昨日の一件で少し自分の中に疑念が生じていた。自分の行動が大切な人を本当に守れるのかと。あの時ユリスは直ぐ近くにいた。

もし、あの時に気付けていればと。

「あなたが昨日のことでのい悩んでいるのはわかります。ユリスは貴方には心を開いているのは事実ですしだけであります。」

「ユリスにとつて貴方は守るべき存在ではなく、対等な存在として見ています。まあ、分かつてているとは思いますが……」

ユリスが友達を作らないのは、失うのを恐れるからだ。だが、灰は守られる様な存在ではないことをユリスは理解したのだ。だから灰には心を開いた。

「知っていますよ……自分が信頼されていることぐらい。でも、なんか気が乗らないんですよ」

「なら、書類の処理を手伝つてもらえませんか？ ユリスが色々と破壊したせいで大変なんです」

クローディアからのちよつとした気遣いに灰は感謝する事にする。直ぐに作戦会議しないのは灰がより考え込んでしまうからだろう。書類を手際よく処理していく。何回か手伝つていたので慣れたものだ。

その中で気になる書類が目に入る。

（……天霧綾斗の純星煌式武装の適性検査結果……『黒炉の魔剣』適合率97%か……なるほど、面白いやつだ）

『黒炉の魔剣』4色の魔剣のうちの一本。今までにそれを使用できたものはほとんどない、強力な純星煌式武装。

おそらくアスタリスクの純星煌式武装の中で最強とも言えるのがこいつだ。それを手なずけたという事は、それに見合つた実力があるという事だ。彼はもしかしたらアスタリスクに新しい風を吹かせてくれるかもしれない。

「私は少し届け物をしてきます。私が戻つてきたら作戦会議でよろしいでしようが？」

書類の処理を30分程しているとクローディアが立ち上がり、届け物があるらしい。

「僕も大分落ち着いたので、それで大丈夫です」

書類を無心で片付けているとそれ以外の事を考えなくて済み、落ち着く事ができるのだ。灰が大丈夫だと判断し部屋から退出するクローディアの背中を見届ける。

（今はまだ星獵警備隊として動いている事になつて色々と面倒な事になる……こういう時はこの肩書きは鬱陶しいものだ……）

放課後直ぐ起こつた問題は学内の問題として処理される。つまり、今灰が動けば警備隊が学園に干渉したとなり問題となるのだ。

（…………この事をもし犯人の黒幕が利用して、僕を動けなくさせようとするなら、すでに犯行は始まっているはず……）

夜襲撃した場合、確実にユリスを潰しにかかつているとみて間違はない。いくら自由に動けると言つてもさすがに反応は遅くなる。逆に放課後はユリスを襲撃した事で灰が出てくる事によつて、星導館を潰しにかかつてきていると言つて間違いない。

だが、どつちが狙いかなどわかるはずもなく、灰は考えるのをやめる。

（ほんと、最近は自分らしくないことばつかやつてている気がする……）

前まではただ天氣が悪いだけで気落ちする事もなく、ただ、自分の道を進んでいた。その隣には誰も居なかつたが今では二人。そして、ユリスも入る可能性すらある。すでに自分だけの人生ではないがためにここまで難しいのだろう。

（師匠達が大切な人を見つければより強くなれると言つてたけど…………いや、大切なものを守る力、確かに強いけど…………）

シルヴィアとオーフエリアを守るために灰はどんな手を使つても絶対に守り抜くだろう。

だが、それは本当に強いもののかは未だに理解していなかつた。灰がこの力について理解するのはもう少し先の事になる

…………

10分ほどして生徒会室の扉が乱暴に開けはなたれる。クローディアはそんな事しないため、誰か他の人が来たのだと思い振り返ると肩で息をしたクローディアがそこにいた。

「大変です！ユリスが一人で決着をつけに行つてしましました!!!」

「あの……バカ姫が……!!!」

最悪の事態だ。放課後直ぐにユリスが決着をつけに行つたとしたら、もうすでにかなりの時が経っているはず……。

慌てて駆け出そうと扉に走つていくとクローディアに腕を掴まれる。

「待つてください」

「なんですか！会長!!早くしないとユリスが！」

ユリスよりも移動スピードは速い灰だが、さすがにこれ程まで時間が空いてしまうと追付けるわけがない。

だが、今からでも何か出来ると信じて灰は行くのだ。

「これを、今のあなたには必要でしょう？」

そう言つてクローディアは生徒会に所属する印としてのバッヂを渡す。

そう、これが唯一の抜け道。警備隊に所属している灰がユリスの現場に行つたとしても他学園からの糾弾を交わすことができる。

「私も後から行きます、先に行つてユリスと綾斗の安全の確保を。そして、黒幕の捕縛をお願いします」

待つてましたと言わんばかりにそれを受け取り、クローディアにうなずき返す。

生徒会室を飛び出し近くの外へ通じる扉から外へ飛び出す。およそ10階分の高さの扉から一気に飛び出す。5階にも屋上があるのでも、そこを足場にして更に飛ぶ。星辰量を使い一気に加速し再開発工リアに急ぐ。

再開発エリアに着くも見渡す限り廃墟しかなく、ユリスがどこに行つたかさっぱりわからない。

「くつそ……どこだ……」じや手がかりがなさすぎる……」

すると突然莫大な星辰量が膨れ上がるのを感じる。

「この波長……天霧綾斗か……これほどの星辰量を持つているのか……いや、それよりも彼がいるところにおそらくユリスもいるはず」

なぜ彼が星辰量を隠していたかはこの際どうでもよく、今はユリスの救出が先だ。

ここから星辰量を感じたところまでおよそ5分。間に合うかギリギリのラインだ。

あと少しで到着というところで空から当事者たるサイラスが落ちてきて、同時に先ほどまで感じた綾斗の星辰量が急激に小さくなっていることを感じる。

ユリスの悲鳴が聞こえてきたのでとりあえずユリスに任せることにして、サイラスを片付ける事にした。

刀雷の魔術王

路地裏へと逃げていくサイラスをのんびりと追い詰めていく。その足音は静かだが再開発工リアの路地裏になぜか反響していた。そう、まるで死神の足音のように『カツン、カツン』と響くそれはサイラスを追い詰めていった。

「あ、あ、あ、」

顔は自らの涙で醜く汚れ、高所から落ちたことにより制服がボロボロになつているサイラスは行き止まりに追い詰められ、意味不明な言葉をただただ言つていた。

「会長から殺すなつて言われてるから殺さないけど、とりあえず捕縛させてもらうよ」

その時サイラスは灰が目の前から消えるところまでは理解していたが、次の瞬間には自分の四肢に力が入らず崩れ落ちた。

彼の後ろには刀を納刀しようとしている灰がいただけだ。

言葉を言い切ると同時に瞬間に加速して……いや、加速などしなかつた。一瞬でトップスピードに達したため加速という概念すらなくなる。それこそ灰がかつて統合企業財体と戦った時に会得した防御不能の殺戮の剣、敵に認識されずに敵を斬る技術。名前は付けていないが敢えてつけるとしたら『閃瞬』。

それによつて、刀が通つた軌跡、青みががつた銀色の線となり両手両脚の腱を正確に断ち切つた。

ここからさらに追い討ちをかけるならサイラスは本当に絶命するため灰は手を出さない。殺してしまつては意味はないからだ。ユリスを傷つけたことで、本当はこのまま殺したいが、自らを自制する。怒りに震える右手が再び刀を握ろうとするのを頑張つて抑えつける。灰は後で来るクローディアに回収を任せてビルの屋上にいると思われるユリスのところに行く。

それでもしないと殺してしまいそうだからだ。

「灰か……」

「灰か……」

ユリスは屋上で綾斗に膝枕をしているが指摘したらユリスが暴れて綾斗が起きてしまいそうなのでそれに関しては放置する。

「ごめん。もう少し早く襲撃されるつて分かつてれば……」

今日も気落ちしていなければ、いつもの灰であつたらこの襲撃も簡単に予想できたはずだ。警備隊として三ヶ月間幾つもの難事件で養つた感覚は今回のことぐらい簡単に予想できたはずだ。

「気にするな。人間誰しも間違えることはある。それに私は怪我はしたが、鳳凰星武祭にも問題なく出れる。それで良いではないか」

ユリスからの優しい言葉に灰はやつと肩の重圧が降りた。自分は護られるだけではないということを灰に伝えてくるユリス。全てを自分で守らなくても彼女たちは自衛できるのだと。

その言葉に何かこみ上げるものがあるが、ユリスの前では小つ恥ずかしく顔を背ける。

朝は雨であつたが今日綺麗な夕焼けとなり廃墟のビル群を赤く染め上げていた。

「ユリス、彼と出るんだね」

さつきユリスは星武祭に問題なく出れるといった。つまり、パートナーが必要な鳳凰星武祭に出ようとしているユリスにパートナーが出来たということだ。その条件に当てはまるのは綾斗以外いないからだ。

「ああ、こいつとなら、私の夢も叶えられそうだ」

ユリスの夢、それが何かは知らないが、友達の願いというものは応援したくなるものだ。

「昨シーズン鳳凰星武祭制覇者として微力ながら手伝わせてもらいますよ。お姫様」

茶化すように言うが、二人の親しい間柄を示している。ここまでユリスと仲が良い人物はこれから先も片手ほどしかいないだろう……

「ふつ、何が昨シーズンの鳳凰星武祭制覇者だ。昨シーズン全ての星武祭を圧倒的力でねじ伏せて史上二人目のグランドスマムを達成したお前に手伝つて貰えて何が微力だ」

灰は先ほど微力といつたが、灰が微力しか手伝えない訳がないのだ。アスタリスク最強は伊達じゃない。

「ま、僕が参加するのは一人である程度訓練した後だな。せめて基礎は作つておいてくれ。基礎がなきやどうにもならん」

ユリスも灰に1から基礎を教えてもらうのは気がひけるのだ。

「そうだな、綾斗に関してはアスタリスクの戦い方に慣れなくてはいけないから、三ヶ月。三ヶ月で基礎を固める。そしたらお願ひしよう」

三ヶ月。ユリスなら無茶して二ヶ月と言いそうであつたが、しつかりと三ヶ月と言つてくれて一安心した。

「うん、合格。ここで二ヶ月とか言つたらどうしようかと思つたよ」

ここで二ヶ月と言わないと言うことはそれだけユリスが心に余裕があるということだろう。

「じゃあね、ユリス。僕はもう帰るよ。遅くならないようにしなよ。歓楽街ならまだしも再開発エリアは僕の名前を聞いてもあんまり逃げ出さないからね」

「……？」

ユリスは知らない。灰が歓楽街にいるマフィアを全て半壊させ、今ではその全てのマフィアは灰の半ば言いなりであることを。マフィアを取り潰さないのは歓楽街を機能停止にさせると何が起ころるかわからないからだ。一部の不良が暴れ出しさらに面倒ごことになる。

ユリスが灰の言つた事を理解していないことを分かりつつも、そのままビルの屋上から飛び降り消えていった。

先ほどサイラスがいたところに行くと血だまりだけが残つており本人は消えていた。四肢の腱が断ち切られている以上、逃げることは不可能。おそらく銀河の諜報機関『影星』が回収したのだろう。

灰は近くにいる人物に声をかける。この人ならすべて知つているだろうから。

「会長、サイラスはどうなりますか？」

ビルにもたれかかるようにして灰の事を持っていたのはクローディア。いつも通り優しい表情をしているがその裏にたくさんの策略が巡らされているのを灰は知っている。

「そうですね……『影星』に任せているのでどうなるかは分かりませんが、おそらく二度と日の目を見ることは……」

まあ、当然だろう。他校と内通していた以上、普通の学生生活は送れないだろう。

「それにしてもお見事です。両手両足の腱のみを斬り出血量を最小限にする。さすがは我が校の不敗の序列一位『刀雷の魔術王』ですね」『刀雷の魔術王』…………？ 灰の二つ名は魔術師として異例の『刀雷』だつたはず。アスタリスクの学生は二つ名を持つ場合、魔術師なら魔術師という名が含まれるはず。しかし、灰はもともと魔術師としての力を使わないと、その名が含まれなかつた。しかし今度はどうだろう。魔術王。異例の極みだ。最強の魔女、オーフエリアやヘルガ、その二人ですら魔女という名は含まれている。

「僕の新しい二つ名ですね？」

「はい、かの『孤毒の魔女』すら力でねじ伏せた圧倒的な力。右手に握られた刀はすべてを斬り伏せ、左手に宿りし雷は全てを打ち碎く、その様な戦い方をするあなたにとつて魔術王という名は相応しいと私は思いますよ」

特別すぎてやめて欲しいと思ったが、せつかくの好意を無下にするわけにもいかないと想い受け入れる。

だが、雷を使うことなどほとんどない灰にとつてその名は少し変な感じがした。

「その名に恥じぬ様に頑張るとしますよ。会長」

ここに戻ってきた目的はサイラスの確認。それが終わつた以上もうここにいる理由はない。クローディアから新しい二つ名を受け取つたということでおし長居をしてしまつたか、早く二人の待つ家に帰りたいのが本心だ。怒りを制御するのは疲れる……。

「あ、そうだ会長。僕のことは下の名前で呼び捨てで良いですよ。同学年ですし、同じ生徒会なんですからね。それでは僕はこれで」

クローディアとすれ違ひ様に呼び捨てで良い事を告げる。灰は堅苦しいのが嫌いなのだ。そして、常套手段、返答を待たずに立ち去る。それが灰の突然二つ名を知らされて驚かされたささやかな仕返しだった。

去り際の灰の髪の毛が風になびき、夕焼けによつて赤く染まる灰色の髪の毛は血の様に赤く染まり、クローディアの心を僅かに曇らせた。

灰の手際があまりにも良すぎて不気味に思えたのかもしれない。そうまるで何人も殺してきている様な、死というものに慣れているのではと思ってしまうのだ。

クローディアは自分の中でそんな訳ないと整理をして自分もその場から立ち去つた。

間章——1

灰のいない日常

私の日常は半分は大好きな人の腕に抱きついた状態で目を覚ますわ。半分は彼が起きてしまってシルヴィに抱きついているの。彼の腕に抱きついている時ほど安心することはないわ。でも、シルヴィに抱きついても同じくらい安心できるわ。

多分、私は灰と同じぐらいシルヴィのことが好きなんだわ。本当にいまは幸せだわ。

鳴神灰。私の人生をえてくれた私の大好きな人。全てを諦めて自分を否定していただけだった人生を送っていた私を肯定してくれた人。だから、私は彼に全てを捧げるわ。この心も体も全て。ちょっと変かもしないけど、灰はその方が私らしいって言つてたから変えるつもりはないわ。

彼が『凍氷の皇帝』という事には驚いたけど、別にそれで私の彼への想いが変わる訳ではないわ。彼が何故『凍氷革命』を起こしたのか教えてもらい、より一層彼への想いは強くなつたわ。絶対に何があつても私は彼と添い遂げる。愛が重いって言われるかもしれないけど、私はそれしか伝え方を知らないから、変えるつもりはないわ。

今日は灰が朝から休日なのに緊急の呼び出しがあつて夜遅くまで帰れないそうよ。だからシルヴィと一緒に家でのんびりするわ。外に行くのも良いけど、たまにはのんびりしたいの。

シルヴィと一緒にいてつまらないなんて感じたことはないけど、やつぱり灰がないことは寂しいわ。でも、とりあえず寂しさは感じないと思うわ。だつて、シルヴィはこうなるとおそらく……
「ファーアちゃん!!」

やつぱり、後ろからシルヴィに抱きつかれたわ。

まあ、全然嫌じやないし、むしろ私から行くのはなんか恥ずかしいから助かってるわ。

「どうしたの？ シルヴィ？」

「ううん、なんでもない。ただ一緒にいたいからー」

家にいる時はいつも増してスキンシップが激しいのよね。シルヴィって。灰だけじゃなくて、私にも凄い。

当然といえば当然ね。家に入る時間があんまりないからその分たくさん甘える。当たり前の事だわ。それに私だつて寂しいわ。

「私もよ。でも、先に朝ごはん食べない？」

朝から灰が緊急の呼び出しで慌しくて朝ご飯を食べる時間がなくて、まだ食べてないからお腹ペこペこだわ。

「たしかに。じゃあ、今日は朝ご飯は私が作るからフイーアちゃん少し待つってね」

「ええ、お願いするわ」

灰は適当に買つて食べると言つてたけど、少し心配だわ。彼は一つ何かに集中しちゃうとそういうことすぐ忘れるから……

シルヴィの料理を食べれるのに灰は残念ね。

ふふ、灰が聞いたらどんな顔するのかしら……、やつぱり悔しがるかな……

「フイーアちやーん、出来たよー」

美味しそうな匂いがすると思つたらどうやら朝ご飯が出来たのね。

久しぶりのシルヴィの料理楽しみだわ。

「ええ、早く食べたいわ」

久しぶりのシルヴィアの料理は最高に美味しかったわ。

「片付けは私がやるわ。シルヴィはゆつくりしてて」

せつかく作つてもうつたがら片付けぐらいは私がやらないとね。

「ありがとう、じやあ、お言葉に甘えて先にのんびりさせてもらうね

」

さて、私ものんびりしたいし、すぐに終わらせなきやね。

……なんでこうなったのかしら???

「むにゅうーーーー」

今、私は世界の歌姫と言われているシルヴィに膝枕をしているのだけど、私なんかがしていいのかしら?

「シルヴィ、いいの? 私なんかがあなたに膝枕して

「もうー、いいのー、私がいまして欲しい人はフイーアちゃんなんだもん。これは誰にも邪魔する権利はないもん」

わ、わかつたから、腰に抱きつくのはやめてほしい……シルヴィの綺麗に手入れされた髪つくてくすぐつたいのよね……それに何故か恥ずかしいのよね……

そのあとは逆に膝枕してもらつたり、まあ、その色々やつたわ。嫌な気持ちはしなかつたし、むしろ、灰にして貰う時ぐらい気持ちよかつたわ。やつぱり、私はシルヴィのことも大好きなんだわ。

そのあとは…………思い出すだけで恥ずかしいからやめとくわ

結局、1日が過ぎていって夜になつても灰は帰つてこなかつたわ。なんでも、界龍まで問題が広がつちやつて鎮圧するのに時間がかかるらしくて、朝まで帰れないそようよ。

だから二人で夜ご飯を食べてお風呂に入つて早めに寝ることにしたの。明日の朝早めに起きてすぐに『おかえり』を言えるようにしようつて。

お風呂に入るのつてやつぱり気持ちいいものね、特にこの家に来てくれるはシルヴィと一緒に入ることが多いけど、なんて言うのかすこしお恥ずかしいわ。同性から見てもシルヴィは綺麗だし、見惚れちゃうというか……

あれ…………? ああ、そつか朝に灰が軽くお風呂に入つた時の寝間

着がまだあったのね……

シルヴィは、まだ、お風呂に入つてゐるだろうから、これを着ても
ばれないよね……

うーーん、やつぱり腕の長さが余っちゃうわ。これつても、萌え
袖つて言うのかしら……灰が見たら喜んでくれるかな？

そういえばなんで腕の長さは余つてゐるのに服の丈は余つてないん
だろう……灰と私つて身長差10センチぐらいあるから余るはず
……つて、そういえばこれつて男性用だつたわ。この胸のせい丈
がちようど良くなつたのね……

灰つて胸が大きいほうが好きなのかしら？世の中には小さいほう
がいいついう人もいるし……うーん、いつか聞いてみましよう。

「ふうーー、さつぱりした……つて、ファイアちゃん何してゐるの??」

灰の寝間着に夢中になつてたからシルヴィが上がつてくるの気づ
かなかつたわ。どうしよう、恥ずかしすぎる。

「え、えつと、これは、その……」

「どうだつた？灰君の服は」

うう、灰に包まれてる感じがして良かつたなんて恥ずかしくて言え
ないわ……

「分かるよ、その気持ち一回やつたことあるもん。私も。そしたら灰
君に見られてすごい恥ずかしかつたの。まあでも、後悔はしない
わ。だつて、寂しい時の対処法が見つかつたんだもん！」

そうだつたわ。シルヴィつて結構寂しがりやだつたからこういう
事考えててもおかしくは無いわ。

そうね、シルヴィだつて同じ気持ちだつて事がわかつたからなん
か、気持ちが軽くなつたわ。

結局二人で灰の服を着て寝てたら思つたより灰が早く帰つてきて、
ベットで寝てゐる姿を見られて恥ずかしだつたわ。だつて、寝顔を見
られるだけなら、まだいいわ。だつていつも見られてるし……でも、

灰の服を着て寝てたのがばれたのが一番恥ずかしいわ……

でも、灰が無事帰つてきてくれて嬉しかったわ。それが一番大きかつたわ。

一章の人物紹介、用語解説

鳴神灰

所属学園： 星導館学園

序列： 序列外 → 序列18位 → 序列1位

二つ名： 『刀雷』 → 『刀雷の魔術王』

身長： 175cm

使用する純星煌式武装： 『冰青の天界剣』、『ラヴィータ・インユラ雷桜の断罪剣』

本編の主人公。アスタークリスクで無敗伝説を築いている超有名人。中学三年間でグランドスマッシュを達成し灰の持つ刀は一度抜き放たれたら勝利するまで攻撃の手が止まることのないと言われている。また、過去数回しか使われなかつた『鳴神流抜刀術』防御不能にして不可視の太刀と呼ばれている。

髪の毛は灰色で目も灰色。

戦闘スタイルは基本的に刀のみで戦い、自身の能力はほとんど使わない。近接戦闘だけで大体の相手は倒せるからだ。

シルヴィア、オーフエリアとは王竜星武祭終了後から付き合つており、彼女たち二人の関係も良好だ。学園内の寮ではなく、中央区の外れに家を持っていてそこに三人でのんびり暮らしている。

他にも各校の有名人とは顔見知りであり、ガラードワースのアーネスト、界龍の星露などと個人的な交友関係がある。

また、星獵警備隊に所属していく、三ヶ月で幹部に昇進した。歓楽街が主な仕事場であり、そこに巢食うマフィアたちは灰の半ば言ひなりである。しかし、完全に潰すのは歓楽街が崩壊するという事で、違法なもののみ摘発する事にしている。

星獵警備隊の幹部服は他と違い、すこし豪華になつていて、灰のものは執事服を基本としていて、そこから肩に幹部という証の六芒星があり、肩から胸ポケットのところ銀色のチエーンで繋げられている。真っ白の手袋をしておりかなり目立つものとなつていて。

本人の性格は気まぐれであるが、その事を知る人物は灰と親しい人物だけである。それを知らない人は、だいたい近づこうとすら思はない

い。

『凍氷の皇帝』

かつて統合企業財体と戦い、『凍氷革命』と言われるものを起こした。

統合企業財体の最高幹部は未だに『凍氷の皇帝』の名を聞き震え上がるとも言われている。

かつての力は『三首聖女の首飾り』という純星煌式武装によつて封印している。しかし、この『三首聖女の首飾り』の力はこれだけで無いと思つてゐる。灰の師匠達はそんな単純な物を渡すような人たちではないからだ。

日本の隠された靈峰に住んでいる仙人のような人達に鍛えられ、統合企業財体に対抗しうる力を手に入れた。

『凍氷の皇帝』として活動するときは髪の毛は、『冰青の天界剣』の代償によつて水色となつてしまふ。また『雷桜の断罪剣』も使うと長い部分の髪の毛が金色に染まる。

『灰の家』

アスタークスの本島にあり、全てを知つてゐるヘルガにはたまに愛の巣と呼ばれている。

高級住宅街に建つており、3階建てで地下もある。

地下は主に訓練場と純星煌式武装の調整をするための工房がある。

一階の大部分は風呂となつており、他には灰の星獵警備隊の制服が置かれている部屋があるだけである。

二階はキッチンにリビング、ダイニング、そして、灰の部屋がある。ここはほとんど使う事はなく、制服など、灰の服が置かれている。

三階は寝室とシルヴィアとオーフエリアの部屋がある。といつてもほとんど二人は使用しておらず学校の勉強をする時以外はほとんど使わない。他には衣装部屋があり、一人の服と灰の女装用の服がたくさん置かれている。

また、大量のウルム＝マナダイトや『冰青の天界剣』と『雷桜の断

『罪劍』などが置かれている部屋もここにある。

『**冰青の天界剣**』^(ラヴィータ・イシユラ) 柄は蒼く、紫に輝くウルムリマナダイトをコアとし、水色の刀身を持っている。そして柄から色の同じ蛇のように細長い二本のオーラが螺旋状に刀身の周りに巻きついている。巻きついているというよりかは締め付けようとしているに見る事ができる。

また、オーラに締め付けられるのを嫌がるかのように刀身からエネルギーを発して拒んでいた。

エネルギーの反発により、一層エネルギーが高まつており、見たことも無いような高エネルギーを発していた。

能力は氷を操る力をしており、その出力は純星煌式武装の中でも最も高い内の一振り。統合企業財体『バベラトス』の總本部を壊滅させた時に使用したエネルギーは灰ですら制御が難しく、臨界状態と呼んでいる。

代償の一つに髪の毛が水色に変色するというものがある。

『**雷桜の断罪剣**』^(キュラリー・フリークス)

柄は綺麗で鮮やかな桜の色で刀身は黄金に輝いている。そして、蛇のように細長い桜色のオーラが刀身を螺旋状に巻きついているが、こちらは『**冰青の天界剣**』^(ラヴィータ・イシユラ)と逆向きに巻きついていた。オーラは刀身を締め付けようとせず、優しく包み込んでいるように見えた。

『**冰青の天界剣**』はオーラが刀身を締め付けようとし、刀身がオーラを拒絶することによる反発から生まれるエネルギーによりエネルギーを增幅させてているのに対し、『**雷桜の断罪剣**』^(キュラリー・フリークス)は刀身とオーラがお互いを強化しあうことで、『**冰青の天界剣**』よりもエネルギー量は高くなっている。

能力は雷を操る力を有し、今まで所有はしていたものの使う事はなかつた。『リヒシユタン』との戦いにおいて、一度だけ活性化状態で使つた事はあるが、これを見たことあるものは全員死亡、世間にその情報が出回る事はなかつた。

代償の一つに髪の毛が金色に変色するというものがある。

この二本は一対の剣で、同時に適合しない限り使用する事はできない。

オーフエリア・ランドルーフエン

所属学園：レヴォルフ黒学院

序列：1位

二つ名：弧毒の魔女

身長：165cm

灰が鳳凰星武祭制覇後、再開発エリアにて襲撃をかけるが軽々と退けられる。その時に灰が星辰量に干渉して漏れ出ている瘴気を浄化して自らが制御できる量に抑えてもらう。その後は一人きりで2時間ほど話してから別れ、その後の交流はなかつたが自らを肯定してくれた灰に惚れ込む。

その後王竜星武祭で決勝で灰と戦い、敗れる。その夜に襲撃に遭い重傷を負った時、再び灰と再会する。

シルヴィアと話して灰の事が好きだという気持ちを改めて確かめる。シルヴィアも灰の事が好きであり、二人で灰と付き合う事になる。

灰が『凍氷の皇帝』^{ムフェト・シュヴァルツ}だとしても気にする事はなく、自分の身も心も全て灰に捧げると言っている。

家では朝ごはんと夜ご飯を作る事が多く、最初は料理が得意ではなかつたが、シルヴィアや灰に教えてもらい今では二人の胃袋をガツチリとつかんでいる。

純粹で気付かないうちに大胆な事をしており、後から気付いてすごい恥ずかしがつていていたりする。

眠くなるのが早く灰の腕に抱きついてそのまま寝落ちする事がある。寝る時も右腕に抱きついて寝るのが習慣となつており、一

度抱きついたらもう離さない。朝は灰より早く起きる事もあるが、灰が先に起きるとシルヴィアがいる場合はシルヴィアに抱きつかれる。灰だけではなく、シルヴィアのことも大好きである。

シルヴィア・リューネハイム

所属学園：クインヴェール女学院

序列：1位

二つ名：戦律の魔女

身長：165cm

灰が歓楽街でマフィアに絡まれているシルヴィアを見つけて、助けられて一緒に行動する仲になる。灰は歓楽街に用はないが気分転換になるという事でシルヴィアの人探しに付き合う事にする。灰は最初はシルヴィアの正体がわからなかつたが、星辰量の波長によつてすぐ分かつたとしても、気にせず前と同じように振舞つていて。

何回も一緒に行動している内に灰の事を好きになるが、自分はアイドルであり恋愛など出来ないと決めつけて、灰への想いを隠す。しかし、王竜星武祭終了後にオーフエリアに言われた事をきつかけに自分の気持ちには嘘をつかない事を決める。

灰と一緒に家の住んでいるが、半分は仕事で家に入れないため、帰つてくれと猫のように甘えてくる。ペトラにも見せないような表情を見せる事が多い。灰の事を女装への道へ誘つた張本人。

突然、突拍子もない事を思いつき灰やオーフエリアを驚かせてくる。灰の女装もその一つである。

寝る時は何かに抱きついてないと寝れないのか、灰が先に起きてしもうとオーフエリアに抱きついている。

ペトラも灰がシルヴィアの癒しになる事は知つてゐたため、出来る限り一緒にいさせてあげたいと思つてゐる。

シルヴィアは灰の事が大好きだが、オーフエリアの事も大好きである。

?????

灰と共に鳳凰星武祭、獅鷲星武祭を制覇した猛者。序列は2位で

あつたが、突如アスタークから姿を消す。

最後に灰が話をしたが、それでも決意は固く引き止める事はできなかつた。

武器は大型の鎌を使う。魔術師ではなく、純粹な近接戦闘能力は灰に匹敵する。

影で『ムフエト・シユヴァルツ凍氷の皇帝』を崇拜している。

????

灰の義理の妹。若干ブラコン。

『エール・ロザリ三首聖女の首飾り』

灰の星辰量の大半をこれによつて封印されている。

本体の他に二つ分体があり、三つ全てが反応することによつて封印は解除されるが、本来の機能とは違い、オーフエリアの重傷を治すなどがあり、不明な点が数多くある。

『ノアの方舟』

統合企業財体『バベラトス』『リヒシュタン』の残党が集まつた集団。他の統合企業財体にしては珍しい星脈世代至上主義を掲げており、その影響力は他の六つを大きくしのいでいたが、灰によつて滅ぼされる。その後の生き残りは最強の星脈世代たる『ムフエト・シユヴァルツ凍氷の皇帝』を崇拜し始める。狂信者の集まりで離反するものもいたが、逆に集まつてくるものもあり、その数は500を超えると言われている。一人一人が暗殺技術から純粹な戦闘能力まで全てが高水準。

行いは残虐で裏世界では絶対に喧嘩を売つてはいけない相手として広まつてゐる。

銀綺覚醒 疾風刃雷

綺凜と師弟関係になつてからおよそ三ヶ月が経つた。

綺凜はその後灰に嫉妬している序列2位に決闘を挑まれてそれを返り討ちにして晴れて序列2位となつた。二つ名は『疾風刃雷』彼女のこと鋭い刀のことをよく表しているいい名前だ。

序列2位だつたものは、一年前繰り上げで序列3位から2位となつた。その後の王竜星武祭でまさかの予選負けをしてしまい、逆に最強の魔女と言われたオーフエリアを打ち破った灰は優勝をして、灰に嫉妬することとなつた。公式序列戦でも灰に二敗している以上挑むことはできず、その後の新入生歓迎の序列戦で灰と少しだがいい勝負をした綺凜に八つ当たりをするかのように決闘を挑み、敗れ、序列外となつたのだ。

その後は不気味なほど音沙汰がないが聞いたところによると自信を失い、かつての覇気はなくなつたとのこと。

綺凜との修練は週4回か5回ほど行つていた。平日は放課後しかできないため回数ほどの時間は修行できているわけではない。それでも週10時間以上はやつており十分ではある。

綺凜は最初は灰のスピードに慣れるので精一杯であったが、今では灰の最高速度の8割でちゃんと打ち合えている。灰の8割速度に対応できる学生はこのアスタリスクに10人ほどしかおらず、中学一年である綺凜はさすがと言えた。

さすがに力加減はしている。綺凜の力ではまだ灰の力を完全に受け流す事はできないからだ。

技量、経験とまだまだ灰には劣るもの、着実に綺凜も進歩しており、彼女の才能だけではなく、しつかりとした努力が伺える。綺凜もそのことを理解しており少しでも灰に追いつけるように、灰の技をど

んどん吸収していった。

刀藤流と鳴神流の基本的な事は似ており、一対一に重きを置くのが刀藤流で、一対多に重きを置くのが鳴神流だ。

そのため、基本がしつかりできている綺凜は鳴神流の技も簡単に習得できた。

今日も綺凜と灰は模擬戦をしており、これで今日は3回目だ。今までにすでに200を超える模擬戦をしてきたが、灰は未だに負けた事はない。

一戦ごとにじっくりと反省会をしているため放課後の2時間だと三回が限界だ。灰が一つ一つ気になつたことを綺凜に聞き、綺凜がなぜその行動をしたかを聞き、綺凜が説明し、そのことでについて灰と議論をする。完璧になることは幾ら才能があろうとも不可能だが、完璧に近づけることはできる。綺凜程ならより近づくことができると思つていて。

灰は綺凜に問いかける時にわざと正しい選択をした時のことでも織り交ぜて質問することで、綺凜に戦いの中で常に考えることを習慣化させ、それを一人で出来るようになると最優先とした。徐々に綺凜は戦闘中でも自分の選択について考えることも慣れてきていた。

はじめは深く考えすぎて集中ができなかつたり、逆に浅く考えすぎたり、また過去のことを引きずつてしまつたりなどがあつたが、徐々に自分の最適解に近づくことができた。灰はわざとこれに関しては大幅に違わない限りアドバイスはしなかつた。何もかも教えるのが弟子にいい影響をもたらさない事を知つていたからだ。

そして、本日3回目の模擬戦が始まる。反省会の時間も少しづつだが短くなつていき、綺凜の成長を灰も心の中で喜んでいた。

二人で刀を構え向き合う。綺凜は正眼に、灰は『雲霄』を片手でいつもとは違い下段に構える。

下段……つまり、防御主体ということだが、油断など出来るわけがない。

灰の速度は8割と抑えられているものの筋肉の使い方、体の動かし方などにより8割以上の速度で刀を振るうことができる。何より動体視力、反射神経が半ば人外の域に達している。また、それによるわずかな緩急が綺凛を騙す。

それに加え、灰は綺凛が後の先をとろうとしても、灰は後の先の先を取ることが可能なため迂闊にカウンターを狙えない。

つまり、綺凛に許されるのは灰を一方的に攻め立てるか、それともカウンター覚悟で後の先を狙いにいくか、手段は限られていた。

灰はわざといつもと違う構えを取り、綺凛を試した。三ヶ月、ちょうど綺凛に稽古をつけ始めてから経ち、テストの意味が込められていた。

(さあ、どうする綺凛？君がどれだけ成長したか、僕に見せてくれ)
綺凛は一気に駆け出して灰に急接近、灰の下段に構えている『雲霧』に刀を振り下ろし、『雲霧』をさらに下に追いやる。しかし、そのような単調な攻撃は灰には通じず、一步下がると同時に刀を上手く使い攻撃をかわす。綺凛は気にせず何度も果敢に攻撃を続ける。

(…………おかしいな。綺凛は我武者羅に攻め込むことは絶対にしないはず、何かをしようとしているのか……)

灰はこの我武者羅な攻撃を受け流しながら何回も反撃をする機会を窺うが、綺凛の策が見たくなり、わざとスルーしていた。

そして、28合目、綺凛の攻撃は灰に避けられてしまい、攻撃は空を切る。その絶対的な隙を灰は『雲霧』を振り上げ、綺凛を吹き飛ばす。

大きく開かれる間合い、綺凛は着地と同時に納刀しこう呟いた。

『刀藤流抜刀術・折り羽』

灰の目には綺凛が抜刀し灰に攻撃を放とうとしているように見え、

反射的に防御しようとするが、その瞬間灰はあることに気づく。

（踏み込み足に体重が乗っていない……なるほど虚像の剣か。虚像には虚像でお返しを）

綺凛のこの抜刀術が虚像であることに気づき、自らも虚像を作り出す。

とは言つても魔法で作り出すわけではない。綺凛はおそらくこの虚像が見破られる可能性を考慮しているが、自分の目に映る灰が防御姿勢を取つていたら見破られない勘違いするだろう。

その思い込みの瞬間に灰は『折り羽』と同じ原理を使い、虚像を作り出す。完璧には作り出せないが、綺凛と剣を合わせていううちに刀藤流の大まかの根幹は理解しており、一瞬だけの再現ならなんとか出来る。

綺凛が灰の虚像に気付かぬまま喉元に刀を突きつけるがその瞬間、彼女にはまるで霧のように消えてしまう灰の姿が写るが、その1メートル程後ろに刀を納刀して構えている本当の灰が綺凛の策略に敬意を表して、自分なりの返礼をした。

『鳴神流抜刀術・犀撃』

刀を大きく前に突き出した状態の綺凛のほぼ真下から突然現れたかのように見えた灰の刀が、綺凛の顎下に突きつけられる。

『犀撃』は他の抜刀術とは大きく違う。この技はしゃがむように姿勢を低くして、相手に急速接近、体をのけぞらせるかの勢いで状態を大きくそらし、その勢いで刀を抜刀。肋骨の下から刀は体内に侵入、心臓を断ち、そのまま頭までを切り裂く。

この抜刀術が他と大きく異なるのが刀の抜き放つのが横ではなく縦ということである。

しかし、この技をそのまま持ちいれば綺凛は死んでしまうので一步間合いを大きく取り、ちょうど振り抜いた時の切つ先が顎下になるよう調節した。

トレーニングルームのシステムが模擬戦の終了を告げ、二人は刀を

下す。

「今日も勝てませんでした。完敗です」

だが、綺凛の顔は落ち込んではいるもののその目は闘志に燃えていた。

次こそは、それを何回も繰り返しても折れない心を彼女は持っていた。アスタークスに来てから、実家では味わえないような敗北の連続を綺凛は悔しいとは思うものの、勝ちたいと思う気持ちが強かつたからだ。

「まさか折り羽を簡単に見破られて虚像を虚像で返されるとは思つてもいませんでした」

綺凛は苦笑しながらそう言つた。奥の手を簡単に読まれ、そのまま返されたのだ。苦笑する他ない。

「刀藤流も鳴神流も根本は同じだから、見様見真似でやつただけだから、一回しか通用しないさ」

こんなものハツタリに過ぎず、綺凛には二度目は通用しない。

「それでも、一回通じるのであれば十分だと思います」

まあ、星武祭は一発勝負であり、二回目は無いためその心配はないが、灰は弟子に負けるのが嫌なだけだ。

「綺凛の成長がすごいからそろそろ慌てるのさ」

少しあおどけてみせる。

「灰さんがそう言つたとしても、そんなに説得力はないですよ？」

慌てるそぶりすら見せない灰の言葉を信頼性のかけらもなく、綺凛は信用していなかつた。

（まだ慌ててはないけど、でも、すごい勢いで成長しているのは間違いないのに、綺凛は本当に謙虚だな……）

謙虚と言うより、師匠である灰は綺凛の目標であり、レベルが高すぎるるので謙虚にならざるおえないのだ。

「あー…そうでした。叔父様が灰さんと一回話をしたいとおっしゃつて、その、明日の放課後とかどうでしようか……」

綺凛が思い出したかのように言つたことは灰に少し難題が加えられることになつた。

と言つても綺凛の叔父は灰の訓練に干渉はしてこないので、放置していたが話がしたいとなると面倒くささが増す。

「いいよ。明日の放課後にじやあ、よろしくと伝えてもらえるかな？」
「はいです！」

こうして灰は綺凛の叔父と話すという少し憂鬱なイベントが発生した。

過去を胸に

綺凜から明日叔父が話したいということを伝えられて少し、ほんの少しだけ憂鬱になりながら帰つていた。

灰は別に綺凜の叔父である刀藤鋼一郎が嫌いではない。好きでもないが……

遠目に見た限り、出世欲が強いような目つきをしており、綺凜のことを利用しているように思えたのだ。灰は統合企業財体の内部事情に関して興味すら湧かないが、綺凜は灰の弟子であり、それを利用するのであれば少しは気になる。

「はあーーー」

柄にもなく大きなため息をついてしまう。統合企業財体に関するしている人間は何かと口が達者で灰が苦手とするところだ。おそらく鋼一郎氏も同じであろう。

「そんなにため息をついてどうしたの？」

突然背後から声をかけられる。こんな場所で灰に話しかける人物は限られている。

シルヴィアは、3日前にアジアツラーに出発したためアストリスクにはいない。

つまり、ここで会うとすれば一人しかいない。

「明日面倒くさい人に会うことになつて憂鬱……」

「ふーん？ 貴方ならそういう人が相手でも大丈夫だとは思うのだけど」

その人物、まあ、オーフエリアなのだが、横に並んで手を繋いでくる。もちろん、恋人繫ぎだ。ちなみに、灰はこうして家に帰るときは気配を消しながら歩いている。それでもしないとまともに歩けないから。

「まあ、どうにかはするけど……それよりもフイーアは夜ご飯のための買い物帰り？」

考えたくないのとおりあえず話題を変える。明日のことは明日どうにかする。いわゆる現実逃避だ。

灰と手を繋いでいる手と反対側の手にスーパーの袋があつたので、それを代わりに持つてあげる。

「ええ、今日の夜ご飯と明日の朝ご飯の買い物ね。いつもは通販だけど、たまには自分で買い物するのも良いものよ」

いくら変装していると言つてもいつバレるかわからないので、通販で頼むことが多い。とくに学校がある日は買い物の時間がそこまでないので、よほど早く帰らない限りは買い物はしない。休日は3人で買い物に行くことが多い。とくに新学期になつてから灰は女装出来るようになつたので、周りを気にせず買い物ができる。

何かと女子二人と歩いていると周りによく絡まる。それに、変装しても美人であることに変わりはない二人はよく目立つ。

何かと有名人である灰は最初は追い掛け回されるのに慣れなかつたが、今はすっかり慣れてしまい、気配を消して歩くことにも苦痛は感じなくなつた。

そのまま家に家に帰り、オーフエリアの作ってくれたご飯を食べて、寝る。ここにシルヴィアがいる時が一番幸せであるが、自分が惚れた女性がやりたいことを生き生きとやつているのが、一番輝くと思つてゐる灰はそこまでは求めない。

現にオーフエリアは灰の家で料理している時は一番可愛く見える。

シルヴィアとオーフエリアの関係は物凄く良好で、心配する必要などなかつた。

(この幸せを守るためなら、僕は何でもしよう。それが唯一復讐に身を堕とした僕にできることだから)

灰が幼い頃に起こつた惨劇は灰を復讐というものに支配されるには充分だつた。

これはまだ灰が小学三年生だった頃。

鳴神家の道場で稽古をつけて貰っていた灰の家は道場から1キロ以上離れていた。

灰は小学三年生にして鳴神家の剣術は『免許皆伝』となっていた。そのスピードは周りをいともたやすく置いていった。

そして、事件が起こつたあの日、灰は稽古に熱が入りすぎて夜まで道場におり、師範である灰の叔父に家まで送つてもらうこととなつた。

家に帰つてみると家の灯りは点いておらず、おかしいと思つた叔父は家中に入り部屋を一つ一つ見ていくと二階のリビングで惨殺された灰の両親を見つける。その光景を見て叔父は固まつてしまい、灰がその光景を見てしまうのを防ぐことはできなかつた。

慌てて止めるも間に合わず自分の両親が惨殺された光景を見てしまい灰は倒れてしまう。

後々叔父から聞いたところによると警察は通り魔の仕業だと言つていたらしい。が、叔父は二つの統合企業財体の名前を出した。

その時、灰は誓つた。この世の中を支配して玉座に踏ん反り返つている者に復讐すると！

その復讐心はどんどん燃え上がつていつた。

もちろん、叔父は止めた。

だが、幼い灰の中に秘められた狂気とも言える復讐心を感じ取つた叔父は止めることができず、鳴神家の宝刀を灰に授けた。そして、こう言つた。日本には隠された靈峰があり、そこに七天大聖と呼ばれる七人の仙人たちが住んでいるため、彼らに弟子入りしろとのこと。

鳴神流の開祖は七天大聖の弟子であり、鳴神家の当主には代々その場所が受け継がれていつた。

灰は靈峰で七天大聖に弟子入りして、一年の修行の末、革命を起すための力を習得した。

かの二本の剣は灰自身が作つたものではなく、彼らがいつの日か起
こるであろう大災厄の対抗手段として七人全員の力を集結して作り
出したものである。

それ故とても強力であり、最後まで灰に渡すかどうか悩んだとのこ
と。

二本の剣を手に入れた灰はついに復讐を始める。

灰は片つ端から『バベラトス』と『リヒシュタン』の施設を襲い、そ
こにいる戦闘員、並びに研究員など皆殺しにしていった。もちろん、
施設によつては民間人がいるため、民間人は殺さないように細心の注
意を払つていた。

初めはただの犯罪者集団かと思われていたが、次第に逃げ延びた民
間人の証言が集まり出し、ある一人の星脈世代によつてこの事件が引
き起こされていることがわかつた。

吹き荒れる星辰量のため顔は確認できなかつたが、水色の髪に水色
の剣を携えていることは一致しており、そのことから灰は『凍冰の皇
帝』と呼ばれるようになつた。

約三ヶ月以上に及ぶ戦いの末灰は『バベラトス』と『リヒシュタン』
の総本部を壊滅させることが出来た。

疲れ果てた灰は靈峰に戻り、七天大聖の元へ戻る。その時の灰は人
間らしさはなく、まるで機械のようだつたと言つていた。

重すぎる運命を背負つてゐる灰に七天大聖はある首飾りを授けて
アスタークスに送り出す。その為の教育を約二年間に及ぶ灰は受け
た。

なおかつ、七天大聖は靈峰の地下に眠つてゐる数多くの強力なウル
ム・マナダイトを灰に渡し、また純星煌式武装の作り方を教えた。

いつの日が必要になる時が来ると言わたが、よくわからないま
ま、灰は受け取つた。

この事をそのままシルヴィアとオーフエリアには話しており、その

時二人は涙を流し、灰の過去に悲しみを覚えた。

話したのが夜であつたためその日はすぐに寝たが、その次の日、ほとんどの時間二人に抱き着かれている状態だったのはいい思い出だ。もちろん、二人の過去も知っている。

自分の幸せを守るため、そして、二度とこのような悲劇が起こらないように統合企業財体の動向を牽制する。
それが今、灰がやることだ。

現に『凍氷革命』が起つて以来、統合企業財体の動きは消極的になっていた。

刀藤鋼一郎

オーフエリアに癒してもらい、なんとか鋼一郎との対談に行くだけの精神を回復した。

多分いつも以上に甘えてしまった…………いつもは甘えられる側だから、たまにはね？

逃げるつもりはないが、どうしても逃げたいという気持ちが強くなってしまう。

向こうから話したいと言っていたので話題を持つしていく必要がないのが唯一の救いと言えよう。

時間を着実に過ぎていき、放課後となり綺凛から連絡が来た部屋に向かう。

外に綺凛が待っていたので、部屋に入る。綺凛は部屋に入つてこないで外で待つているようだ。

（綺凛が居たら話しづらい事を話すということか……）

綺凛が居ないということはどんな事を聞かれるか想像がつかなかつた。

綺凛というセーフティーガくなつた以上、灰はある意味覚悟を決めなくてはいけなかつた。

「来たか」

部屋の真ん中にある椅子に腰掛けて腕を組んで待つっていたので、おそらく彼が刀藤鋼一郎氏だろう。

銀河の幹部の座を狙つて いるらしい……

「まあ、座れ」

さすがに灰もずっと立ち話をするのは嫌なので座らせてもらう。

「单刀直入に聞こう。三年後の王竜星武祭で綺凛は優勝できるか？」

本当にストレートに聞いてきたことで、少し驚く。もちろん、こういうことは想定はしていた。彼が聞いてくるとする事などある程度はもともと絞っていた。

「そうですね、三年後このまま僕が鍛えたとしても、優勝は無理でしょう」

そう、いくら綺麗の成長がはやいと言つても、王竜星武祭は本当に修羅の道だ。

鋼一郎氏は無言で理由を説明しろと言つてくる。

「彼女の成長スピードは本当にすごいと思つています。入学数週間で序列2位となつたのはさすがと言えます。しかし、王竜星武祭にはシリヴィア、オーフエリアと最強の魔女が出場するでしょう。僕には三年での二人を超えることは不可能だと思つています」

たしかに、綺麗はすごい。その成長ぶりは凄まじく、師匠である灰も誇らしい。

「それに、彼女には実戦経験が不足しています。星武祭での戦いは模擬戦では経験できないようなものばかりです。あの二人は歴戦の猛者、経験不足などすぐに見抜かれますよ」

別に二人に情報を流す気は無い。そもそも一人はそんなこと望まない。

「自分で言うのもなんですが、僕の抜刀術は誰も防ぐことのできない最強の剣です。彼女も三年後には半分以上使えることになるでしょう」

『鳴神流五連抜刀奥義』ならまだしも普通の抜刀術なら教えることもできるので、綺麗なら習得するだろう。

だが、灰の使う抜刀術はただの鳴神流抜刀術では無い。

「しかし……僕の抜刀術は超高精度な星辰量操作技術が必要となる体術を使用しているからこそ、防御不能にして不可視の剣となるのです。魔女ではない彼女がそれを使おうとしたら足が負荷に耐えられず碎け散ります」

鳴神流では技を完璧に習得してようやく二流、その技を自分にあつた形に改造出来て一流なのだ。

灰の使う体術、つまり七天大聖の体術は細胞一つ一つに適切な星辰量を注ぎ込むことで成立する。そんな事が出来るのは魔女や魔術師として星辰量操作技術を日々鍛えていない限り不可能だ。

「それに、その技に頼らなければ勝てないなどという不安定なものであるなら、王竜星武祭は優勝などできません」

たしかに、綺凛が鳴神流抜刀術を習得して、研鑽した場合、それはかなり脅威になるが、事前の予備モーションが大きいあの技を作り出せる為にだけ技を磨くのは絶対に違うからだ。

「彼女は遅かれ早かれ剣士として大成するでしょう。しかし、それを王竜星武祭優勝のためだけに歪めるのであれば僕は彼女の師匠役を降りますよ。あなたにもわかるでしょう。たとえ剣士ではなくても、刀藤家の人間なら」

彼女が剣士として大成するにはかなりの時間がかかる。それだけ彼女の才能は凄まじいのだ。

「やはり、お前もそう思うか。分かった。しかし、私は私なりのやり方で綺凛を王竜星武祭で優勝させる」

「中学一年ならば、まずは共に高め合う仲間を見つけさせてあげてください。まずはそこからです」

今の灰と綺凛の関係は絶対的な上下関係にある。

彼女に必要なのは師匠以外に好敵手と呼べるような存在がなければ一定以上には成長できない。

「つまり、お前は鳳凰星武祭、もしくは獅鷲星武祭の方がいいと言うのか？」

タッグ戦の鳳凰星武祭、チーム戦の獅鷲星武祭。たしかに、ここに出席するなら仲間は良き好敵手となるだろう。

「そうですね、彼女のためを思うならそちらの方がいいかも知れませんね」

「アスタリスク最強の星脈世代の貴重な意見として、頭に残しておこう」

話はそれで終わり、鋼一郎は部屋を出て行こうとする。

「あなたが思つて いる以上にアスタリスクは甘くは無いですよ」

「灰は出て行く鋼一郎の背中に声をかけた。

「私はお前以上の曲者などいないと思つて いる」

そして、今度こそ部屋から出て行つた。

「僕以上に曲者な人などたくさんいますよ」

その声は鋼一郎には届かない。

たしかに灰はアスタリスクでは曲者に含まれるかも知れない。星導館という学校の中で序列1位という座を守り抜くのは強いだけでは不可能だ。色々な策で灰を貶めようとする人間がたくさんいる。だが、それを見破れるからこそ、今も無敗伝説は続いている。

灰よりも曲者といえば、クローディアなど、各校の生徒会長がいい例だ。

（絶対、今日の夜フィーアに膝枕してもらつて頭を撫でてもらおう）
静かに決意していた。

鋼一郎との対談は思つた以上に神経を使つた。彼を刺激しないよう注意しながら、綺麗から手を引くようにしむけようとした為である。

その疲れからか少し対談した部屋で休んでから出てきた為、もう夕暮れ時で、空が赤く染まつっていた。

「はあー」

?????
誰かと溜息が重なる。ふと辺りを見渡してみると茂みの向こうに

ユリスが歩いていた。

「どうしたんだ？ ユリス」

「うん？ 灰か……」

なんだろう。ユリスが灰を見たときに心なしかもう一回溜息をついた気がする……

「ちよつと、いろいろありすぎて胃が痛いだけだ……」

詳しく聞いてみると綾斗の幼馴染らしい沙々宮がトレーニング

ルームの壁を破壊して、いつも以上に胃が痛くなつたらしい。

胃痛の原因は主に綾斗のアスタークスに対する無知さらしい。

「それは災難だつたな。そういうえば、コレあげるよ」

灰はポケットから薬の入つた瓶をユリスに投げ渡す。

「これは？」

「僕が特別に調合した胃薬。効果は他の胃薬より良いことを保証するよ」

灰は今日の対談で絶対に精神的に疲れ胃が痛くなると思い、昨日の夜に胃薬を調合したのだ。七天大聖からもらつた秘伝のレシピの為効き目は抜群だ。使う必要も無くなつたのでユリスにあげる。

「それは、ありがたい。ちょうど今使つてゐる胃薬が効かなくなつてきたのでな」

それはかなり重症だ。よっぽどユリスの胃袋は悲鳴をあげているらしい。

「それで、調子はどう？ 天霧とのトレーニング」

「まあまあといつたところだな。だいぶ基礎もできてきたところだ。そろそろお前にも相手を頼むかも知れない」

どうやらユリス達の訓練は順調で鳳凰星武祭に向けて着々と準備が整つてきてゐるらしい。

あとは灰に実戦と経験談からの助言を貰うだけらしい。

「順調そうなら良かつた。だが、ユリス。お前自身の体調管理はしつかりしろよ？」

「まあ、そろそろ胃が痛くなることは無いはずだ
ユリスの胃袋はあと少しの辛抱らしい。」

その会話で二人は別れ、各々の帰る場所へと行く。

灰は家に帰つたらオーフエリアに膝枕と頭を撫でてもらい、疲れを癒したこと。

初めての接触

ユリスに今日から綾斗とのトレーニングの相手をしてもらいたいと言わされたので、『冒頭の十二人』の専用トレーニングルームで待つことにした。序列1位のトレーニングルームは他と違い、広く、また設備も充実している。

まあ、灰は自分の家の地下のトレーニング場を使うことの方が多い。

あそこは灰が改良を加えており、灰がある程度暴れても壊れることなく、また星辰量の反応が外に漏れることも無い。

時刻は午後3時45分。ユリスとの待ち合わせ時間から15分が過ぎていた。

星導館学園の授業が終わるのは午後3時。そのため待ち合わせは午後3時半となっていた。

特に準備することの無い灰は3時10分にはトレーニングエリアに着いていた。ユリス達も20分には来るだろうと予想していたが、当ては外れたようだ。

「時間に厳しいユリスなら20分には来ると思つたんだけど、来ないってことは天霧あたりが何かやらかしたんだろうな」

何の連絡もなしにユリスが遅れるはずはなく、必ず何か理由があるはずだ。

「まあ、今日は綺凜との訓練は無いし、気長に待つてるか」

あとでユリスから綾斗の面白情報でも聞いてみるのも悪くなさそうだと、一人悪い笑みを浮かべている灰であった。

それから5分ほどして急に来訪者を告げるメッセージが来る。

『すまない灰！遅れた』

肩で息をしているユリスであつた。近くに綾斗の姿もあるのでどうからか引つ張ってきたのだろう。

灰が扉を開けるとすぐにユリスは綾斗を近くにあるベンチに寝かせる。

すると急に魔法陣が綾斗を縛り付けるかのように展開する。溢れ出ていた綾斗の星辰量が急激に減少する。

（これは……封印系統の魔術師か魔女の力。しかもかなり強力な力で封印されている……これほどのことができる星脈世代なんて聞いたことが無いぞ）

警備隊の幹部権限で閲覧できる情報には一通り目を通している灰であるが、そのような力を持つ実力者などアスタリスクにはいなはずだ。

ユリスが一通り綾斗の応急処置が出来たので声をかける。

「ユリス、どういうことか説明してもらえるか？」

「私にも詳しいことはわからん。だが、綾斗曰くお姉さんの禁獄の力らしい」

ユリスも詳しいことは分かつていないようだったが、灰にはそれで十分であつた。

封印系統の能力者は灰は知らないが、唯一の禁獄の能力をもつ人であるのなら灰は知っていた。

（禁獄の能力の所持者で天霧の性を持つ魔女、天霧遙。幹部権限でしか閲覧出来ない情報の一一番下にあつた機密事項。彼女は何かを知っているのかな……）

幹部権限で見れる情報は莫大であり、それ全てに目を通しているものは幹部十人で三人ほどだろう。必要な情報は検索をすれば簡単に出てくるのでわざわざ目を通すのはよっぽどの物好きだろう。

「その反応何か知っているな。頼む、綾斗に教えてやつてほしい。あいつは姉を探しにここに来たらしいんだ。だから……！」

「すまないが、こればっかりは教えられない。僕がこの情報を知っているのは星獵警備隊の幹部権限で閲覧できたんだ。たとえユリスであつても幹部権限領域の情報である以上は無理だ」

幹部権限領域の情報はアスタリスクの暗部の情報の詰め合わせであるため、簡単に外部に漏らしてはならない。それが幹部としての絶対の規律だ。

「そうか……いや、当たり前か。すまない、急ぎすぎたみたいだ」
ユリスは本当は是が非でも聞き出したいのであろうが、灰の意思を曲げることは出来ないことがわかつているのだろう。

「その代わり、今日はちゃんと訓練に付き合つてやるさ」

灰なりのユリスに対する罪滅ぼしであつた。灰だつて言えるものなら言いたいのだ。隠し事は性に合わない。

「綾斗が起きるまで、付き合つてもらうとするか」

それから30分ほどユリスとの訓練は続いた。ユリスの星辰量が尽きかけたので一旦止めることになった。

「相変わらず勝てるビジョンが全く思い浮かばないな、ほんと地面に座りこむユリスは力なくそう言つた。

「流石にまだまだ負けられないさ。だが、前よりは大分良くなつて よ。自分の能力を良く理解しているね」

「一步も動いていないお前に言われても些か説得力に欠けてるぞ」

実際灰は一步も動かず勝利している。飛んでくる魔法は全て灰の魔法で撃墜され、設置型の魔法も灰は叩き斬るため目くらまし程度にしか役に立たない。

ユリスは無敵の壁を相手にして いるように思つていた。

「私よりも魔法を速く、多く展開しているのにどうやつて勝てばいい のだ。星辰量の総量も圧倒的に負けているのに」

「ユリスには一撃必殺の様な物が無いからそななるんだよ。どんなに

時間をかけて構築したつていい、相手を必ず葬る技を身につけるのが先決だな。そればかりに頼るのは流石に無理があるが、切り札としては有効なはずだよ」

鋼一郎にも言つたが、一つの技に頼りすぎるのは自ら成長するのを拒んでいるのと同じことだ。

だが、その技を持つことには成長の妨げにはならない。切り札というものは使いすぎればただの技に成り下がる。

「まあ、それに関してはまた今度だな。彼が起きた様だし」

綾斗は自由の利かない体をなんとか起こす。おそらく禁獄の力の影響だろう。

「目が覚めた様だね。天霧」

「君はたしか、同じクラスの……」

綾斗に灰は初めて声を掛ける。そのため綾斗が灰の名前を知らなくて仕方が無い。

「僕は鳴神灰。灰でいいよ」

「ああ、よろしく。俺は天霧綾斗。俺も綾斗でいいよ」

「よろしくな、綾斗」

これが同じクラスなのに三ヶ月間なぜか話さなかつた二人の初めての会話となつた。

（それでもアスタリスクに関しての知識が無いのは本当みたいたね……）

灰の知名度は今ではシルヴィアと同じぐらい高い。それでも知らないということは余程無知なのだろう。

「それで、綾斗。ユリスから大体の事情は聞いたけど、なんで決闘なんでしたのさ。しかも、よりもよつて彼女と」

「彼女、強かつたけど一体誰なんだい？」

ユリスの胃袋が引いを上げているのは気のせいだろう。

灰はユリスの胃袋に手を合わせる。

「はあー、お前せめて自分の学園の『冒頭の十二人』ぐらい覚えておけ！」

「まあまあ、ユリス。そう怒るなつて。胃袋が小さくなるぞ」

ユリスを止めないと色々と大変なことになると思ったのですすがに止める。

あと、胃袋にもね。胃袋に罪は無い。

「彼女は刀藤綺凜。うちの序列2位だよ。二つ名は『疾風刃雷』たった三ヶ月だけど、刀一本でその座を守ってきた期待の中1つてところかな」

まあ、ざつくりと綾斗に説明する。詳細はまあ自分で調べろってことだな。

「へー、序列2位か……道理でみんなに強いんだね。でも、そしたら、もつと強い序列1位の人いるんでしょ?」

綾斗がその言葉を言つた時、ユリスの胃袋がなくなつたのを灰は感じ取つた。

「おまえ、まさかそこまで知らないのか!!」

「い、いや、クローディアからちよつとぐらいは。昨シーズン史上2人目のグランドスマムを達成した人つてことぐらいは聞いたよ」

綾斗はこれ以上ユリスを怒らせない様になんとか言い訳をする。

だがね、綾斗よ。もうユリスの胃袋はストレスで亡くなつてしまつたのだよ。

「はあ、もう怒りを通り越して呆れだな」

肩をガックリと落とし落ち込むユリス。

端末を操作しながらユリスは軽い説明をしてくれた。

「うちの序列1位はさつきお前が言つた通り、史上2人目のグランドスマムを達成した。今まで公式戦で負けなしのアスタリスク最強の星脈世代。それがこのわるだくみが成功した様な顔をしている男だ

！」

ネット上に上がっている灰の情報を綾斗に見せるユリス。

ユリスの手が肩にあるのだが、それが地味に痛い。

だが、それよりも耳が痛かつた。

何せ綾斗が叫ぶから……

実力の一端

綾斗があまりに叫ぶものだから耳がキンキンする。音で聞いたのだが、防音設備が整っているトレーニングルームの外にまで響き渡つていたらしい。

「さつきユリスが言つた通り、僕はこの学園の序列1位、二つ名は『刀雷の魔術王』かな」

「一応言つとくが灰は中学一年生の時からずつと序列1位の座を守り続けているのだぞ」

鳳凰星武祭後に序列1位となつた灰は約三年間その座を守り続けた。

「こいつは本領は魔術師なのだが、ほぼ刀一本だけで星武祭を制したことから規格外すぎるということで、二つ名も魔術師から魔術王と変わつたのだ。訓練の相手としては十分だろ？」

そう、本来の目的は綾斗の応急処置などではなく、訓練である。鳳凰星武祭三ヶ月前なので、そろそろちやんとした対人戦の訓練をしなければいけない。

もつとも、今日は出来そうにない。綾斗の星辰量がほとんど回復してないからだ。

「まあ、今日はいろいろあつたしとりあえず軽くやろうか」「え、でも二対一はいくらなんでも……」

一対一なら個人の実力が圧倒的に勝つている灰が勝つだろうが、二対一はそれほど単純ではないからだ。

「安心しろ綾斗。私達2人が逆立ちしても絶対に勝てないような相手だからな」

確かに灰はユリスと綾斗2人の相手でも絶対に負けないが、綾斗はまだ灰の実力を知らないので半信半疑といったところだ。

「まあ、とりあえずやって見ようよ。綾斗も取り敢えず僕の実力が分かつた方がいいでしょ?」

灰は笑つてそういった。だが、この笑みは綾斗とユリスに二つの違うイメージを与えた。

綾斗には灰が明るくて快活という人柄というイメージを与えたが、ユリスはこの灰の笑みが悪巧みをしているように思えた。

それから、三人は初期位置へと移動する。綾斗は前衛、ユリスは後衛としてペアとしての構成は悪くはない。灰は綾斗から10メートルほど離れて構える。星武祭でも初期位置の距離はおよそ10メートルなので練習にはその方がいいだろう。

綾斗は下段に。相手の実力が自分よりも上のため、まあ良い選択だろう。

灰はいつも通り右手で刀を持ち、脱力する。これが灰の基本的な構えだ。それを見た素人はやる気のないように思えるかもしれないが、綾斗は灰の構えを見てより警戒した。

（なるほど、特待転入生として来ただけはあるね。僕のこの構えを初見で見て侮らないことは相当の訓練を積んでるね。面白い）

灰のこの構え、自然体が完全に隙のないものだと分かるにはかなりの訓練を積まない限り不可能だ。

そして、灰は綺麗がまだ反応できない速度で綾斗に迫る。もちろん、七天大聖の体術は使わない。まあ、使つたとしても綾斗が使われたことを認識できればの話だが。

灰の全力は音速を超える。10メートルという距離なら一瞬で詰めることができる。

「どうしたの綾斗？僕は見ての通り隙だらけだよ？」

もちろん、これは嘘だ。綾斗がこの構えに隙がないことを知つてることを理解した上で言つている。

「何言つてるんだか。隙なんてどこにもないじゃないか。こんなの迂闊に攻められないよ」

綾斗の判断は正しい。相手の実力がどれほど上かわからない上に、この隙だらけに見える構えを取られているため、綾斗は攻めることができないのだ。

「来ないんだつたら、こつちから行くよ?」

綾斗は頷く。この時綾斗は慢心はしていなかつたが、こう思つていた。

『いくらアスタリスク最強と言われていても防御に徹したらどうにかなると』

そう、これは慢心などではない。灰の実力がどれだけ馬鹿げているか知らない人間にとつて分かるはずもないのだから。

綾斗はこの後すぐに『刀雷の魔術王』と言われている灰の実力の一端を理解する。一端だとしても、それは綾斗を遙かに凌ぐ。

「そんじやあ行くよ、頑張つてね」

その瞬間灰は綾斗の目の前から消え、綾斗は防御姿勢をとるがそれよりも先に灰は綾斗の間合いに侵入していた。

なんとか煌式武装で迎撃しようとするとも早すぎて間に合わなかつた。

灰は綾斗の煌式武装に攻撃する。速さ、重さ、その二つが規格外の灰の剣に対して、綾斗にはどうすることも出来ず、ボールのように吹き飛び、ユリスの後ろのトレーニングルームの壁に激突した。しかし、ここは『冒頭の十二人』のしかも序列1位のトレーニングルームだ。そう簡単には壊れはしない。

ユリスはもともと灰が綾斗に自分の実力を分かつてもらうために、ある程度、本気を出すと思つていたが、まさか本気の速度を出すとは思つてもいなかつた。

「分かつてもらえたかな、僕の実力の、一端、を」

その声が聞こえた2人は戦慄する。反応すらできなかつた今の斬撃がまだ強くなるということに。綾斗の場合、禁獄の封印を解除すれば渡り合えるかもしねれないが。

「今のが僕が素で出せる最高速度」「素でだと? どういう事だ」

灰のその言葉に反応したのはユリス。遠距離主体である彼女は近

距離のことについても多少は知っている。

近距離戦において、剣を振るという行為はただ振るだけではなく、体術というものを同時に用いる事でさらなる高みへ行く事が可能になる。

しかし、今の灰の言葉、『素で出せる最高速度』。つまり、体術を用いないで今的速度を出したという事。それが何を意味するかはユリスよりも啞然としている綾斗の方がより理解しているだろう。

「さ、僕の実力も大体わかつたかな？綾斗。これぐらいなら2人の相手を務められるかな？」

それから三人は時間になるまで訓練を続けた。

2人の連携は三ヶ月にしては上出来で、手加減しているとはいえ、かなりいい勝負が続いた。それでもなお灰が勝ち続けたのは経験の差であろう。

灰は二人に教える側なので、違和感やアドバイスなどを二人に教える事にした。

「まあ三ヶ月にしては上出来かな。ただね、二人は完璧を目指しそぎかな。何も言わないでも完璧に連携が取れるペアもいるよ。でも、それが必須という訳じやない。もう少し掛け声をかけな、連携が上手くいかない事があるのはそのせいだよ。それに、その所為で綾斗がユリスに遠慮しちゃっている感じがするし…………」

とまあ、途中から説教じみた事になっていたが、小一時間ほどそれは続いた。ユリスが完璧を求めすぎている所為であるのは明白だったため、それを止めるのに苦労した。

「ここはアスタリスクの再開発エリア、そこに二人の人影があつた。

「そろそろかな、オーフエリア嬢を我々から奪い去つた彼に報復するのは」

一人は特徴的な仮面を被りながら話をしている。

「私は反対だ。彼奴からは嫌な感じがする。認識阻害の結界が通用しない事すらありえる」

もう一人はフードを深くかぶっているため、声から女性という事しかわからぬ。

「その時はどうにかするさ。我々の計画を邪魔してくれた以上、放置するわけにもいかないからね」

「好きにしろ」

そう言うと二人はそれぞれ闇の中に消えていった。

暗躍するもの

綾斗とユリスの二人の訓練をし始めてから数日が過ぎた。

綺凛から昨日の夜にメールが届いた。なんでも、自分で一步を踏み出すために綾斗ともう一度決闘するらしい。師匠として弟子が成長するのはこの上なく嬉しい。しかし、今回の件については家の問題があり、刀藤家と縁戚関係にある鳴神家である灰は迂闊に手が出せなかつた。そのため、少し悔しさもあつた。

決闘の時間は午後三時半、場所は星導館内のスタジアムで開催するらしい。できれば見に来て欲しいと言っていたので、特に予定のない灰は見に行こうと思う。

綺凛が成長したという喜ばしい事により、灰の気分は朝から少しそかつた。もともと朝はそこまで得意ではない灰にしては珍しい事である。

「早く綾斗と綺凛の試合を見たいなー…………はあー、気分が台無しだ」

灰の気分の良さは一気に沈む事となつた。

学園に向かって歩いていく途中、いつも人通りが多いはずの道が誰もおらず、異様な雰囲気を醸し出していた。

（忌避の能力者か？これほど大規模な物を作り出すにはどれほどの星辰量を消費しているんだ……）

灰は自分の頭の中に忌避系統の能力者をリストアップするが、そもそもそのような力を持つ魔術師か魔女の存在を灰は知らない。

（外部勢力か、それとも純星煌式武装の力か、とりあえず目的は僕みたいだな）

誰もいないはずなのに感じる視線、それはつまり、目的が灰である事を告げていた。

「そろそろ出てきてくれないか、今は少し穏やかに対応できる気分じゃないんでね」

軽く殺氣を周囲にばらまいて未知の敵を牽制する。

「そう早まるな、我はお前に話をしに来ただけだ」

路地裏からフードを被つている者出てくる。

声からして女性という事だけが分かる。だが、より一層灰は警戒を強めた。

(この足運びに気配の消し方、ただ者じゃない……)

忌避の能力が何かによつて、近くは誰もいないがその場合、そこに存在する事で気配はより分かりやすくなる。しかし、この女は出てくるまでは完全に灰の気配探知から逃れていた。

「今日の放課後、再開発エリアのここに来い。そこでお前と話したいという者がいる」

女から地図が送られてくる。そこはかつてサイラスがユリスを襲撃した場所であつた。

「わざわざ来る必要もないと思うが?」

そう、これは一方的な要求、灰は無視する事もできる。

「対価を欲するか。やはり人間は強欲だな」

この女は驚くべき事を言つた。まるで自分が人間ではないかの様に悪態をついたのだ。

「彼奴から、もしお前が対価を求めた時のことも事前に聞いている。彼奴はお前の要求を一つ聞くと、そう言つていた」

相手方はかなり大胆な事をする様だ。灰は星獵警備隊の幹部であり、このアスタリスクの暗部の情報もかなり知つていて。つまり、どんな事を要求するかはわからないのだ。相手はバックにどんな人間がいるかわからない状況、灰がどれほどまで思考を巡らせるかなど想像できるわけがない。

「いいだろう。ただし、その条件が破られた場合、命はないと思え。僕は他の学生とは違う」

灰はこの言葉にかなりの殺氣を込めて相手を威嚇する。アスタリスクの学生は人の命を奪つた事などない者がほとんどであり、普通はハッタリに聞こえるだろう。しかし、灰はアスタリスク最強の人間、そして、その身から発せられる殺氣は人を殺した事があるという事を

物語つっていた。

「我は知らん。我はただの伝達役、深く介入するつもりなどない」

それだけ言うと女は再び気配を消して姿をくらませた。

(この時期に接触するとしたら『ノアの箱船』か、もしくはオーフエリアが関わっていた、あの計画、の関係者か?)

先ほどの女が力を解除したのかわからないが、遠くの方から人が数人やつてくるのが見えるので、灰は星導館に向かつて小走りで向かつた。

(とりあえず行くだけ行くか……)

そして、時間は止まる事なく過ぎていきすぐに放課後になつた。

「灰、綾斗と刀藤の試合見に行くだろ?」

後ろの席のユリスがそう聞いてくる。綾斗、綺凛の両名と交流関係がある灰ならば必ず見に行くと思つたから。

「すまんユリス。行きたいのは山々なんだけど、同室も外せない用事があるあら。一人によろしく言つといて。それじゃ!!」

「お、おい!待て!」

これ以上ユリスに捕まると根掘り葉掘り聞かれるかもしれないの

で、素早く退散した。

生徒会、星獵警備隊と二つの組織に所属している灰は、色々と忙しいという認識はユリスもしている。

さすがに今回の事はみんなに教えるわけにもいかない。

学校にいる間、星獵警備隊の管理している情報を再確認していたが、今朝の件で推測出る事などほとんどなかつたが、一つだけ気がかりになつてゐる事が発生した。

三ヶ月前にユリスがサイラスに襲われた廃墟に灰は到着する。

建物の入り口あたりから中に侵入すると、急に空氣が変わる。

(なるほど、前回は広範囲で忌避の能力を使つていたから感じなかつ

たが今回は範囲を狭めたからより濃密になつてゐるつて訳か）

入り口のあたりに結界のようなものがある事を灰は認識していた。

（取り敢えずユリス達が襲われた階層まで登るか………）

確信はなかつたが、相手がここを指定してきた以上、ある程度灰に推測できる場所にするだろう。そんなところ、ここでは一つしかない。10階、ユリス達が襲われたところだ。

案の定ともいうべきか、10階に到達すると朝に遭遇したフードを被つた女と、奇妙な仮面を着けた男がいた。

「来てくれてよかつたよ。鳴神灰くん」

奇妙な仮面を着けた男、顔が思い出せそうなのだが、思い出す事ができないでいた。

（認識阻害の結界も張つているということか。いよいよ面倒くさくなつていた）

忌避に認識阻害、その二つを操れるのは純星煌式武装である、あいつしかあり得ないからだ。

「やめておいたほうがいいよ。ここは彼女の結界の中だ。私の事は認識できない。まあ、この仮面はスタイルの問題だとしてくれ」

「なるほど、元の人間が誰だか知りませんが、『処刑刀』という事ですか」

この奇妙な仮面を着けた男、『蝕武祭』の専任闘技者として名の知れた男であつた。

「君とは随分前から話したいと思つてね、付き合つてもらえるかな？」

その言葉を灰は拒否する事ができそうになかつた。

処刑刀

処刑刀から発せられる圧倒的なオーラ。各校の序列1位（もちろん、灰は除く。レベルが違うからだ。）レベルの圧力を感じた。「一つ最初に聞きたい。もし僕が貴方の対話に応じた場合の対価、それはちゃんとわかっていますよね」

朝、フードの女が言つた事が本当であるならば、この男が自分の聞きたい事を聞いたら、灰のある程度の望みを叶えるという破格の条件であった。もし、これが守られないのであれば、灰は今すぐにでも尻尾を巻いて逃げるつもりだ。

「ああ、彼女から聞いているよ。それで構わないよ」

「それだけ守ってくれるのであれば構わない」

相手がまだ守るかはわからないが、それでも尻尾を巻いて逃げるほどではないのは確からしい。

「率直に聞こう。オーフエリア嬢から手を引いて、我々の元へ返したまえ」

この言葉を聞いて灰は殺氣を解放しなかつた自分を心の中で褒めていた。

オーフエリアを物のように扱うこの男に怒りを覚えるのは、当たり前と言えた。

（僕たちの関係を知つた上での挑発、面白い事をやつてくれるじゃないか）

「そんな事を聞いて何になるんですか？ はいそうですかと言うわけないでしよう」

おかしいのだ、わざわざ朝接触してきてまでにしては聞く内容が杜撰すぎるのだ。

「やはり、そう答えるか。彼女を変えたという君の意思、変えられるわけがないか…………いいだろう。次に行く前に君の聞きたい事を聞いてあげよう」

一つ目の質問に対しても返答について深くは追求せず、自分の質問は終わり、次は灰の聞きたい事に答えるらしい。

朝に急に言わされてから、そこまで時間もなく、ちゃんとした聞きた
い事など考えられなかつた。

だが、さつきの質問で一つだけ思い付いたのだ。

「処刑刀。貴方は僕の敵か？それとも味方か？もしくは中立か？」

この問い合わせの答えはほぼ決まつたようなものであるが、一応聞く。

「敵か、味方か、中立か、なるほどね。君がおとなしくオーフエリア嬢
を渡してくれたのであれば味方だつたかもしだれないが、渡してくれな
いのであれば、敵だ」

処刑刀は灰の予想した通りの回答をした。

そして、腰のホルダーから発動体を取り出す。

「なるほど、最初から僕と戦うつもりだつたんですね」

処刑刀、使用する武器は4色の魔剣の一振り、『赤露の魔剣』

それを起動し片手で軽々と扱う戦闘スタイル。だが、本当の戦闘ス
タイルは両手持ちである。

大きさ故に、両手の方が安定する。

「もちろんども。あのオーフエリア嬢の気持ちを変えた君の答えなど、決まつて
いるからね。さあ、武器を構えたまえ」

灰は鞘から『雲霄』引き抜き、自然体で構える。油断などできない、
いつも増して真剣な表情をしていた。

おそらくだが、処刑刀は『雲霄』がウルム＝マナダイトで構成され
ている事を知つてゐるはずだ。言動からして間違ひないだろう。

「ふつ、私を楽しませててくれたまえ。鳴神灰君!!」

先ほどまでの両者の距離は15メートル。それを処刑刀は一步で
詰めて灰に斬りかかる。

突き、なぎ払い、切り下げる、突き上げ、切り上げ、フェイントを混
ぜてからの袈裟斬り、その全てが鋭く、卓越した技術がある事を示し
ていた。

（体格でも負けてゐるし、それに『赤露の魔剣』をうまい具合に支配し
てる。流石だな……）

それでも灰は負けない。灰の最高速度の8割、これが処刑刀と灰の

速度であつた。両者一進一退と言うのはこれを示すかのように戦闘は苛烈であつた。

灰が上手く刀の上で魔剣を滑らせて、カウンターを取る！

その速度は常人では絶対に反応できない領域の速度であつたのに、処刑刀はギリギリといえども反応して見せた。

「素晴らしい。まさかここまで追い詰められるとは思つてもなかつたよ。手を抜くのはやめだ。本気で行かせてもらうよ」

両手で赤露の魔剣をしつかりと持ち、威圧感も先程までどちらがい確實に増大している。

「なら、僕も一段階上げさせてもらいますか」

灰は刀を両手では握らない。鳴神流では両手が基本なのだが、抜刀術が得意な灰は片手の方が自分に合っているため、片手で持つている。しかし、処刑刀が魔剣を両手で振る以上、先ほどよりも重く鋭くなっているに違いない。

そのため灰は七天大聖の体術を使う。

星辰量の操作を少しでも間違えれば細胞が死滅する諸刃の剣であるが、灰にその方が一はない。

その程度のミスをしないために、灰は七天大聖の体術を体に定着させ、呼吸と同じように出来るようになつた。

処刑刀は上から魔剣を振り下ろす。先ほどよりも早く、そして重い。それを灰は片手で持つて『雲霧』で受け止めた。

そこから鍔迫り合いに移行する。ただの力のぶつかり合いではなく、両者の駆け引きがここで行われている。相手の力の入れ具合、呼吸と様々なものを同時に把握する必要がある。

この時灰は力負けした振りをして、体勢を崩したかのように見えたが、灰自身によつて隠されていた左手には超高密度の雷が纏われており、気づいた時には処刑刀の鳩尾に深く食い込んでいた。

「くはっつ…………」

処刑刀はたまらず苦悶の声を上げる。雷を纏つた拳は内臓にダメ

メージを与えることに成功した。

だが、致命傷には至らない。それにそのダメージも一時的なものになる。

「君の剣技に隠されてしまっているが、君は魔術師であつたね。こんな初步的なミスをすることはなんとも情けない」

その剣技に目が行きがちであるが、本人は魔術師が本領だと言つてゐる。もちろん、それが事実かなんて誰もわからない。灰の剣技が支配する間合いを誰も破れなかつたからだ。唯一破れたのはオーフェリアだけである。

左腕に雷を纏い、処刑刀を待ち構える。

超高密度の雷は磁場を歪め、灰を中心に引力が微弱ながらに発生していた。

これが刀雷の魔術王といわれる灰の戦闘スタイルだ。

「さあ、死闘の開始だ」

灰は先ほど一段階上げると言つたが、どうやらそのようなことを言つている場合ではなく、二段階引き上げることになつたのは処刑刀には気づかれていない。

七天大聖の体術は適材適所の部位の身体能力をあげるため、処刑刀は灰が魔法を使つたことに気を取られ、本来発生するはずもない鍔迫り合いのことを完全に忘れてしまつていた。

本気

処刑刀と灰の攻防は徐々にだが灰に傾いていった。なぜなら、最初は部分でしか七天大聖の体術を使えなかつたが徐々にだが体が慣れてくれる、よりスマーズを使うことができるため、今ではほぼ全身に使つていた。

いくら呼吸するかのように使えるとはい、普段使わないものを瞬時に最高の状態に持つていくことはできない。

特に、脳を活性化させる『蒼界』は最も難しい。腕を強化する『翠界』、脚を強化する『朱界』、肺などの内臓部位を強化する『白界』の三つはまだ難易度は低い。

『蒼界』、『翠界』、『朱界』、『白界』の4つを同時に発動させる、四界で灰は本領を発揮する。ここに『瞬閃』を同時に加えることは未だ灰はできない。全く違う星辰量の操作技術を必要とするためである。

だが、四界と呼ばれるこれを使ったが故に処刑刀は対応が出来なくなってきたのだ

灰に魔剣を大きく弾かれ、がら空きとなつた胴を一閃する。しかし、もともとカウンターを予想していた処刑刀は弾かれる勢いを利用してバックステップを踏み、大きく距離を取つていた。そのため、灰は大きな隙を作つてしまい、ずっと静観していたフードの女が攻撃する隙を作つてしまつた。黒いハルバートによるスイングは急いで刀を引き戻した灰を吹き飛ばした。

だが、この女の介入は処刑刀にも予想外だつたらしい。

「彼の相手は私一人でやる。君の助けは必要ない」

「ふん、肩で息をしているお前に対し、あいつは余裕な表情だぞ？ まだ強気でいるつもりか」

「悔しいが、そのようだな」

「二対一にこれからは移行するらしい。

「すまないね、これは正当な戦いではないからね。悪く思わないでくれ」

「そつちがその気であるのなら、僕もそれ相応の対応をさせてもらい

ますよ」

この二人は見誤っていたのだ。今までの灰が全力であると。処刑刀の少し上の実力であると思つてしまつたのだ。

灰は七天大聖の四界を解き、『瞬閃』を使う。殺戮のための剣技を使用した灰は殺意の顕現させる。

四界はどちらかというと一対一向きである。全てを活性化させているとはいえ、その中でも星辰量の大小をつけなければ体がパンクする。

それに対し初速で限りなく最高スピードに達するこの剣技は、相手に認識されることなく相手を斬り伏せる。

四界を使用した時は溜めや淀みが生じてしまい、どうしても初速が遅くなり、加速を生んでしまう。それでもどうしても相手によつては認識されてしまう。それすら許さないのが、この瞬閃である。認識されないが故に一対一よりも多数を相手するときにこれは有効である。

「私は認識阻害に力を割いている以上お前のサポート程度しか出来ん」

「それで充分だ」

「気をつける、奴の放つ殺気が変化している」

フードの女はやはり、認識阻害を使っていたらしい。阻害系統には忌避も含まれる。

だが、認識阻害に力を割くのはやめないらしい。灰はそもそも相手の事など眼中になかつたが、そんなことは知る由もない。

灰は自分から解き放たれている殺気を制御する。莫大な殺気が暴れていると灰自身のものであつても邪魔になるのだ。

だが、殺氣をコントロールすることは普通はできない。殺気というものは自然と発せられるものであるからだ。

「お前…………何人殺したことがある…………？」

フードの女はそんなことを聞いてきた。何の脈略もなく、だ。

「お前のその殺気、人を一人や二人殺した程度では出せるはずもない、濃密な死の気配がする。本当に学生か？……」

殺気というものは死を吸収し、より濃密となり相手を恐怖で支配する。灰の殺気は女が今までに感じたことのないほど濃密であつただ。

「どうでしようね。一人も殺してないかもしないし、あるいは大量殺人鬼かもしだせんね」

わざわざ答えるはズもなく、はぐらかす。それに、こうやって話すのも飽きてきたのでそろそろ終わらせることにする。

「せいぜい生き延びてくださいね」

その言葉と同時に灰は『瞬閃』を発動する。

一瞬で処刑刀の目の前に現れ、先ほどと同じ鳩尾に左の拳をめり込ませる。先ほどよりもより高密度の雷は一瞬で処刑刀の全身を駆け巡り、身体を麻痺させる。魔剣を中段と下段の間に構えていたため、『雲霧』では簡単には有効打が決められない。そのため左手を使うことにした。

処刑刀は声すらあげれずに、全身を激痛に支配された。

それでもなお膝をつかないのはこの男のプライドだろう。

「ちつ……！」

一瞬で移動した灰の姿を見失った女が、処刑刀に攻撃する時に姿を認識したため、黒いハルバートを灰に向かつて振り下ろす。

だが、そのようなことは灰は読んでおり、すでに『瞬閃』を使われた後であった。地面を深くえぐつたハルバートをすぐに自分を守るために引き戻し、警戒するもどうやら灰は処刑刀を狙っていることに気づく。しかし、気づいたところで何もできない。

その圧倒的な速度に、この二人はついていけないのだ。

「くつ、なんなんだ！こいつのデータラメな速度は！」

灰色と金色の閃光が一人の周囲を縦横無尽に行き交っている。周りから不規則に降り注ぐ雷、死角から突然襲いかかってくる音速を超えた斬撃、ギリギリ反応ができるが故に余計に神経をすり減らしていた。

二人は灰の先ほどの攻撃の後に背中合わせで死角を値切る限りなくしていた。だからこそ、今までの灰の攻撃を凌げていた。そうでなければ、灰の攻撃をしのげるはずがないのだ。

「はあ、はあ、君を侮りすぎたようだね。やはり、君は我々の最大の敵だね」

所々から血を流し、肩で息をしている二人は灰が生み出した数百の雷の槍に頭上を包囲されており、もはや逃げることは出来ない。灰が『瞬閃』を使って一、二分で二人は簡単に追い詰められた。

「なら、そろそろ全力で逃げに転じようかね」

「できると思っているのか？」

灰は二人を逃すつもりもなく、警備隊の本部に連行する予定である。

「それは、やつてみないとわからないさ!!」

すると女から黒い霧のようなものが高速で灰に向かってくる。灰だけではなく、少し上に展開していた数百の雷の槍にも襲いかかってきた。

突然のことで対処が遅れる灰。まさか自分だけではなく頭上の雷にも同時に襲いかかってくるとは思わなかつたので一瞬動搖してしまい、対処が遅れてしまい、逃げるには十分な隙を与えてしまつた。霧が晴れるとそこに二人の姿はなく、荒々しい戦闘の後だけが残つていた。

所々に飛び散った血痕は太陽によつてより赤くなつていた。

「隊長に聞かなきやいけないことが増えたな……」

報告

「最後の最後で詰めが甘い、師匠達にもよく言われたな。だが、まあ、収穫はあつたし、今日はこれぐらいでいいか」

収穫がなかつた時の場合については誰も知らないが、知つたら絶望するだろうという事だけは言つておこう。

（あの女、魔女かと思つたら純星煌式武装の使い手か？いや、それにしてもそれっぽいものが無かつたしどういう事だ？隊長に相談してみるか、それにフィーラにも）

灰はヘルガに相談したい事があると連絡し、オーフエリアには聞きたい事があると連絡した。

二人からはすぐに返事が返つて來た。ヘルガは今は本部にいるらしく来てくれれば良いと。オーフエリアは家にいるからいつでも良いとのこと。

とりあえず、灰はヘルガの待つ警備隊本部に行く事にした。

ちょうど巡回警備中のため本部に人はほとんどいなかつた。話に機密事項が含まれているため好都合であつた。

「すいません。急に呼び出してしまつて」

「ちようど暇していたところだ。気にするな」

ヘルガはそう言つて奥にある隊長室に案内してくれた。

（隊長つて仕事の時はすごい怖いイメージあるけど、オフの時は普通に良い人なんだよな……）

ヘルガは一部では融通の利かない鬼だとか、言われているらしいが、それは人員の足りない警備隊の現状を加味すると仕方のない事だろう。今まで灰が入隊してから歓楽街の仕事も減つた。

灰は歓楽街で暴れている馬鹿を片つ端から叩きのめした。不良達は、ヘルガはすでに王竜星武祭を二連覇してから月日が流れ、すでにその実力も衰えたと勝手に思い込んでいるが、灰は現役で尚且つ、その圧倒的な力でグランドスマッシュを達成した事は記憶に新しく、同時に反抗する学生は容赦なく気絶させることから恐れている。そのため、

歓楽街は大分落ち着いている。もちろん、マファイアも灰の言いなりなものもある。

だが、どこにいっても頭の悪い人間はいる。そのため、少なからず仕事はあるが、前に比べてかなり減っている。

「隊長。処刑刀について教えてくれませんか？」

灰が処刑刀について言つた時、一瞬だけヘルガが目を細めたのを灰は見逃さなかつた。つまり、それだけ危険で重要人物だという事だろう。

「もう少し詳しく説明してもらえないか？私も奴の情報は一つでも欲しい」

「わかりました」

灰は朝に会つたフードの女、そして、先ほどの戦闘について詳しく説明した。

「ありがとう。まさか、奴等二人を相手にしてほぼ無傷で生還するとは、流石たね」

ヘルガは優しく笑つた。この人は灰の裏事情を知つていたとしても悪用はせず、親身になつてくれるので、今回の事も心から心配してくれたのだろう。たとえ、灰が最強の星脈世代でもだ。

「君が言つているフードを被つた女はおそらく、『ヴァルダ＝ヴァオス』。精神干渉能力を持つ純星煌式武装だ。その中に認識阻害や忌避の能力もある」

『ヴァルダ＝ヴァオス』、警備隊の情報システムにもその名は記されていたが、破壊されているとの事だつたので完全に盲点であった。

「処刑刀については私の見解が多く混ざつていてるから、詳しくは話せない。君の権限で閲覧できる情報の中にあるものが全てで、もう少し待つて欲しい。だが、少しだけなら話す事もできる」

ヘルガは処刑刀について、情報元となつてゐる事柄を説明してくれた。それだけでかなりの数があるが、一つ一つから採取できる情報が少なく、なんとか情報をまとめているのが否めなかつた。

「…………これぐらいだな」

「わかりました。…………隊長、ファイアを狙っている以上、僕も協力させては貰えませんか？」

彼女を狙う存在を野放しにするほど愚か者ではない。必ず捕まる、そう灰は心に誓つた。

「私としてもありがたい。だが、情報が少なすぎる上に認識阻害や忌避の能力を使われている以上簡単には見つからない。それに、今日君に接触してかなり痛い目を見た事だし、機会は当分ないと思う。すまないね」

「いや、突然の事だつたので、大丈夫です。また何かあれば連絡します。長居するわけにもいかないので僕はこれで」

「そうだね、時間も時間だ。学生は体を休めたまえ」

灰がこのアスタークスでの生活をスムーズに送っている要因の一つにヘルガの気遣いが大きい事は、本人がよく理解している。

灰の仕事も大分気を使つて減らしてくれている。ヘルガには感謝しかなかつた。

おそらく、ここから家に帰るまでにも時間はかかるため、家に着くのは7時ぐらいになるだろう。

灰は家に帰るまでの間に綺麗からきているメッセージを返信した。

内容は今日の決闘について、負けてしまつたが、自分として新しい一步を踏み出せた事を実感しているとの事。

また鋼一郎は失脚してしまつたらしい。おそらく、クローディアが手を回したのだろう。母親を最高幹部に持つてゐる彼女しかできない。

そして、一番最後に紗夜と一緒に星武祭に出る事になつたらしい。そのための訓練をつけて欲しいとのこと。もちろん、了承する。

綾斗とユリスの訓練もあるが、綺麗と紗夜は基礎訓練から始めるといけないので、少し荒削りになるが要所だけを抑える訓練をしよう

と思う。あとは実戦で成長してくれる事を祈るのみ。

その旨を綺麗にメツセージで伝える。

(なんか、万有天羅みたいな事をしてるのは気のせいだろうか……)

なぜ、このような事を思ったかというと、ネットの記事に『四代目万有天羅になるのは誰だ!』というようなタイトルで書かれていたので少し覗いてみたところ、灰の名前が一番上に上がっていたのを少しうきずつているのである。

実際に灰の教え方はわかりやすく、教えを受けている綺麗はものすごいスピードで成長している。綾斗に負けはしたものの純粋な剣技ではまだまだ綺麗の方が上だ。

「ただいまー」

『おかえりなさい』

上からオーフエリアの声が聞こえる。いつもは料理の途中でも降りてくるのだが、今回は降りてこないという事は、手が離せない状況なのだろう。

二階に上がり、キッチンをのぞいてみるとオーフエリアが炒飯を作っていた。タイミングが大事な炒飯なら手は離せないだろう。制服を脱ぎ、私服に着替えてからオーフエリアの横に立ち、他の料理の手伝いをする。もちろん、息はピッタリ。

作るものさえ分かつていれば何も言わなくても、欲しいものを欲しいタイミングで渡す事ができる。

最近はメインをオーフエリアか、シルヴィに作つてもらう事は前と同じだが、サラダなどの小物は灰が作る事になつていて。さすがに全部任せるのは段々と気が引けてきたからだ。

食事を済ましてお風呂が沸くまでの間、今日の事をオーフエリアに話す事にした。

寝る前にこの話は空気が重くなる。

「それで、話つて？」

「こてん、と肩に頭を乗せてくる。綺麗な白髪が首にあたり、少しだけくすぐつたが、今ではその感覚も気持ちいものだ。

「処刑刀つて知つてるか？」

「ええ、でも、私は何も知らないの。彼が誰で、何を目的としているか。あの頃の私はただ利用されているだけの存在だつたから」

オーフエリアは申し訳なそうに言う。余り表情を表に出さない彼女だが、灰はなんとなく、落ち込んでいるかのように思えた。

これもずっと二人で暮らしているからこそ、分かった事である。「なるほど……いや、気にするな。もともとそう簡単に尻尾をつかましてくれるとは思つてなかつたし」

「……そう、なら良いのだけど」

慰めるためにも、灰は頭を乗せているオーフエリアに を軽く抱き寄せて、頭を優しく撫でる。

無言なのは、そのような無粋なものはいらないという事だろう。

二章の人物紹介、用語解説

刀藤綺凜

所属学園：星導館学園

序列：序列外→2位→序列外

二つ名：疾風刃雷

星導館の序列2位に決闘を挑まれ返り討ちにしてその座に着いた。その後三ヶ月間、刀一本でその座を守り続けた。

灰に修行はつけてもらつており、その成長は著しい。すでに近距離戦では星導館においては彼女に勝てるものは師匠である灰以外ない。

しかし、修行以外のことは全て叔父である刀藤鋼一郎の言いなりであつた。灰はそのことを知つてはいたが家庭内の事情に首を突つ込むつもりはなく、度が過ぎない限り、干渉するつもりはなく、綺凜が自らの意思で歩み始めるのを待つていた。

綾斗と知り合い、自分で進むことを決意し、綾斗に決闘を挑み破れるが本人は気にしていない。

灰との師弟関係も続いているため綺凜自身に支障はない。

灰との修練で鳴神流抜刀術を習得するが、未だ灰の速度には遠く及ばない。それも抜刀術全てを習得しているわけではない。

それでも、かなりの脅威となることに変わりはない。

綺凜にとつて灰は兄のような存在であり、灰にとつて綺凜は妹のようないす在である。綺凜に実の兄はおらず、初めての兄の様な存在で灰のことを慕つている。

ユリス・アレクシア・フォン・リースフェルト

所属学園：星導館学園

序列：5位

二つ名：華焰の魔女

王族という偏見から媚び詔うクラスメイトとは関わりを持とうしなかつた。

序列戦や決闘において序列を上げ、転入して早々に序列5位の座に着いた。しかし、自分の力を過信したユリスは灰に決闘を挑みすぐには敗北してしまう。その後、手を抜いていることに怒りを覚えたユリスは灰に直談判してもう一度決闘をする。その時に灰との実力差を痛感する。

灰はその時にユリスにこう言つた。

『友達の一人や二人作れないようじや僕には勝てないよ』と。

この意味を理解するのにユリスは少しかかったが、自分よりも強く偏見を持つていらない灰と友達となる。

灰という仲間を得たことにより自分に不足していたものを実感する。

この時、矢吹がユリスと灰が付き合つてているという記事を書いたので、矢吹は灰によつて楽しい時間を過ごせたとのこと。

(トーニングルームに連行されて反省するまで魔法を何発も打ち込んだとか、しないとか)

今では綾斗というパートナーが出来て鳳凰星武祭の優勝を目指す。

天霧綾斗

所属学園：星導館学園

序列：二位

二つ名：叢雲

星導館に特待転入生として入学するが、アスタリスクに関する情報を探しておらず、灰がグランドスマッシュを達成した最強の星脈世代であることを知らなかつた。

ユリスとタッグを組み鳳凰星武祭優勝を目指すため、灰に訓練をつけてもらつてゐる。初めての灰との訓練の時に灰の実力を知る。未だに黒炉の魔剣を使っても灰に触れることすらできていない。

処刑刀

蝕武祭の専任闘技者。体格を生かした剣技で他者を圧倒する。赤露の魔剣を使つており、その卓越した剣技は各校の序列一位を複数人相手することすら可能にするが、灰に手も脚も出ず敗北する。

オーフエリアを渡すように灰に要求するが、逆にそれが灰に怒りを買つてしまい警戒を強めてしまう。

灰の影響力は計り知れず、計画がもう少し完成に近づくまでの間は灰に接触することを諦める。

背後には『ノアの方舟』がいるが、灰はまだ知らない。

『鳴神流抜刀術』

鳴神流と刀藤流の開祖は兄弟であり、その根幹にある技術は似ている。

灰が七天大聖との修行によつて会得した体術により本来よりも格段に速い攻撃を繰り出すことが可能になつた。

そのため、防御不可能な、不可視の剣となつた。

10の型があり、一つ一つがしつかり特性を持つている。

『炎華』『犀撃』『銀雷』『鳳凰』『追律』『霸災』『燎乱』『烈日』『龍破』

『刃心』

『鳴神流五連抜刀奥義』

相手を必ず葬る技。五回にわたる連續的な抜刀術により、敵は抵抗すらままならない。

『一撃・刹鬼』

『二撃・雄雲』

『三撃・烈魂』

『四撃・時断』

『終撃・比翼』

『七天大聖』

数百万年前から存在している七人の武人の集団の総称。

七人は異なる二つ名を持つており、次代に継承していく。それは二つ名だけではなく名前もあつた。

弟子をとつた七天大聖はその弟子がこの座を継ぐ意志があり、七天大聖側もその弟子に譲る意志があるのなら、名前と二つ名が継承される。

第1席：『光輝』フレイヤ

第2席：『調和』レギンレイヴ

第3席：『予知』スクルド

第4席：『真理』セージ

第5席：『狂乱』トウルード

第6席：『捕食』フェンリル

第7席：『使命』ジエラード

以上7名によつて構成されている。

七人が開発した技術と、個人が開発した技術の二種類のうち灰はほぼ全てを受け継いでいる。

ここでは七人が共同で開発した技術について記そう。

『四界』

『朱界』『蒼界』『翠界』『白界』の四つからなる。

腕を強化する『朱界』。脚を強化する『蒼界』。内臓を強化する『翠界』。脳を強化する『白界』。

この中で飛び抜けて『白界』が難しい。

これを同時に発動させ身体能力を格段に上昇させることができる。

『四界』はただの身体能力強化ではなく、細胞一つ一つにちょうど良い星辰量を注ぎ込むという魔術師や魔女の星辰量操作技術を持つても維持するのが精一杯であるという代物なのだ。

これを戦闘中に用いることができて、初めて使いこなしていると言えるだろう。

失敗すれば細胞が死滅する危険な技であるが、灰は長年使い続け呼吸するかのように使えるために、絶対に失敗しない。

『烈界』

相手だけではなく、空気も切り裂き、一時的な真空状態とする。

これに触れたものは防御できずに傷を負う。

これは四界を使用する前提の技であり、世界中で使える人間は十人ほどしかいない。

鳳凰星武祭

最終調整に向けて

鳳凰星武祭まであとに一週間と目前まで迫りくると同時に、夏の暑さが最高潮に達しようとしていた。

すでに鳳凰星武祭目前ということもあり、出場する生徒は授業が午前中だけで午後からは訓練に時間を使うことができる。

そのため、今日から一週間、灰は綾斗、ユリス、綺凜、紗夜の四人の訓練の相手をすることになる。

そんな一週間の始まりの日の昼休みを灰は彼女であるシルヴィアと通話しながら過ごしていた。

四人との約束は一時半であり、昼ご飯をすでに終えている灰は約1時間ほど時間に余裕があるためである。

『そつかー、一週間ずっと訓練だなんて大変だね』

灰は人目につかない場所として星導館の屋上を好んで使っていた。ここは特に中の階段から行き来ができないため、人が来ることなんてまず無い。シルヴィアと通話するならこれ以上の場所は無いだろう。え？どうやつて灰がここまで登ってきたかって？そんなもの『刀雷の魔術王』だからに決まってるじや無いか。

……冗談はさておき、普通に一個下の階の部屋の窓から飛んできただけさ。

「まあ、ずっと家でダラダラするのも性に合わないし、ちょうどいい運動つて感じかな」

本当は顔を見て話したいが、シルヴィアは灰との関係がバレたらめんどくさいことになるし、灰も急に誰かが来たら言い訳するのが大変なので、ヘッドホンを使って通話はしている。

『ははは、序列二位と五位のペアと元序列二位のペアがいるのちよう

どいい運動になつちやうんだ』

通話越しでもシルヴィアが呆れているのが声音で伝わつてくる。
「まあ、もう星武祭には出れないけど、序列一位を守るために頑張つて
ますからね」

『君に挑もうとする勇敢な人が可哀想に思えてくるよ……』

今のは灰は王竜星武祭で優勝した時よりもさらに強くなつており、序
列外からの挑戦を変わらず跳ね返している。

この結果に誰もが灰の実力の衰えを感じることはなかつた。

「そんなことより、中国ライブはどう?」

そろそろこの話題も尽きそうなので一旦話題を変える。

『独特な雰囲気があつて、いいよ!!チャイナドレス?っていうの買つ
たから期待しててね!』

「了解、楽しみにしておくよ」
シルヴィアのチャイナドレス……想像しただけで凄いことにな
りそうだ。

おそらく自分の分だけではなくしつかりとオーフエリアの分も
買つてくるだろう。

二人のチャイナドレス、脳内に永久保存確定だろう。

『でも、見た感じ凄い恥ずかしいんだよね……』

足がかなり露出するため、慣れてないとすぐ恥ずかしいものにな
るだろう。

『まあ、でも、いつも紳士な灰君を、テレビにさせられるかもしれない
し、頑張るね!』

いつも紳士かと言われば、否定はできないぐらいには灰は紳士で
はある。

彼女たちに対する気配りを忘れたことはない。

「そんなことに努力しないでよろしい」

『えへへ、じゃあ、帰つてきたらちゃんと甘えさせてね！』

「了解ですよ、お姫様」

もしここにシルヴィアがいたら頭を撫でていただろう。

ちなみにだが、灰は二人の頭を撫でるのがものすごい好きである。本人曰く落ち着くらしい。

「たしか、鳳凰星武祭の本戦が始まるぐらいに帰つてくるんだつけ？」

『うん！最近はペトラさんが休みをすこし多めにくれるの』

おそらくペトラさんの気遣いであろう。シルヴィアがしつかり休めるのならという建前ではあるが、シルヴィアの幸せを誰よりも願つているからである。

「じゃあ、その日は港に迎えに行こうか？」

『うーん、魅力的だけど生徒会の仕事で処理しなくちゃいけないのがあるらしいから、それをやつてからだから、クイヴェールの正門近くに迎えに来てもらつてもいい？』

「じゃあ、終わりそうな時に連絡してくれたら、迎えに行く準備をするよ」

迎えの約束をしてから30分ほど話してから通話を切つた。

「占いは信じる気はないけど、きな臭くなつてきてているのは間違いないか……」

七天大聖の技の中に星辰量を使つた占いがある。『識界』と呼ばれている。

灰も詳しい原理はわかつておらず、なおかつ膨大な星辰量の制御が必要なためほとんど使わないものの、月に一度、定期的に使つている。

好きなことを観ることはできず、ランダムで自分に関係のあることを見せられる。

『識界』を使い未来を見た時の光景が灰は頭から離れないのだ。

『識界』の未来は絶対起ころう故に、不安は灰の中で巢食っている。

「まあ、そうだとしても、僕はできることをするまでさ」

その声は誰の耳に入る訳でもなく消えていった。

だが、いづれ人々は目のことになる。『刀雷の魔術王』鳴神灰の覚悟というものを。

最強の星脈世代が見せる愛する者を守ろうとする覚悟の人々は震撼する。

屋上から見える景色をすこし眺めて、灰は屋上から地面に飛び降りて四人の待つトレーニングルームへと向かうこととした。

トレーニングルームは今回は綾斗のものを使うことになつていて、先にすこし体を動かしているということらしい。

綾斗のトレーニングルーム前に到着して入室の許可が出るのを待つ。

はずだつたのだが、顔認証機能で事前に灰が登録されておりすぐに開いた。

「お待たせ、準備運動は……出来ているようだね」

すでに中にいた四人は程よく汗をかいており、コンディションがいいことを物語っていた。

「なら、僕の準備運動にも付き合つてもらおうかな。6割制限を解除

して、8割にしようか

この時、灰の実力をよく知っている綺凜とユリスは特に驚きもしなかつたが、未だによくわかつていらない綾斗と紗夜は今までが6割ということに信じられなかつた。

「ああ、それに鳳凰星武祭の練習ならちゃんと僕も二人分の役割を果たさないとね。しつかりと前衛と後衛で別れて、連携もするからいつもよりハードだよ？」

灰が浮かべたその笑みに四人はただただ冷や汗をかいていた。

6割で戦っていて灰の方が経験の差によつて勝利を収めているが、

実力差はほとんどなかつた。

しかし、さらに上の8割でしかも前衛と後衛に分かれるということは灰が容赦なく魔法を使うということだ。

四人は今日は全身がボロボロになる覚悟をした。

ちなみにこの日、トレーニングルームからは悪魔の笑い声と爆発音が無数に響いたといふ。

気になること

鳳凰星武祭に向けた訓練の最終日、つまり鳳凰星武祭の前々日に行つた訓練の後に行われた恒例の反省会は灰の辛辣な言葉が発せられるかと思われたが、そんな事ではなく、ユリスに対して少し言つたぐらいで他は概ね褒め言葉であつた。なぜかと言うと鳳凰星武祭目前で精神的ダメージを与えるわけにはいかないという、灰の気遣いであつた。

そのまま解散の流れになるのだが、灰は綾斗と話したいことがあるので引き止める。

「綾斗、少し話したいことがあるからいいか？」

「うん、いいよ」

別に断る理由もないので一綾斗はすんなり了承する。

「それは私達は帰つて休むとするか」

「お疲れ様でしたです！」

「ん、おつー」

女子三人は灰が綾斗を引き止めたことを特に気にすることなく出て行つてトレーニングルームは二人きりとなる。

「それで灰。話つて？」

「うーん、一つあるけど、とりあえず『黒炉の魔剣』持つてる？」

灰が綾斗を引き止めたのは伝えたいことが一つ、もう一つは伝えるか悩んでいた。

「あるけど、なんでだい？」

腰のホルダーから『黒炉の魔剣』の発動体を取り出して聞き返してくる。

いきなりそんなことを聞かれたら、誰でも同じ反応をするだろう。「少し貸してもらえないか？」

「それは別にいいけど」

綾斗はより灰の行動が理解できなかつた。

魔術師である灰は基本的に純星煌式武装との相性が悪く、使うことはできない。

そのため、少し躊躇いながらも発動体を灰に渡す。

「ごめん、急にこんなことを言つて。ただ、確かめたいことがあつてね……」

発動体を受け取った灰は躊躇いもなく星辰量を込めて起動する。

「ちよ、ちよつと！·いくらなんでも灰は……」

魔術師なんだから起動は無理だよと言おうとしたが、口からその言葉が出てくることはなかつた。

なぜなら『黒炉の魔剣』は拒絶することなく、灰の手の中にあつた。

もちろん、灰が綾斗の星辰量の波長に合わせたわけではない。

ただ、武人としての灰の高みを瞬時に理解した『黒炉の魔剣』が大人しくなつただけである。

こいつになら、触れられても文句はないと。

「ほんと、気難しい性格をしているね、こいつは」

『黒炉の魔剣』から発せられる感情のようものを灰は薄々と感じ取つていた。

「さすがに武器として使うことは許してくれないみたいだけど、ただ持つだけなら許してくれるみたい」

「だとしても、どうやって……」

その疑問は当然のことだろう。

魔術師である灰がなぜ気難しい性格の『黒炉の魔剣』を起動することができたのか、それはあることが原因である。

『黒炉の魔剣』が僕のことを武人として認めてくれたのもあるけど、何よりも僕はね、純星煌式武装の開発をしたことがあるんだ。それが理由かはわからないけど、純星煌式武装を起動するぐらいなら出来るんだ』

純星煌式武装を開発したことのある人間なら誰でも触れるわけではない。ウルム＝マナダイトとの親和性は高くなるが、それは自作したものにのみ適用される。ただ、灰の場合もともと魔術師としては珍しくウルム＝マナダイトとの親和性は高く、純星煌式武装を開発した

ことでより親和性が高まつた故に『黒炉の魔剣』を扱うことが出来るのだ。

「まあ、詳しいことはよくわからないけどね」

灰はさすがに詳しくは教えない。『凍氷の皇帝ムフェト・シュヴァルツ』であることを知っているものしか、灰が純星煌式武装を使用していることは知らない。それを綾斗に教えることは憚られる。

それはさておき、なぜ灰が綾斗を呼び止めたのかというと、『黒炉の魔剣』において気になることがあつたからだ。

「綾斗、こいつをしつかりと扱えている自信はあるか?」

なぜ、こんなことを聞くかというと鳳凰星武祭で優勝するには『黒炉の魔剣』の力をもつと引き出す必要があるからだ。

「ううん、どちらかというと振り回されてる感じかな」

「まあ、今じゃただのよく切れる剣だもんな」

灰がそんなこと言うと『黒炉の魔剣』が心外だと言わんばかりに高熱を発する。

「あつっ!! わかつた、わかつたって! 別にお前が弱いってわけじゃないから!!」

ふんす! つとそんな擬音が聞こえてきそうな感じで『黒炉の魔剣』は高熱を出すのをやめた。

「はあー、めんどくさ…………」

そんなことを言つたら再び『黒炉の魔剣』が起ころかと思いきや、そんなことはなく静かであった。

「触れば熔け、刺さば大地は坩堝と化さん。こいつの能力はそれに見合つてゐる。たとえば、こういう風にね…………!」

『黒炉の魔剣』に少しだけ星辰量を込めてトレーニングルームの床に突き刺すと灰や綾斗のいる方向とは逆の方向に向かつて床が赤熱化して溶けていった。

「とまあ、こんな感じで軽くでも、十分過ぎるぐらいの威力は持つていいるはずだ…………つて、こら! 余計に星辰量を吸おうとするなこのクソ

魔剣!!」

なんと表現すればいいかわからないが、『黒炉の魔剣』が遊んでいるように見える。

事実遊んでいるのだろう。吸つても吸つてもいくらでも星辰量が湧いてくる灰は遊ぶのにはちょうどいい。

自らの力で浮遊した『黒炉の魔剣』は綾斗の前に戻ってきた。自分の主の元に帰ったのだろう。

「まあ、今を見ればわかると思うけど、こいつらには意志のようなものがあるとか言われるが、意志がちゃんとあるんだ。だから、今までにじやれつくこともある。うまく対話できればね」

「なんで、灰はそんなに扱いが上手いのか？」

その疑問は当然であろう。誰もが真っ先に考えつくことだ。

「こいつらの望む扱いをしてやれば、こいつらは嬉しがって反応してくれるのさ。それをうまく読取らなきや、使い手としては未熟だぜ、綾斗」

「僕にはまだまだ、出来そうにもない話だよ……」

「いいんだよ、戦いの中で見つけることの方が多いんだから。僕からの用事はこれで終わりだけど、綾斗は何か聞きたいことはあるか？」

自分の都合で残つてもらつたのだ、何かあればそれを聞くのが筋であろう。

「うーん、特にないかな。むしろ勉強になつたぐらいだし、助かつたよ、灰」

「なに、僕は四人が鳳凰星武祭で勝ち残れるように助言してるだけさ。それに、綾斗も気づいてるだろ？」

なにを、とは灰は絶対に言うことはないだろう。灰はこういう場合、大体は背中を向けて何処かへ行つてしまう。現に今もトレーニングエリアから出て行こうとしている。

「そんじや、綾斗。鳳凰星武祭勝ち残れよ」

それだけ言い残して灰は立ち去つていった。

「さあ、面白くなつてきたじやないか。楽しませてくれ、綾斗、ユリス、

沙々宮、綺凜」

後日談、灰はクローディアにトレーニングエリアの床を溶かしてしまつたことを説教されたとか。

甘えたくなる日

人間誰しも唐突に甘えたくなる日が、たまにあるのではないだろうか。いつもは甘えられる側なのに、この日だけは甘えたい。そんなにことが起ころのではないだろうか。それが起るとすれば、疲れているなどの精神的疲労が関係していることだろう。

いつもデレデレされているアスタリスク最強の星脈世代こと鳴神灰も今日は気分的に甘えたい気分だつたのだ。

家に帰り、出迎えてくれたオーフエリアと一緒にご飯を食べて、別々にお風呂に入り、そして、今はベットで膝枕をオーフエリアにしてもらつていて。

「珍しいわね、あなたから膝枕をして欲しいって言うなんて。月一の甘えたい衝動かしら？」

久しぶりと言つても、実は鳴神灰という男、オーフエリアやシリヴィアに月一ぐらいのペースでいつもとは違ひ甘えまくるのである。マフィアなどからも恐れられている灰であつても、恋人の膝枕といふものは気持ちいものであり、恋しくなるものだ。

そして、オーフエリアとシリヴィアは灰が月一で甘えたくなることを知つてゐるため、『月一のデレデレ期』と呼んでいたりする。

ちなみにこの膝枕、頭を撫でてくれるというオプションが付いており、精神的な疲れを急速に癒してくれる。

そのため、灰はすぐに寝落ちしてしまうのである。二人から遠慮なく寝てもいいと言われてゐるためである。

「僕だつて甘えたい的なあるのさ。甘えられるのは嫌？」

少し、意地悪な質問をオーフエリアにしてみる。この答えは嫌なわけがないという、答えに決まつてゐる。

「嫌だつたら今頃瘴氣で毒殺してゐるわ。それに、いつも立場が逆なんて滅多にないじやない」

「それじゃあ、この至福の時をもう少しだけお願ひしようかな」

「わたしも、こうするのは好きだし、喜んで」

どうやら、灰の最愛の彼女も甘えられるのは好きであるらしい。

「それにしても、貴方が甘えたくなるほどのが起きたのかしら？」

本当ならこのようなことは寝る前に話すのは空気が悪くなるかも
しないが、灰はその辺りをしつかりとコントロールするので、心配
はいらない。

「いやさ、僕つて警備隊の幹部だからいろいろな情報を知ることにな
なつちやうのは知ってるよね？」

「ええ、幹部権限？ だつたかしら、それで見れる情報は一通り貴方の頭
の中に入っているのよね」

オーフエリアは自分の記憶と照らし合わせながら幹部権限について思
い出す。

「そんな感じ。だから、アスタリスクの暗部の情報とかも知りたくな
くとも知つてるんだけど……」

それから灰は綾斗がお姉さんを探しており、その情報を自分は知つ
ているが、言えない状況である板挟みの状況について詳しく説明し
た。

権力というものは力を与える代わりに自由を奪う、そのことをひし
ひしと実感している灰であつた。

「ほんと、権力はめんどくさいものだよ。僕は自由がいいっていうの
に」

「じゃあ、なんで貴方は権力を手にするのを拒まなかつたの？」

そう、オーフエリアはそれを一番不思議に思つていた。灰はたしか
に警備隊に入り、生徒会にも所属しているが、それは全て灰自身の意
思であることは知つている。しかし、自由がいいのなら警備隊に入つ
たとしても幹部にはならなければ良いし、生徒会も入らなければ済む
話だ。

『ムラ氷の皇帝』エト・シユヴァルツである僕は統合企業財体から狙われることは確實だ

けど、権力があり、それによつて世間の注目が集まれば簡単には手出
しえなくなる

グランドスラムを達成した後に何も功績を残さなければ、闇の中に

葬られる可能性があるが、警備隊として今も実績を残し続けければ人々は灰の行動にずっと注目することになる。それが何よりも抑止力となるのだ。

「それに、権力があつたほうが二人を守りやすいしね」

何よりも一番はそれだ。二人を護るというのが灰の今の行動原理であるのだから。

「そうね、でも、忘れないで。私たちは貴方に守られるだけの足枷になんてならないつもりよ。私達は貴方に守られて、そして貴方を守るのだから」

「僕らは運命共同体つてことでしょ？もちろんわかってるよ」

ただ、灰は一つだけ懸念があった。

彼女たちに何かあつた時、自分は理性を保てるであろうかどうか。であった。

「貴方がたとえ復讐に囚われた悪魔になつても私達はずつと貴方のそばにいるわ。これはシルヴィーと一緒に誓つたことなんだから。灰がダメって言つても押し通すわ」

「考えてることなんてお見通しつてことか……」

灰が何を考えているかを察したオーフエリアに全てを言われてしまう。

「そんなに重い誓いをして貰つたんだ。必ず応えないとね……」

まあ、でも、今のアスタリスクの現状ならそんなことになることはない。

そう言おうとしたが、すごい眠気が襲つてきたので、その言葉を発することが出来なかつた。

「寝る？」

「そうさせて貰おうかな……つて、フィーアさん？」

寝るために頭を動かそうとするとオーフエリアの手によつて、動かすことが出来なかつた。

さすがにこのまま寝るのはオーフエリアの足に負担がかかつてしまつた。

寝るために頭を動かそうとするとオーフエリアの手によつて、動かすことが出来なかつた。

さすがにこのまま寝るのはオーフエリアの足に負担がかかつてしまつた。

まうのではないかと思うのだが……

このまま寝顔を堪能させて」

「フィーアがそうしたいのならそれでいいけど……それじゃあ、お先におやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

ゆつくりと瞼を閉じる最後の方にはオーフエリアが目を輝かせて
灰のことを見ていた。

おそらくいつも先に寝てしまうことが多いオーフエリアは灰の寝顔を堪能することがほとんどできないからであろう。

この機会にじつぐりと眺めておく魂胆である

そんなに見られたら寝ようにも寝れない気をする……

これもオーフエリアの膝枕という最高の枕のおかげだろう。

シシシオリフエリア Sideシシ
私の膝の上で灰はすぐに寝てしまつて、じつくりと眺めてられる
わ。

灰は今、どんな夢を見ているのかしら？

私は彼がすごく心配になる時があるの。重い過去を背負っている
彼がいつか押しつぶされてしまうのではないかと。
たえそもそも、私達は絶対に彼を支えるの。

……寝る前に重いことはやめましょう。

うーん、灰の髪の毛つてなんでこんなにさらさらのかしら。シリ
ヴィや私はかなり気を使つて手入れしているのだけど、勝てる気がし
ないわ。撫でてこんなに気持ちいいものなんて初めてだわ。

その後オーフエリアは寝顔と髪の毛ととじつくり堪能してから寝

たそ
う
だ

鳳凰星武祭開幕

鳳凰星武祭当日、六学園は全て自由登校となる。この間、授業が進むことはなく、星武祭に出場しない生徒は自由な二週間が与えられる。

灰も星武祭に出場しないため、二週間自由時間になるかと思えば、それは違う。星猟警備隊に所属している灰は会場警備、中央エリアの巡回など、出場選手並みに忙しい日々を過ごすことになる。

まあ、退屈することはないだろう。

灰の友人の多くは今回の鳳凰星武祭に出場するため、鍛錬相手も話し相手もないのだ。

さて、星猟警備隊の会場警備だが、幹部だけは少し特殊なローテーションとなっている。開会式、ヘルガを含む幹部は開会式に出席することとなっている。11人が一斉に会する唯一といつてもいい機会だろう。

今日もいつもと同じように起きて朝の訓練をする。

星辰量を意図的に逆流させる訓練も少しずつだが逆流可能な量が増えてきた。

休みの日も生活リズムを変えないのがこここの3人だが、少しのんびりと1日を過ごすことはある。

さて、訓練も終わり、起きてきているであろうオーフエリアの作ってくれた朝ごはんを食べる。

もし、起きてなかつたら久しぶりに料理する機会であると少しながら期待したが、オーフエリアは起きていたので作ることは叶わず、少し残念であった。

朝ごはんを食べてすぐに着替え始める灰にオーフエリアは疑問を

浮かべる。

「あれ、今日は朝から警備隊の仕事かしら？」

「いいや、会場の警備兼、開会式に出席かな」

「へー、そうなの。初めて知ったわ」

オーフエリアは初耳らしいが、確か彼女はすでに二回星武祭に出席しており、その時も星獵警備隊の幹部は全員出席していたはずだ。

「王竜星武祭の時も幹部の人たちはいたぞ？」

前回の王竜星武祭に関しては灰も出場しており、その時に星獵警備隊の幹部が全員出席しているのを確認している。

「前々回はそもそも興味もなかつたし、前回に関するてはあなたのことしか見てなかつたもの。他はわからないわ」

そこまでやる気もないのに王竜星武祭を制覇するオーフエリアの強さもさながら、灰にしか見ておらず、ほかのことはどうでもいいという、少しヤンデレかメンヘラのように思えてしまい、少し怖い灰であつた。

「相変わらずといったところだな。まあ、その方がフイーアらしいけどね」

「あら、それは褒めてるのかしら？」

「まあ、そういう事だから、行つてくるね」

「ええ、頑張つてね」

何を頑張るか、わからないが、いろいろと星獵警備隊としての誇りを保つため、だらしない姿を見せるわけにはいかない。

毎度開会式は運営委員長のありがたいお話は長いので、ずっと立ちは続けるのは何かの辛いものがある。

いつもの制服に身を包み、心の中で氣を引き締める。

何もないとは思うが、そだとしてもだらけるわけにはいかない。それは灰のプライドが許さないので。

外に出るとすでに明るくなつてお、天氣が快晴であることを物語つており、星武祭の開幕にもつてこいな天氣だ。

天氣が快晴であるほど星武祭は盛り上がると言われるが、去年の王竜星武祭の開幕は大雨であつた。

なんとも信用ならないものである。

第二代万有天羅のグランドスマラム達成した時は快晴であつたらし
いが、灰の時は大雨と微妙なものである。

たしかに、大荒れとはなつたが……

会場に一足先に入りステージ内の決まつた持ち場へと着く。

まだ選手も来ていないため静けさが漂つているが、幹部11人が揃つている姿は圧巻とも言えよう。全員が星武祭を制している猛者であるが故に当然とも言えよう。

灰たち星獵警備隊はステージの壁沿いにいるだけであるので観客からは目に入りづらい。

ただそれでも各学園が並んでいるところの後ろにいる存在は生徒たちにとつては大きなものであった。

(会場に選手たちが入つてくるまでは瞑想でもしてゐるか……)

彼らは灰を除き、すでに現役から身を引いたものたちであるが鍛錬を怠つたことのない武人たちであり、こういう時は瞑想でもして時間を潰すといいとアドバイスをもらつたのだ。

瞑想というものを眞面目にやつたことがない灰はよくわからないが、精神統一のようなものだろうという解釈をしてゐる。

七天大聖との修行はとことん戦いがメインで、唯一『調和』の第二席、レギンレイヴのみがその系統の修行をしていた。

最も彼女の場合、精神世界による戦闘によつて、精神面を鍛えられたので、少し違うが……

三十分ほどの瞑想ののち、各学園の選手が入場してくる。

灰はアルルカントの近くにいるため、視線を集めることもなく、開会式は黙々と進んでいった。

運営委員長のマティアスの話は正直、灰は全くと言つて興味がなかつた。

新しい制度の発表がされ、代理出場という形が許可され、アルルカントの優位性が強調されるかと思ひきや、星脈世代の速度に対応できるようなものが作れるかと言われば首を傾げるしかないからだ。

そして、もう一つ綺麗が負けることはないと思っているからだ。

鳴神流抜刀術を完成しかけているため、簡単には負けるはずがない。

綾斗に関しては封印によりいまいち実力を測りかねている。

だが、一週間みつちり鍛え上げたので、アルルカントよりもその2ペアしか興味がなかつた。

開会式が終わり、会場は鳳凰星武祭の開幕に盛り上がつてゐるが、それに興味を示さない灰は静かにステージを後にして星導館の生徒会専用部屋に向かつた。

鳴神琴音

開会式が終わり、ユリス、綾斗、綺凜、紗夜の四人と軽く話をしてから灰は星獵警備隊の仕事に戻った。

いくら人が足りないと言つても少し雑談の時間ぐらいは存在する。灰は先に会場の外で待つているロイド一等警備正達に合流する。彼らの部隊はどちらかといふと年齢の上の層が集まっている。

しかし、だからと言つて強さは全盛期から維持していると言つてもいい熟練者達である。

そして、ロイド一等警備正。

本名はロイド・チャ尔斯。

彼は鳳凰星武祭に二回、王竜星武祭に一回出場しており、どちらも好成績を残している。

鳳凰星武祭はベスト4と準優勝、王竜星武祭は準々決勝でヘルガと当たつてしまい、負けてしまうもヘルガをかなり手こずらせたほどの実力者である。

青髪の偉丈夫でハルバートを片手で振り回す。二つ名は『狂斧槍』バルトフィール。全てを片手でなぎ倒すことからつけられた。元界龍第七学園の序列三位でもあつた。

もともと彼は序列には興味がなく、ただ強くなることだけを目標に友人達と切磋琢磨していた。

だが、当時の序列三位に難癖をつけられて快勝、一躍注目の的となつた。

その後星武祭に三回出場して界龍を卒業した後は星獵警備隊へ就職。また、彼と一緒に鳳凰星武祭を戦い抜いた戦友であり、彼と付き合っていた、シャーリー・カルテ。こちらは界龍の序列7位。『氷花艶撃』の二つ名を持つていた。彼女も彼と一緒に星獵警備隊に就職。今では彼と同じ一等警備正になつており、ヘルガの秘書役を務めている。

そして、彼女は今はヘルガと共に会場の警備に当たつている。

「すいません。お待たせしました。ロイドさん」

「なに、俺らも全員が集まつたのはついさつきだから、気にしないでくれ灰くん」

灰は幹部という立場上一等警備正よりも階級が上であるが、年上の人たちを呼び捨てで話すのは抵抗があり、彼らも灰の懸念を理解していたのか、そこらへんはあまり注意することはなかつた。

というよりか、灰は星獵警備隊の他の隊員たちも全て年上であるため一番下の階級の隊員でも呼び捨てで呼ぶことはない。

「さてと、僕たちは外縁部の見回りに行きますか」

全員が集まつたことで、灰を先頭としてロイド達が後ろへと続く。十人でひとつつの部隊としている星獵警備隊は部隊長として一等警備正、または二等警備正がつくことになつていて。そして、ランダム配置で幹部が部隊長の上に着く。その場合十一人で一部隊となる。

有事の際、例え翡翠の黄昏などの大規模テロ、の場合はまた別の部隊編成となる。

外縁部の見回り隊は六部隊配置されており、等間隔に並んでいる。メインスタジアムのシリウスドームから外縁部へとまつすぐ続く道を進み、アルルカントの正門付近に六部隊の配置完了を待つ。

それから間もなくして六部隊の準備が完了し、灰達は外縁部を時計回りに周り始める。

各学園との間を約15分ほどかけてゆつくりと歩き進み、それを繰り返す。

ちょうど昼休憩を取る時は三部隊ずつ取り、45分間存在する。お灰は初日の休憩は星導館の近くで取ることになる。

そして、その途中にある港湾部で灰は懐かしい後ろ姿を見つける。アスタークでは珍しい浴衣を着ており、腰まである長い茶色の髪

の毛は、灰のように軽くまとめてあるだけであり、その姿に灰は見覚えしかなかった。

「琴音……か？」

ここにいるはずもない、星脈世代の義理の妹の名前を灰は呼んだ。だが、灰の小さな声は聞こえるはずもなかつたが、灰のことをずっと慕つてきた琴音にはそのような小さな声も聴き逃すことはなかつた。

キヨロキヨロと周りを見渡すと、ちょうど真後ろにいた灰の存在に気づくとこちらに駆け出してくる。

「兄様〜!!」

そのまま灰に飛びつく。灰はしつかりと琴音を受け止める。

鳴神琴音。

灰の義理の妹で星脈世代。槍をメインに使うが、薙刀、小太刀、弓、など器用に色々と使える。現在は小6で来年にはアスタリスクに来ることになつてている。

兄弟がいなかつたが、灰が義理の兄となつては兄という頼もしさに惚れ込み、今では重度のブラコンとなつていて。灰がグランドスラムを達成したことがさらに拍車をかけている。

髪型は灰の真似事をして軽く結ぶだけにしていて。灰曰く、そんなことしないで自由な髪型にしたほうがより可愛くなるとか、

琴音だけがブラコンなわけではなく、灰も軽度ではあるがシスコンが入つていて。

シルヴィアやオーフエリアと比べることができないほど大切な存在であり、琴音が小学校でいじめられた時（影で数人からであり、ほとんどの人間は知らない）その主犯格とその親を土下座させるまでに懲らしめたとか、なんとか、小学生相手に大人気ないかもしれないが、妹のためなら問題ないこと（シスコン補正）

普段は着物をしている。なお、灰も実家では着物を着る。

そのため、今日、アスタリスクに来た時も和服ですぐにわかつたの

だ。

さて、話を現実に戻そうか。

琴音は灰に抱きついたままであるが、一応なりとも灰は仕事中であり、このままは色々とまずい。

灰をよく思わない連中は数あれど、灰に本人は興味すら湧かないが、琴音にそれが移るのはまずい。

「すまんな、琴音。一応なりとも今は仕事中だから、終わつたら会いに行くから、それまで待つてもらえないか？」

「はわわ。すいません。兄様。そうですよね、星導館学園の制服を着ていらつしやらないので、やはり、お仕事でしたか……」

シュンツと、頃垂れて灰から離れようとする。大好きな兄の仕事を邪魔してしまつたことに対する罪悪感のためであろう。

すると、そんな時、後ろから声がかかる。

「灰くん」

ロイド一等警備正であった。

「すいません。ロイドさん。仕事の最中なのに」

「なに、気にすることないよ。その嬢ちゃんも、久しぶりに君に会えてテンションが上がつてしまつたのだろう。それに、今日はまだ星武祭初日。問題なんてそういう起こりやしないさ。だから、久しぶりに兄妹の時間を楽しんできな」

するとそんなことを言つてきた。つまり、仕事は別にないから遊んできていいよということだ。

一応彼らの上司という立場である灰にとつて、それはなんとも言えないものであつたが、久しぶりに琴音と会えて、ゆつくりと過ごす時間てくれるというのであれば、甘えるしかないだろう。

「隊長には俺から上手くいつておくからさ、お前さんはまだ若いんだ、やりたいことりやるといい」

そう、ロイドは言つた。

その言葉に、琴音はパッと目を輝かせる。

「なら、お言葉に甘えさせてもらいますね。ロイドさん」

「それじゃあ、また明日、会場前で」

そこで灰はロイドと別れ、取り出した帽子を目深く被り、カモフラージュをする。

さすがに、星獵警備隊の服のままは色々まずい。

「行こうか、琴音」

「はい！兄様！」

琴音の嬉しそうな表情を見て、灰は嬉しく思うのだった。

兄妹の時間

ロイドに今日の仕事を任せて、灰は琴音と一緒に歩いていた。

今の時間、灰と仲の良い知り合いはみな試合があり間違えても鉢合わせることはないだろう。

若干一名、可能性があるが、その時は消えてもらうので問題ない（シスコン補正）

ちょうど二人で中央区の商店街を歩くこと、小一時間。琴音が思い出したかのようにある事を灰に言う。

「あ、そういうえば兄様。父様から兄様の和服を渡すように言われたのですが……」

灰は琴音と同じで実家では和服をずっと来ているが、アスタリスクに来てから全くと言つて良いほど来ていないため、そろそろ寂しくなってきたのだ。

「わざわざ持つててくれたのか、ありがとな」

そう言つて、隣にいる琴音の頭を優しく撫でる。

琴音の頭を撫でるのはアスタリスクに来て以来、一回もなく、かなり久しぶりであつた。

ちなみに、琴音の表情は若干人には見せてはいけないような顔になつていたが、スルーする。

「じゃあ、一旦僕の家に荷物を置いてから出直すか。琴音もずっと持つてて重いだろ？」

「兄様の生活している家!!絶対に行きたいです！」

琴音の持つてている荷物は灰の和服であり、和服は数着でもかなり重い。

それをずっと持たせたまま歩くのも、せつかく来てくれた琴音に申し訳ないので、家に寄ることを提案する。

琴音は灰が寮で生活していないことを知つており、行つてみたいと

は思つていたものの、なかなか言い出せずにいたので、今の灰の提案はまさに神からのお告げのように思えたのだ。

「それじゃあ、行こうか。荷物は持つよ。僕の服なら、僕が持たないとね」

灰は琴音から荷物を受け取る。

兄様の荷物は私が持ちます！、と言いつつではあつたがすんなり渡してくれた。おそらく、灰の家に行けることで頭がいっぱいなのだろう。

ただ、灰も一つ忘れていることがあつた。そう、家にオーフエリアがいるかもしないことだ。

彼女は朝は一緒に家を出たが、その後すぐに行く方向が違つた為、今レヴォルフにいるか、それとも家にいるか、おそらく、家に帰るときオーフエリアは灰に連絡しているだろうが、生憎とさつきまで仕事中だつたため、携帯の電源は切つており、メールを確認していない。

さて、二人で一旦灰の家に戻るために歩き出したところ、琴音があるカフェに視線を向けていたことに気づいた。

そこはシルヴィアやオーフエリアが以前話していた場所であり、イチゴの特大パフェで有名らしい。大きいだけでなく、味もしつかりとしていているとか。また、普通の飲み物や食べ物も高レベルである。

ちようど歩き疲れたところなので入つてみることにする。

「少し疲れたら、休憩がてらここで休もうか」

琴音の体力は星脈世代だとしても、まだ低く1時間ほど歩けばさすがに疲れる。

その点灰の場合、厳しい修行を日々自分に課しているのでこの程度では疲れはしない。

琴音はそれを理解していたが、灰が自分に気を使つてくれたこと理解する。

おそらく自分がイチゴの特大パフェに目を奪われていたのがばれてしまつたのだろう。

少し恥ずかしく思う琴音であった。

灰がそのことに気づいたのは家に着く数分前であった。

「あれが兄様の家……」

目を輝かせている琴音には申し訳ないが、別に豪邸でもないので、少し恥ずかしく思えてしまう。ただ、灰の実家よりは大きいため、琴音にとつてはかなり大きく映るのだろう。

ただ、他の地域の住宅と比べれば大きい方だが、周りは灰の家よりもさらに大きいのだ。なにせ、ここはアスタリスクの1等住宅地なのだから。アスタリスクにある大企業の偉い人間たちは、皆ここに住んでいる為、警備も最高峰でプライバシーもしつかり保護されており、ここ以上に良い条件の場所はないだろう。

「周りの家に比べれば小さいけど、実家に比べたら大きいからね、結構広く感じるかも」

「…… そういえば、兄様って今は一人暮らしなのですか？」

琴音は自分で浮かんできた疑問を口にする。

灰は実家を離れ、アスタリスクに移住してから、寮ぐらしを経てこの家に住むようになると一人暮らしすることになつてているはずであるが、灰の家は2階の灯りがついているのが目に入つたからだ。

星獵警備隊の仕事中は仕事用の携帯しか電源入れていなかっため、フィーラがいつ家に帰つてくるかはわからない。

シリヴィとフィーラには仕事用の電話の連絡先を教えていたが、緊急以外は連絡しない決まりとなつてる。

プライベート用の携帯を、琴音と一緒に行動するようになつてから、すぐに電源を入れなかつた灰のせいである。

まあ、本人いわく、数年ぶりに再開した妹の成長した姿を見るのに夢中だつたから、仕方のない!!らしい。

重度のシスコン補正が入ると、恋人である二人の優先順位が狂ってしまうことがあるのだとか。

(後日談)

さて、灰のシスコンがどの程度かわかつたことで、話を本題に戻そうか。

「あー、えっと、一緒に暮らしてん人はいるよ」

灰には珍しく歯切れが悪く、少し顔を逸らす。このことに琴音は疑問をもつ。

星獵警備隊の活躍で灰の姿が報道される時、星獵警備隊の事件では常に他の隊員の先頭に立ち続け、いつも堂々としている、自分の兄はこのような歯切れの悪そうに物事を言うだろうか？

「まあ、とりあえず家に帰ろうか。怪しいやつじゃないし、琴音にも紹介したいから」